
異世界エース

兄二

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界エース

【Zコード】

N6931W

【作者名】

兄一

【あらすじ】

地球軍人型機動兵器バイロット、望月虎鉄。エースと呼ばれていた彼は、最後の任務を終えた時、異世界に召喚される。

召喚されたのは中世ファンタジー世界。龍が闊歩し魔物がうごめき、魔術と科学をあわせたような巨大なロボットが存在するアンバランスな世界。

その中で、虎鉄は召喚されし者として人型機動兵器SHに乗れと言われる。

召喚当初、最後の任務を終えたためか、無気力状態だった虎鉄だが、

特別な機体のAI部分を担う少女や、彼の専属メイドとなつた少女との出会いを経て、彼は事件に巻き込まれていく。

つまりこの、元エースが、女の子と機体に乗り込んで戦う話。
主成分は、主人公のチートパイロットぶり、女の子との絡み、一抹のファンタジー成分です。

プロローグ・エース

始まりは、ふと突然に。

宇宙。

黒が支配するその空間にて、人型機動兵器が流星の如く駆けていた。

『望月少尉！　聞こえますか！？　目標まで後五百メートル！！』

「クピットの中に響く声を、男は黙殺した。

悪意ではなく、余裕の無さを以つて返す。状況は、返事も出来ないほどには、切迫していた。

前方には起動寸前の敵、人型機動兵器。

そして、それを守るような、集中砲火の嵐の中を、機体は駆ける。ただ、黙して、男は、地球軍、望月、虎鉄は前へ向かつて機体を走らせた。

前方にある、ソレは危険だ。

火星で建造された新兵器。時空間圧縮という新技術を用いて造られたその機体は無人機であり、一度起動すれば、誰も止められない、破壊を撒き散らす修羅と化す。

追い詰められた、火星軍の最後の一手。

それを止めるために、虎鉄はひたすらに、敵弾を避け、その機体へと肉薄する。

『ミサイル！　アラート！！』

年若い通信士の男の声も、どこか遠い。

ただ、目前にミサイルが迫つてくるのが見える。

虎鉄は半ば無意識に操縦桿を左へ倒した。

それに反応して、大きく左に逸れる機体。

背後で、爆発が巻き起こる。

避けた。だが、それでは終わらない。

すぐさま、虎鉄は機体を上下左右へと激しく揺さぶる。

駆け抜けていく閃光。

もう、シールドは無い。避ける他の手段も無かつた。

そう、もうシールドはないし、左腕もない。

ライフルも捨ててきた。ミサイルも、何もかも。ウェイトになるからだ。

防いだところで、倒したところで、焼け石に水。

だから、あるのは、手の中のレーザーブレード一本だけ。

それだけで、敵機五百の集中砲火を潜り抜け、最終兵器を破壊する。

それでも、虎鉄は呟いた。「なんと簡単な任務か」。

喉が渴いていた。まるで砂でも多量に飲み干したように、水分はどこかへと消えていた。

それでも機体は飛び続ける。

『目標との距離一百一』

思えば、この通信士とも長い付き合いだ。

心のどこかで、声でも掛けたいと思ったが、声は出なかつた。

だから、モニタに向こうに無理やりに笑みを作つて返す。そして。

『有効射程距離に入ります！』

捉えた。

二〇〇〇年

青い機体が、たった一本のフレームを構える。

- 1 -

枯れたように思えた喉から、雄叫びが漏れた。

その距離は

零
に

『目標、
撃破！！ やつた！ やりました、
虎鉄さん！』

これがひとした機体の脳を、トレーニングが貫いでいる

何か、言葉にしようと思つたが、やめる。

そうして、虎鉄はシートに詰め込む間に籠を預けた。

そう思って、大きくため息を吐く。

「エネルギー反応増大…………つ！？ 虎鉄さん！－！」

機体の方でもそれは捉えていた。

目の前の機体の中でエネルギーが爆発しようとしている所を。この最終兵器の圧縮された時空間が、元に戻ろうとしているのだ。周囲にいた火星軍の機体は蜘蛛の子を散らすように逃げ出している。

だが、虎鉄の機体は動かない。
動けなかつたのだ。

機体のバーニアは焼け付いていて、腕や足も衝撃でろくすっぽ動かない。

そして、虎鉄自身も、疲労で指一つ動かない。
だから、虎鉄は枯れた喉を振り絞つた。

「……じゃあな」

光の奔流に飲み込まれる。

それが、宇宙を駆けたエースの最後だった。

『遅いぞコテツ！』

「と、言われても……、な！」

広い荒野で、機械の巨人が剣で打ち合つ。
まるで、騎士甲冑じみたデザインの、二人の巨人は、荒野を飛び
跳ねては斬り合つていた。

「くつ」

異世界へと呼び出され、望月虎鉄が、コテツ・モチヅキとな
つてから、一週間が経過していた。

プロローグ・エース（後書き）

見切り発車でスタート。

テンプレ異世界モノを一度やってみたかった心境。

読み切りレベルで終わるやも知れませんが、よろしければ、お付き合いください。

1話 白黒の巨人

虎鉄が爆発の後に目を開いたとき、そこにいたのは閻魔でも神でもなく、ただの女だつた。

その女は己を王女だと言い、そして、魔法で虎鉄をこの世界に招いた、と言つた。

虎鉄は何の疑問も持たず、それを受け入れる。

『時空間圧縮の爆発に巻き込まれれば、こうなつてもおかしくはないか』と。

そして、あてもない虎鉄は、言われるがまま、ソムニウム王国軍のエトランジエとなつた。

「コテツ。お前は本当にエトランジエなのか？」

「それは王女が保障しているが」

今日の調練を終え、機体から降りて、コテツの教育を担当する騎士団の団長、シャルロッテ・バウスネルンと王城の廊下を歩いていた。

「それにしては弱すぎないか？ コテツ。お前は私の部下の中でも中の下だ」

「ならば、そもそも他の異世界人はどれほどだつたんだ？」

”エトランジエ”。この言葉が、この世界でコテツを括る言葉だ。異世界から呼び出される、人型機動兵器、シユタールヘルツォーク、通称SHの操縦に長けた、もしくはその素養がある人物のことだ。

「この国は、いつの時代も必ずエトランジエを一人保有する。彼らは、戦争があれば駆り出される他、国際親善試合などに出場し、国の立場を担うこととなる。

「……そうだな。先代は素晴らしい操縦技術の持ち主だつた。我が国では思いもよらない操縦技法を行つていた。曰く、俺の動きは”ろぼあく”の”げえむ”と同じ。だそうだ」「……」

コテツは押し黙つた。

言葉の端々から、どうにも、歴代エトランジエが異世界人だとうことを痛感する。

又聞きとなるが、先代は瞬く間に操縦技術を吸収し、トップクラスの操縦士になつたと言つ。

そんな中、

「お前は、最初からSHに乗れた割に」

そう言つて、シャルロッテはその眉間に皺を寄せた。

シャルロッテは、二十過ぎくらいの金の長髪をストレートに伸ばした女で、訓練中などの戦闘時はポーテールにして括つている。目の色は赤みがかったいて、つり目気味。身長は百七十センチ後半と言つたところか。

「期待されても出来る」とと出来ないことがある

対するコテツは、平均的な日本人の顔をしていた。

短い黒髪と、黄色人種らしい肌。その中で身長だけは百八センチ超と高いほう。

顔つきは精悍であると言つても良いのだが、どうにも顔の印象は薄い。

そして、一人は揃いの黒い軍服を着ていた。

「早く使い物になれ。親善試合で負けるわけにはいかん

そう言つて、シャルロッテは横道に逸れしていく。

コテツは直進した。部屋へと戻るのがそちらだからだ。

「……一週間。すぐ過ぎ去つたが、十分長い期間だったか」

そう呟いて、コテツはベッドに倒れこんだのだった。

その期間は、周囲の人間がコテツに失望するのに掛かつた時間だ。操縦系統が、コテツの居た世界の機動兵器、DF^{ディストラクションフレーム}と同じだつたがやつとだつたコテツへの失望の落差は非常に大きかつた。おべつかを使って擦り寄つてきたSH^{スカイハーパー}乗りは三田で皿つきを馬鹿にするようなものへ変えた。

おじぼれに預からうとやつてきた王の家臣たちは六日で姿を消した。

今ではまともな態度を取るのは、シャルロッテと、コテツを召還した本人である王女くらいか。

他にもいるが、実に数が少ない。

「コテツさん、起きてください。コテツさん」
そして、今、コテツに声を掛けている女性も、数少ないその一人だ。

「何か、用があるのか？」

すぐさま、コテツは身を起こした。

すると、メイド服の女が視界に飛び込んでくる。

リーゼロッテ・クリッション。エトランジエであるコテツ付きのメイドである。

茶色の髪を三つ編みにし、後頭部で丸く纏めた、碧い田のむつとりとした女性だ。

印象的なのは、頭にある狐耳と、大きな尻尾。否応なく、異世界を感じさせてくれる。

「アマルベルガ様がお呼びです」

「わかつた、すぐ行こう」

言つて、コテツはベッドをから出て外へと向かつた。

アマルベルガとは、コテツを召還した張本人、王女である。待たせるわけには行かない。

コテツは、リーゼロッテを伴い、廊下を歩くこととなつた。

「コテツさん、もう、ここには慣れましたか？」

「……一応はな。慣れるものだ。機動兵器が当然のように存在するのに、生活レベルは中世と大差ないこのアンバランスにも「よくわかりませんけど、コテツさんはこことはまったく違つたところから来たんですね？」

「宇宙をふらふらと、だ」

「宇宙？」

「そう、宇宙だ。宇宙で、火星の人間と戦つていた。思えば長い戦争だつたな」

この世界の機動兵器は密閉性が無いものが多い。

例え宇宙を見てきた者がいても、それはほんの一握りよりもさらに少なく、天体に関する学問もあまり進んでいないため、この世界では宇宙はどこか遠いものだつた。

「どうして、戦争が起つたんですか？」

「早くどこかに行け、邪魔だから。と言つても、こぜ手を離れるとなると惜しくなつた。だから、飼い殺しにしようとして手を噛まれた」

地球が人口の限界を迎へ、余つた人類を火星に押し込むことにしたが、火星から取れる資源、そして移民の労働力は惜しかつた。

だから地球側が指導の名目で圧政を働き、力を付けないように上手く搾り取つた。

ただし、それでも不満とは爆発するもので、戦争は起つた。たとえ、物が無くとも不満によって生み出された鬼気迫る火星軍の戦いは、一時期腑抜けた地球軍を追い詰めるほどだった。

それが、コテツの駆けてきた戦場のすべて。

コテツが、エースだつた。

「帰りたいですか？」

「ひらりを気遣う様な問い。

「……いや、そうでもない」

帰りたいと、不思議と思えないのは、すべき」とを終えてしまつたからだろうか。

コテツの心には一切の焦りが無かつた。

「任務中と、爆発前。一度も死んだと思つたからな。ビリにも何の実感もない」

帰つてすることも無ければ、戦争終結後に結婚を誓つた女性もない。

「逆に、いいのかもしけんな。役立たず判定を受ければ、どこかの田舎で畠でも耕そつか」

「だ、大丈夫ですよ、コテツさん！ キツと、すぐに上手になります。焦らないで、ゆつくりやつていけば」

言われて、コテツは曖昧な笑みで返した。

（果たして、俺に出来るだらうか……）

最後の任務を終えるまでの、あの頃の熱は、今は既にない。

まるで、燃え津のような、燃え尽きた灰だと、そこでふと、中庭に面した廊下から、一機のSHの姿が見えた。

「……あれは？」

黒と白の、騎士甲冑を模したようなデザインとは一線を画す、どちらかと言えばコテツのいた世界の機動兵器に近い空気。下半身のがつしりとした空気とは対照的に、上半身はスマート。腰元には一つの巨大なバインダーが付いており、力強い印象を与える機体だ。

腕に刻まれた不可思議な文様が、何故かコテツには印象的だった。

「ディステルガイスト。我が国の所有するアルトの一機です」

リーゼロッテは、誇らしげに笑う。

「アルト……、初期型SH、だつたか」

「はい。最初のエトランジエ様が造つたSHバリエーションの一つです」

「なぜ、中庭に飾つてあるんだ？」

SHは、兵器だ。なのに、中庭にまるで飾るように放置されるのには、違和感がある。

「パートナーが、いないんですよ。気難しい機体みたいで。たまに活躍してるみたいなんですが」

「たまに？」

「私が生きてる間に一回だけ、です。よほど腕のいい操縦者じゃないと認めてもらえないらしいですよ」

「先代エトランジェは？」

「コテツにとつてはSHもただの兵器としか映らない。

だから、兵器が人を選ぶと言うのはどうにもピンとこないものだつたが、先代は大層操縦が上手かつたのではないかと思い当たつた。それほどの人物ならば、このような機体でも乗りこなせたのではないか、と。

が、リーゼロッテは首を横に振る。

「一度、乗つたことはあるらしいですが、曰く『あれはピーキーすぎる。ハイスクア狙い向けだけど、ハイスクアなんて狙う場面はない。元々パイロットじゃないからそういう技術も操縦勘もないし、多分年単位かけても使いこなせないよ。そもそも元がもやしの貧弱一般人じや即ミンチ』だそうです」

その言葉に、コテツは先代への觀を改めた。
ゲーム、ロボアク、などの語彙がしばしば出てくる割に、戦争に対するシビアな考えを持つた人物だつたらしい。
ハイスクアを喜び勇んで狙うような人物でないことは、好感を覚える。

「なるほどな」

「すごい人だつたらしいんですけどね。戦闘の呼吸への勘が鋭くて、隙を抉り込むのが得意だつたらしいです」

「そうすると、ずいぶん我侭な機体だつたんだな」

「まあ、アルトなんて搭乗者が決まつているほうが稀なんですけどね」

言いながらも、二人はディステルガイストの前を通り抜ける。二人を、モノクロの巨人が見下ろしていた。

1話 白黒の巨人（後書き）

主人公最強を標榜し、事実その通りになる予定ですが、見せ場まではまだしばらく、と言つたところ。

2話 灰と塵。

王女の部屋。

上品な調度で纏められたその部屋に、王女が優雅に椅子に座つていた。

「よく、来たわ」

「用件は如何様な?」

本来なら謁見という方向でも良かつたのだが、今のコテツの立場は非常に微妙である。

現状のコテツの状況を耳目に触れさせること、リスクが高かつた。そんな糾弾されかねない状況。

それ故に、なんらかの噂が立つ可能性に目を瞑つて、王女はわざわざ自分の部屋にコテツを呼んだ。

「調子を聞きたいだけよ。教えてちょうだい」

「変わりなく。良くも悪くも」

「そう」

落胆する様子もなく、アマルベルガは言った。

「まあ、所詮一週間と言つたところかしらね。これからも、精進な

さい」

「了解」

「貴方はやつとのことで引っ掛けで来た私のトランジエなのだか

「う

アマルベルガ自身は、魔法の歴代の使い手といつわけではなく、魔法処理レベルも最高位というほどではない。

故にこそ、此度のエトランジエ召喚は難航したと言へ。

（本来なら何も引っかからなかつたところを、時空間圧縮の開放に巻き込まれたせいで俺が引っかかりやすくなつた、と言つたところか）

心中、コテツは考察するが、言つよつた事情でもなんでもない。押し黙るコテツに、アマルベルガは続けた。

「不完全ながらも、急ぎ召喚を行つたのは不穏な隣国との戦いに備えるため。エトランジエは我が軍の柱だわ」

異邦人を柱にするのは如何なものかと考えたが、コテツは何も言わないことにする。

「故に、急ぎ強くなりなさい。今はいるだけでも構わない、それだけでも牽制にはなるから。だけど、そのうちすぐに貴方の実力は世間に晒されるでしょう。そうなつたときが、我々の命日かもしれないわ」

「善処しましょう」

エトランジエは滅法強い、一個師団とやりあえるクラスだ。といふその風評がある限り、相手はコテツと、ひいてはこの国に手を出すことを躊躇つてくれるだらう。

問題は、それを本当にしなければいつかはばれる。そして、この国の軍にとつてエトランジエが心の支えだと言つのなら、エトランジエの弱さは士氣の低下に繋がり、戦場は不利になる。

(どんな国だ、一体……)

もしくは、世界すべてが抱える問題なのか。

「もう戻つてもいいわ」

「了解」

退室しながら、コテツは思いを馳せる。

果たして、たつた一機の機体がこの世界に与える影響力はどれくらいだろうか。

確かに、コテツの世界にも一機で戦況を変える者は居た。そもそも

もコテツもその一人。

だが、この世界はそれ所ではない。

たつた一機で世界を変えかねない。国一つを滅ぼしかねない。

「リーゼロッテ。ここで分かれるでしょう。少し中庭で休憩してくる

「あ、はい。では」

すると、リーゼロッテは氣を遣つたのか、何も言わずに歩いて去つた。

コテツは中庭に出て、草の上に寝転ぶ。

「……エースか。笑わせる」

そう呟いて、コテツは目を瞑つたのだった。

「起きていただけますかね？ その人」

軍人と言う職業柄、コテツは気配に鋭い方だ。
近づいてきた人間が声をかけた時点で、すぐにコテツは身を起した。

「何か用か？」

起きた視線の先にいるのは、黒髪の少女だ。ぱっと見ショートカットなのだが、首元から太もも辺りまで、尻尾のような髪が一房、まっすぐに流れ落ちている。

「いえね、こんなところで寝ている人は珍しいものですから。気になつたんですよ。なんてつたつて面白そうじゃないですか」

「そう言ってコテツを見つめる瞳は金。年は少女と言つてもいいだろつ。

敬語を使つてはいるが、その調子は明るく、まったく畏まつたものを感じさせない、逆にフランクな空氣だ。

衣服は、何故かブラウスに、短いスカートだつた。

「君は誰だ？」

「私はあざみ。彼の、エーポスですよ。今代エトランジエさん」

そう言つて、彼女は背後のモノクロの巨人を指差した。

「エーポス……。君が、ディステルガイストの」

エーポス。初期型SHに存在する、言わば女性型AI。強力な機体の制御を一手に担つ存在。

「本当に、人型なんだな。不可思議だ」

実際に出会つたのは初めてだつたコテツは、好奇の視線を向ける。その視線に怒ることもなく、あざみは笑つた。

「仕方がありませんね。初代エトランジエは機械工学に長けた人物でしたが、機体制御のAIは専門ではありませんでした。それ故に、魔術を使って作り出した人工生命体である私たちがAI制御を担当するのです」

「なるほどな」

「それに、我々アルトは、機械と魔法のハイブリット。ただのAIでは制御し切れませんからね」

誇らしげに、あざみは言つた。

コテツは、その言葉に首を傾げる。

「ふむ、では現行機であるノイにエーポスがない理由を聞いても？」

最初期に造られ、初代エトランジエが何らかの形で関わったSHをアルトと呼び、以降、この世界の人間がそれを解析して製作した機体をノイと区別する。

その、ノイにはエーポスはない。

「当然ですよ、それは。私たちアルトを模して造ったのがノイ。性能は足元にも及びませんから。エーポスは必要ありません」

「そうか。だとすれば大層強いのだろうな。君は」

「貴方はどうなんですか？ パイロットとして。ねえ？ 今代さん」

「俺は、今の所練習機さえ乗りこなせそうにないからな」

諦めたように、「コテツは言つ。

「練習機を、ですか……、それは大変ですね」

慰めるでもなく、あざみは返した。

むしろ、面白くなさそうな目をしている。

やはり、エーポスとしては操縦の得手不得手は重要な評価項目なのだろうか。

だが、慣れた視線だ。コテツはあっさりと受け流す。

「今回のエトランジエは外れみたいですねー」

「かもしれません」

「では、さよなら」

あっさりと、会話は打ち切られ、あざみは自分の機体の中へと入つていった。

「トツは、部屋へと戻ることにした。

「トツは、部屋で一人考える。

（期待……、するだけ無駄だ）

期待には応えられそうもなかった。

期待に応える気概がないのだ。

むしろ、あざみのような反応がいい。

あれくらい、淡々としているほうが気が楽だつた。

期待も失望もなく、事実だけを見つめる。

（そう思えば……、中庭に居たときがもっとも心安らいだかもしか
んな）

そして、いつそ逃げ出してしまおうか、と少し考えた辺りで、その考え方を「トツは笑つた。

逃げてどうする。やりたいこともないくせに。
どうせどちらにしたって朽ちていくだけ。

逃げても逃げずとも変わりない。

(まあ……、結局はのうと生きて、いつかどこかで死ぬだけか)

国はHTランジュを失いたくない。

それゆえ、コテツが戦場に出られるレベルになるまで、戦闘に出そうとはしないだらう。

しかし、コテツはこれ以上に操縦が上達する気がしない。

そのため、いい加減に痺れを切らした上が彼を不要と判断するまでの時まで、コテツは生きていられる。

(じぱりくは……、ほりと過いしてみるか)

死ぬその時まで、ぼんやりと物事を考えながら過いすのもいい。と、コテツは考えていたが。

しかし、やつはならなかつた。

「ジルエットの空中戦艦！ 何故ここまで接近を許した！…」「アマルベルガ様！ 相手はステルスを搭載していたようです！」

「敵S.H.、来ますーー！」

慌しい周囲。

聞きなれた音。

ただ、ぼんやりとコトツは空に浮かぶ鉄の塊を眺めていた。

2話 灰と塵。（後書き）

早く無双までたどり着きたこと。」

その日の訓練を終え、『テツは王城の廊下を歩く。

「『トツ。お前もす」』とはマシになんてきたんじやないか?』

シャルロッテが、言つ。

「そうか?』

『テツが聞き返すと、シャルロッテは珍しく笑みを返した。

「まだ色々と粗末なものが、しかしたまにこちいらが驚くような良い動きをする。そういう奴は良い操縦士になれ!』

顔には出なかつたが、むしろ『テツの方が驚いた。まさか、この鉄面皮が笑みを向けて来ようとは。少し、むず痒かった。

「しかし、それもこれから訓練次第だ。さ、明日も頑張れよ!』

「了解」

それを求められる場面ではなかつたがコテツは敬礼で返した。軍人時代の性、と言つてもいい。ただ、なんとなく敬礼で返し、シャルロッテは満足したよつてコテツを見て、廊下の道を横に外れた。

そして、去つていくシャルロッテを見送つて、コテツは中庭に出了。

草原に転がつて、目を瞑る。

思い出すのは、シャルロッテの『お前もすこしほマシになつてしまつんじやないか?』という人を褒める言葉。

それともう一つ。訓練中にだが、王女騎士団長に言われた言葉がある。

『まだダメなんですか? 此度のエトランジエは本当に使い物になりませんねつ……』

コテツは、目を開いて空を見上げた。

(嬉しくも悔しくもないとは、随分末期だな……)

腑抜けた、と言つ表現が正しいのか、日和つたというべきか。褒められて発奮することも、罵られて悔しがることもない。

もし、そんな状態なら、いつして中庭に寝転がつてゐるわけもない。

そんなコテツに語りかける人影があつた。

「あら、また来たんですね貴方」

「悪いか」

「悪くありませんけど、珍しいですよ? 元々ここに来る方なんてほとんどですし。それに、エトランジエ様だからって特別扱いしませんしつ。」

そのあんまりと言えばあんまりなまつすぐな言葉に、コテツは久

々に口の端を吊つ上げて苦笑を作つた。

「だから、いいんだ」

「はあ……？」

よく分かつていなさげなあざみに、コテツは続ける。

「その方が、気が楽だ」

だから、毎日のように訓練が終わればコテツはいにいに来るのだ。
あざみは、来たり来なかつたりだ。

「あらあら、意外と纖細？ そつは見えませんが

「正直言つて煩わしい」

はつきつと言つコテツにあざみは苦笑で返す。
あざみはコテツを特別扱いしない。期待もしなければ、エトランジュとして蔑むこともしない。

色眼鏡なしで操縦者としての事実を見ている。

「それをシャルロッテに言つたら最後ですよー？」

「それはぞつとしないが」

「足腰立たなくなるまで訓練させられる……、つていうか、王女に
対しても不敬罪じゃないですか？」

「不敬罪で死刑か」

「前代未聞のエトランジュ様ですね」

そうして、二人は少し黙る。

その後、しばらくしてから、ふと、思いついたかのよつてあざみ
は聞いた。

「で、結局、あなたはなにがしたいんですか？」

突然の質問だった。

ただ、あざみの顔は興味津々と言つたところ。

「なにを、とは」

「いえね？ 今の心境をどうぞ、と。一部から期待され、多数からは蔑まれる現状に、望まずやつてきた身としては」

楽しげに、聞いてくる。

なんとも悪趣味だったが、その気の遣わなさがコテツには好ましい。

「恨むとか、復讐してやりたいとかこれ拉致だらマジで、王家ぐるみとか何考えてんだ殺すぞとか、シャルロッテの胸に顔をうずめですーはーしたいとかないんですか？」

そして最後に。

「それとも……、一念発起とか、しちやつたりします？」

その言葉に、コテツは一度あざみから視線を外し、中庭から見える空を見上げた。

一念発起できるなら、こんなところには来ていない。

今頃自己鍛錬を続けているだろう。

「何がしたいのかと問われれば、何もしたくない、だ」

正直に言えば、あざみは詰まらなさをうな顔をした。

「どうしようもないへたれですねえ。何食べたらそんな無気力になるんです?」

首を傾げるあざみに、コテツは珍しく冗談で対応しようとする。

「大量の敵軍と、メインゲティッシュを食べれば、それは満腹に、……！」

そんな時だつた。

瞬間、大地が揺れる。

地面に寝転ぶ形だったコテツは跳ねるように身を起こした。

「まるで艦砲射撃……！？」

心当たりがある振動。

これは、艦の主砲クラスの一撃だ。

「……あらららら、これまずいですよ。宣戦布告も無しに奇襲？
一体守備隊は何をやつてたんでしょうね？」

あざみの言葉を背に、コテツは中庭から廊下へ出た。

そして、空を見上げる。

その時、一度のことだった。

その空に紫電が走り。

巨大な戦艦が空に現れたのは。

「空中戦艦……、本気みたいですねえ。あちこちさんも
「そり、見えるのか？」

異世界人のコテツには空中戦艦が来た所でどれくらいの意味があるのか分からぬ。

追いついてきたあざみに問うと、あざみは眉一つ動かさず答えてくれた。

「視覚的ステルス、あのサイズ、外觀から分かるH搭載可能数からして、敵国旗艦の国宝級の戦艦でしょう。普通は地上戦艦を持つてきますから、あのクラスじゃ最悪経費で国家が傾きますよ？」

つまり、国家予算クラスをもつて起動せらる戦艦、と言つ」とらしい。

何にも気づかぬに敵国の喉元に食いつけると考えればそのコストは納得できる。

ただし、一度で決着が付かなかつた場合、出費がかさむのだろうが。

「この国にはそれほどの血みが？」

そして、それを覚悟しての電撃戦。確かに、戦争が長期化するよりかは必要な軍事費も軽くなるだろうが、それにしたつて博打の要素が強い。

「この国に一体何があるというのか。

その質問に、茶化す空氣もなく、あざみは答えた。

「私、とかどうでしよう？ ね、別に茶化してませんよ？ 初代エトランジェのいた国ですから、ハイスペックなアルトの保有数は最大です」

そこまで言われても、今のコテツにはピンと来なかつた。

エースとその機体が時として戦場で脅威になることはわかつては

いたが、しかし、アルトはパイロット不在。はたしてそれだけの価値があるのか。そんな疑問に、あざみは口を開く。

「そもそもアルトなんてほとんど誰も使えないんすけどね。でもまかり間違つて全部使えるよ！」になつちゃつたら困るでしょ？

「ああ、なるほど」

「コチツは少々の納得を覚える。敵は馬鹿ではないらし。技術は常に革新する。そして、今使えないアルトを使つこなせるようになつたら脅威が過ぎる。

が、先代エトランジエは強かつた。そう簡単に手出しが出来ない。

（見抜かれているや、王女………）

故にこのタイミングだ。先代エトランジエから、今代へ。エトランジエがいない、もしくは慣れていないくて役に立たないこの瞬間にしかこの国を打ち倒せないと判断したのだ。

だから賭けに近い電撃戦に出た、という訳だ。

「それで？ 君から見たらどちらが優勢だ？」

「うーん、じつちのぼろ負けですねえ」

あつけらかんど、あざみは言った。

「何故？」

「余裕での戦艦には50機以上のSHが積まれているでしょう」

「こちらにもSHはあるだろ？ しかもここは本拠だ」

「いいえ。確かに数はありますけどね。常に全部動かせるわけじゃないんですよ。整備環境上、相手の半分動かせればいいほうです」

「……どうかしている」

「とはいって、こんな奇襲想定されてないんですよ。型破りにもほどがあります。むしろ国境付近のほうがすぐ動かせるHは多いですよ」

そうして、今度は質問の応対者が変わる。

「貴方は？ どう思います？」

平然とあざみは聞いてくる。

コテツは、思ったことを答えた。

「……その戦力差ならまずいだろう。敵は有能だ

「どうして判断できるんです？」

「現時点では、アルトがほとんど動かせないこの国はさほど驚異的ではない。しかし、それでも奇襲作戦に出たと言うことは、将来的な脅威、もしくはアルトを手に入れることによる利益を見ている」「ははあ。確かに私もちょっと自信がありますよ。最終的に全部動かせるようになれば驚異的でしょうね」

「だが、それを今の脅威ではない、と目を背けず、今この時が千載一遇のチャンスだと襲ってきた。相手は未来を見ている」

「その場凌ぎを考えて貴方を召喚したこの国とは格が違いますか？」

「君はこの国をどう思ってるんだか……」

あまりにあんまりな物言いで、逆にコテツのほうが微妙な気分になつた。

だが。

「大切な国ですよ。いざとなつたら私が守りますから 」

そう言って、彼女は笑顔になる。
気高い獣の笑みだつた。

格納庫。
整備員が慌しく動き回るそこにコテツはいた。
そして、それを見つけたシャルロッテが、コテツに駆け寄つてく
る。

「コテツ！！」
「ああ」
「よく来てくれた」
「呼び出したのはそちらだいぶ」と

こべもなく言ひコテツは、そのままに続けた。

「それで、俺に出撃命令か？ 役に立てるとは思えんが

当初、コテツが考えていたのはそういうことだった。

人手が足らない。

ならばコテツの練習機も出せただけ出してしまおうと思つたのだろう、と。

しかし、シャルロッテの返答は、実に予想外だった。

「……違う。お前に出撃命令は出でいない。私はお前に頼みがあるんだ」「頼み？」

出撃前の兵士に頼まれることと言えば一体なんだろうか。考えるコテツの肩に、シャルロッテは両の手を乗せて、まっすぐに彼の瞳を見た。

「これは私の個人的な願いだ。断つてくれても構わない。関係ない国のことだと逃げてくれても構わない」

「長い前置きだ。時間はないんだろう？」

シャルロッテがここまで頼みを、コテツは断るつと思わなかつた。

だから、先を促す。

すると、シャルロッテは、苦しそうに、辛そうにその言葉を口にした。

「お前にほつ……。」リリで王女様を守つて欲しい……！」

そして、筋違いなのは分かっている、とシャルロッテは呟いた。

「前の敵は私たちが命を賭けて、意地でも倒す。絶対に、必ずだ。しかし……、もしも、万が一抜けた敵がいたならば」

その言葉を、コテツが遮る。

「期待に添えるとは思えんが。……努力は惜しまん」

真面目腐った顔のコテツに対し、シャルロッテは泣きそうな顔で破顔した。

「ありがと……、では、私は行つてくる……」

颯爽と駆けていくシャルロッテをコテツは見送り、自分も自分の機体の元へ。

「これが、俺の棺桶か」

感動もなく、彼はそれを見上げた。

青い、騎士甲冑のようなフォルム。練習機、名前をアインスという。

ここに来て以来、コテツが乗り続けた機体だ。

コテツは、その機体の胸にあるコクピットに乗り込もうと動き出し、声をかけられ振り返ることとなつた。

「コテツさんっ」

「……リーゼロッテ」

メイド服と獸耳。遠目に見ても彼女はわかりやすい。

しかし、コテツは首を傾げた。

一体何をしにきたのだろうか、と。

その彼女は、じばらぐ、何か言おうとしてやめ、口を開け閉めすることを繰り返していたが、ついに、覚悟を決めたのか、コテツに言った。

「死なないでください」

簡潔な台詞。とてもわかりやすい一言だった。

しかし、出会って一週間あまり。それだけなのに、こうして有事の際にわざわざ心配してくれる彼女は、大層優しい性分なのだろう。ソラ

コテツは、そんな彼女に笑いかけた。

「約束できんな」

3話 無言の棺（後書き）

次回出撃。

ご意見、ご感想お待ちしております。

かくして、敵は来た。

異世界に来て初めて見た飛行を行うSHと、この国のSHが戦闘を行う様をコテツは最後方で眺めていた。

文字通りの、最後方である。城の目前に立つコテツを越えればもう防衛戦力も何もあつたものではない。

「押されているな」

冷静に、コテツは戦況をそう判断した。

SH戦は空対地なら空の方が有利だ。そして、整備不足か、圧倒的に味方には空戦機体がない。

対空兵器も、撃てば当たるというものでもない。

そして、圧倒的存在感を放つ空中戦艦の存在。

その砲火はもちろんのこと、その存在自体が士氣に多大な影響を及ぼす。

「……そして、やはりか」

『前の敵は私たちが命を賭けて、意地でも倒す。絶対に、必ずだ』
そんなものはただの意氣込みで、希望的観測だ。
周到な罠を張った上で地上戦ならざ知らず、この状況ですべてを防ぎきるなど不可能。

高速で迫る航空兵器。レーダーがそれを捉えた。コテツは、機体の腰のブロードソードを抜く。そして、唐突に通信が届いた。

『「つまおおおおおおおおおお…」』

「……………」

この世界はJHT技術以外は中世なこともあって、騎士道精神に重きを置く風潮もまた存在する。コテツもあつれつながら通信もその風潮から生まれたものの一つだ。

必要があれば切ることも出来るが、自ら切りつと思わなければ、相手から勝手に通信をつながれる。

名乗りを上げる。裂帛の気合を見せ付ける。勝者と敗者、もしくは好敵手同士が言葉を交わすための仕様。

コテツにはどうも馴染めそうになかったが。そして、その裂帛の気合を見せ付けた相手は、同じブロードソードを構えて、空中からコテツへと迫つてきていった。

ブロードソード。人間サイズで言えば、80センチくらいの幅広の剣だ。

一般的な機体の大きさは人間の十倍ほどのサイズ、つまり18メートルのものが多いから、ブロードソードもハメートルほどのものになる。

これも騎士道的な考え方なのか、それとも、銃器の性能が低いのが悪いのか、SH乗りは剣を重用する。

コテツはそんな考えもないが、練習機であるアインスにこれ以外の武装を搭載することは出来なかつた。

『「おおおおおお…」』

突貫してくる機体。

コテツは、それを横に大きく跳んで避ける。

飛び込むような無様な回避だったが、それでも避けることには成功した。

すぐさま、敵機はターンをし、コテツに突っ込んでくる。

（さて、どうにか止めなければ……）

叫び続ける敵兵とは対照的に、コテツは無言で機体を動かしていた。

シャルロッテの頼みに応えたのだって、彼女と同じく王女を守りたかったのではなく、断る理由がなかつただけだ。

だがしかし。

「約束は、したからな」

一度、三度と攻撃を避ける。

そう、約束はした。

したから、努力は惜しまない。

そして、四度目の突撃。

（生身であれば……、一撃ごとに体が鈍る。ダメージは蓄積し、逆転は出来ない）

コテツは、避けない。

「だがSHならぬではない……！」

貫かれる機体の腹部。いや、避けたのだ。コクピットには刺さっていない。

「コテツは、ここ初めて相手に向かって声を出した。

「捕まえたぞ」

『え？』

ブロードソードを持つていない方の手が、敵機の肩を掴む。冷淡だったコテツの声は、まるで死神の宣告のように相手に響いたことだろう。

アインスはブロードソードを振り上げ。

思い切り相手の胸に突き込んだ。

青い機体が、悠然と立っている。
敵機が三機。地に転がっている。

「……最善は死んでしたぞ」

呟くと同時に、コテツのアインスが倒れこむ。
結局、コテツの最善、限界はここまでのこと。

コテツに傷一つなくとも、腹を刺され、片腕は千切れ、片足を失った機体はもう動かない。

コテツが取った戦法はまさに肉を切らせて骨を断つ。

腕も機動力も劣るコテツは無傷で勝つことなど考えず、ただ、切らせて隙を見せた相手に一撃必殺を叩き込むことだけを行つた。どんなに痛めつけても、動ける限り機体は動いてくれる。それ故の戦法だった。

ただし、その戦い方にはどう頑張つても限界が訪れる。

「……」

暗くなつたコクピットでコテツは無感動に呟いた。

「まあ、余生にしては上々か……」

「……」で待つことは、座して死を待つことと変わりない。この戦闘はどう考へても負け戦だ。

はたして、エトランジエは生け捕りにしてくれるだらうか。いや、しかし、仮に生け捕りにされたとしても役立たずだと知ればきつと敵国はコテツを殺し、この国の王族に新たなエトランジエを召喚しようと要求するだらう。

だから、コテツはその場から動こうとしなかつた。

遅いか速いかの差でしかない。ここで死んでも変わらない、と。そして、待つこと数十秒にして、機体の装甲を叩く、足音が聞こえてきた。

（敵兵か……。随分お早い」到着だが、そのままコクピットにソーデでも突き刺せばいいものを）

そう考へるコテツを余所に、唐突に暗かつたコクピットへ光が差し込む。

こうして、致命的なダメージを受け要救助状態となつたSHは、コクピット側の操作でロック状態にしない限り外からのレバー操作

で「クピットを簡単に開くことができるのだ。

そして、そんな風に簡単に開いた「クピット」の向こう。そこには敵兵の顔でも揃んでやろうかと、コテツは目を向けた。すると、そこにいたのは意外な人物だった。

「……リーゼロッテ？」

メイド服と、狐耳。見間違えるはずもない。必死な姿で、彼女はいた。

「早く、Jの手に拘まつてください……」

思わず、呆けた。

半ば無意識に言われるがまま手を伸ばすと、一気に機体の外まで引き上げられた。

何故彼女がここに、と、疑問が心を支配する。

そして、コテツは口を開きかけた。

「君は、何故

「まずは逃げましょー！」

しかし、聞く間もなく、力強く手を引かれる。

女性とは思えない力で手を引かれ、呆けたままコテツは弓をさられるように走り出した。

閉められた城門の脇の勝手口のよつなとこから内部に侵入し、そのまま城の中へ。

そして、廊下を駆け抜け、中庭に出て、やつとコトリシとリーゼロッテは一息吐いた。

「J、コテツさんつ、怪我は？」

「いや、大丈夫だ」

「よかつた……、壊れた機体の中から出てこないから、怪我をしたのかと」

「すまない。心配を掛けた。それとありがとう、君の勇敢な行動のおかげで命を救われた」

別に望んだわけでもないが、救われた以上は礼を払わなければならぬ。

そのためにコテツはリーゼロッテをまっすぐに見つめる。のだが、そこでコテツはあることに気がついた。

(震えて……?)

リーゼロッテが、肩や手を震わせている。

先ほどまでは無我夢中だったのだが、ここに来た今、それら張り詰めていたものが切れて、恐怖が戻ってきたようだった。

年相応な、女性になりきれない少女の恐怖が、そこにはあった。

「君は、どうしてここまでして」

思わず、コテツは聞いていた。

コテツにはよく分からぬ。

恐怖に打ち勝つてまでなぜ役立たずを救いに来たのか。

何故、彼女は死の危険を冒してまで、コテツを救つたのか。

その不可解を放置できず、口を付いて出た言葉に、リーゼロッテは肩を震わせたまま答えた。

「私……、ヒトランジエ様のお話が好きなんです」

「は?」

「歴代ヒトランジエの人たちは、亜人を差別する人が少なかつたそ

うです。会つことは叶いませんでしたが先代もそうだったそうです

「野蛮な獣は下、知恵のある理性的な人間は上。そういう考えは、この世界にも根付いている。

そのなかで、亞人とは、知性を兼ね備えた獣ではなく、野蛮な者として扱われる。

彼女は亞人。城で働いているのは王女が変わり者なだけだ。城でも尚、差別は残る。

でも、彼女は気丈に笑った。

「だから、コテツ様は全亞人の憧れです。差別せず、勇敢で気高く戦場を駆ける」

「俺はそれとは程遠いと思うが」「だからですよ」

そう言つて彼女は微笑んでいる。

綺麗な、笑みだった。

「私は、コテツさん中庭に寝転がつて昼寝しているのが一番”らしい”とおもいます」

「らしい……？」

「はい、だからコテツさんは戦場で死んじゃだめなんです。逃げて、どこかで畠でも耕してください」

その言葉に、コテツは愕然とした。

それだけで、命を賭けるに足りるのか、と。たつたそれだけで戦場に命を晒せるのかと。

「私、人間が大好きなんです。差別しない人は、もつとすきです」

だとするならば。

「コテツの命をそつまでして救いに来たリーゼロッテに報いるのは。
シャルロッテの思いに応えるのは。
恩を返すのならば。

(命を賭けるに、十分だ)

コテツは、胸中に火種が灯るのを感じた。
そして、見る。

白と黒の機体。腕に刻まれた文様が、相変わらず何故か気になつた。

(……やるだけ、やるひじやないか)
「あやみ、いるんだね?」

胸に灯りかけた炎。

それに任せて、機体に向かい、コテツは呼びかける。
ふつと、コテツの前に、女の姿。

「なんでしょう?」

「コテツは、ここに来て初めて『』の希望を口にしたような感覚に囚われた。

(ここに来て、俺が望む初めての言葉は)

ここに来て、心から何かをやりたい、と思ったのは、この世界に来て一週間あまりの中で。
今日が初めてだった。

「　君に俺を乗せろ」

リーゼロッテも、あざみも、驚愕に固まっていた。

「コテツだけが、真剣にあざみを見ていた。

「だめか？」

「い、いえ。確かに私としても搭乗者がいないと動けませんし。誰でもいいから兵士を探しに行かねばならぬことじりだしだが」「ならば一度いい。俺を乗せてくれ」

間髪入れず、コテツは返した。

あざみは、少し考へるようこあり手を当てていたが、すぐコテツを見る。

「まあ、貴方！」と同時に私が使ひこなせるとは思えませんが。どうせ変わりませんしね。最終的に私がコントロールして、貴方は座つているだけですから

「とりあえず、乗せてくれるだけで十分だ。後は俺次第、だらつへ。」「わかつてゐるじゃないですか」

コテツは言ひながら、直立している機体の装甲を軽やかに上つて、コクピットである胸まで到達した。

「……タラップ下ろしようか、と想おつと思つたりすぐ上つてこられるとは。」これだけ見ると熟練者みたいなんですけどね

あざみが呟くが、コテツは無視して乗り込もうとする。と、その背に声が掛かった。

「コテツさん！　また、行くんですかーー？」

リーゼロッテだ。

心配が、声に多分に含まれていることは、コテツにも感じ取れた。だから、コテツは振り向くと、笑って返した。

「 今度は生きて帰るさ」

見た目よりずっと軽やかに機体が空に舞い上がる。

「 強気の発言、いただきました」

「 問題ない」

「 クラピットは複座になつておつ、すぐ後ろにはあざみがいる。

「 しかし、ヒトランジヒトの本性は感性が一個ずれていますね」

「なんだ」

「亞人。中でも獸人に対する態度がすごいですよ。先代なんて『ケモ耳馬鹿にするとか潰すよ』の国とか言って一時期騒ぎになりました」

先代の言葉は、聽かなかつたことにした。

「彼らは、慎み深い獸だ」

「ほほう、これまた面白い表現ですね」

「どうも俺には俺が彼ら以上だとは思えん」

そう呴いた瞬間、有効射程内に敵機の姿を視認する。

「さて、では戦闘ですね。少しでも無様な真似をしたらノントロールをこちらに移しますから」

「武装は?」

問えば、返つてきたのは、小馬鹿にしたよつな、試すよつな声色だった。

「男なら拳なんぢやないですか?」

今度の相手は、銃を持っている。

冷静に、コテツは相手を観察。

「了解、では行くか

「え?」

果たして、自分の言葉に怒声が返つてくるとでも思つたのか、あざみから呆けた声が聞こえてくる。

無視して、コトツは飛んだ。

アルトであるこの機体を警戒して、困こんでいるのは五機。その眼前へとコトツが迫る。

『つ……、速い！？』

相手の通信が、唐突に聞こえてくる。

「つるさこな、相変わらず

『撃てッ！』

そして、構えられた銃口から、無数の弾丸が吐き出された。その場にいた全員が、それは当たると判断した。アルトの装甲を抜けるかのようにもかくとして、当たるとは思つていた。

しかし。

「遅いぞ」

右へ、左へ。上へ、下へ。

(つ……！)この機体は……

直角よりも鋭い角度で白黒の機体が宙を踊る。

当たらない。

五機による一斉射撃が、いくら続けても、一度も当たらない。

『くそ、撃てッ、撃てッ！ いつかは当たるー。このままが

数が多い！』

その、次の瞬間。

隊長機の眼前に、コテツの機体は現れた。

『いつ！？ いつの間に……』

『射撃に夢中になるからだ』

既に腕は引き絞られている。

そして、すぐさま鉄槌は放たれた。
拳が、唸りを上げて敵機の頭を碎く。

『い、一機撃墜です……』

そして、そのまま反転。

近場にいた機体に勢いのまま回し蹴り。

太い足に、機体は碎かれ地に落ちる。

『に、一機、撃墜……！？ 嘘でしょ！？ こんな簡単に……！』

驚愕の声で、あざみが撃墜をコテツへ伝える。

コテツは、答えもせずにもう一機へと迫った。

『うわあああああーー！』

怯えて下がりながら銃を乱射する機体に向かって、すべての弾丸を避けながらコテツは迫り。

『覚悟はいいか』

敵機を掴むと地面へと叩きつけるように放り投げた。

『な……』

三機甲が地面に落ちて動かなくなり、

動搖が広がる。

『強い……』

『一瞬で三機落ちたぞ……』

『化け物か！……』

「……すごい。すごいです……」

敵にも、後ろのあざみにもだ。

「腕が悪いなんてとんでもない……！ こんな実力を隠していたんですねあなた！……」

（機体が俺の意思に付いて来る……）

そんな中、コテツだけが冷静な顔で敵を見ている。

（機体が、思つたとおりに動く……）

そして、無意識にその口の端は、吊り上っていた。
これは、そう。

前の世界の感覚。エースだった、望月虎鉄の感覚。
そう、あの頃の。

「そうだった……。何故忘れていた。……これだ」

この世界に来て初めて出会った思つ通りに動く機体。
この世界で初めて出会った相棒。
まるで、頭に溶けた鉄をぶち込まれたようだ。
ただひたすらに頭が熱い。

「そう、これが……」

持てるすべてを、叩き付けたい。

胸に、燃え立つものを、コテツは確かに感じていた。

エース。コテツはエースなのだ。

ただの練習機如きでは我慢できない。
あんな機体ではコテツを満たせない。
あんな機体では、あの空を飛べない。
だが、今なら飛べる。

「これが、エースの空だ　……」

『ディステルガイスト』

その機体は悠然と宙に立つ。
そして、そこで気がついた。
何故腕の文様が気になっていたのか。
何故そこにコテツは違和感を感じていたのか。
もう見ることはないだろうという先入観が見逃していた。
腕の文様は英語。何故か縦書きと横書きとだから余計に読みづら
かつた。

（そうか。これは、初代からのメッセージか）

態々、ドイツ名の機体に英語で記されたメッセージ。
地球人なら誰でも読めるように、という配慮。
コテツは、機体の右腕を胸の前に出し。
左の肘を右腕の上に乗せ、立てる。

「確かに……、受け取つたぞ」

左腕には縦書きで D E A D の文字。
そして、右腕には L I N E の文字。

『 DEAD LINE 』

＞ i 3 1 2 8 6 — 3 1 2 5 <

” これが、最後の皆だ。 ”

その時、全ての機体が、それを見ていた。
開発者のメッセージ。

開発者の思い。

開発者の祈り。

今は 。

口笛の気迫。

何故か、戦いすらも忘れて、皆それを眺めた。
唐突な、死線の出現を。

「覚悟を決めて……、越えに来い！」

4話 ハースの空（後書き）

ついに無双発揮の予感。

そして、まさか挿絵まで入れることにならうとは自分でも思ってなかつた。

「もう一度問うー。あざみー！ 武器はー！」
「は、はいー！ 腰部バインダー内に日本刀とハンドガンが入っています！」

「日本刀を出せーー！」

言われるがまま、あざみは巨大な腰部バインダーを操作し、ハッチを開閉させ、日本刀をせり出させる。
それを両手にディステルガイストは敵へ迫る。敵は、銃からブロードソードに持ち替え、迫るディステルガイストへと振り下ろす。

『え？』

だが、果たして敵に何が起こったかわかつただろうか。
すれ違ひ様の一瞬のうちに細切れにされ、地に落ちた兵士の声は、なにも分かつていよいよ聞こえた。

「次つ」

それを尻目に、もう一機へ、ディステルガイストは飛翔する。
その機体は、努めて冷静に銃弾を放つ。

「行けるかーー、いいや、行くッー！」

次の瞬間、あざみは信じられないものを目にした。
振り払われる、己が機体の刀。
横に振るつたそれが、弾丸を切り裂き、弾く。

(人間にこんなことが！？)

あざみの驚きを無視して、距離はゼロへと狭まり、敵は貫かれる。

「ハンドガンを出せ！」

「はいっ、すぐに！」

「射撃操作をマーコアルに！」

「はいっ！」

腰部バインダーからハンドガンがせり出す。

すぐさまデイストルガイストはそれを掴むと、早撃ちのよつて、向かってきていた敵を撃ち抜いた。

そして、ブーストを吹かし、前進しながらの回避行動で機体は錐揉みに進んでいく。

その中で、まるでめちゃくちゃな射撃の嵐。

しかし、その弾丸は的確に敵機を落としていく。

(こんなことつて……)

心中で、あざみは呟いた。

通常、振り回されるのは操縦士だ。どんな機体でもまずは操縦士が機体に振り回され、そして振り回されないよつになつてしていくのが上達というものだ。

しかし、これはどうだ。

気を抜けば自分のよつがコテツに振り回されそうになつてこる。

(動く……、今までとは大違ひだ。思つたとおりの動きが出来るー！)

そんな中、聞こえるコテツの心の声は、歓喜に溢れているよつこえた。

ディステルガイストに乗つてゐる間、エーポスと操縦士はスマーズな行動のために、お互ひの思考が読める。

(確かにピーキーな機体だが。そんなものにはいくらでも乗つてきた。その度にどんなじやじや馬も乗りこなしてきた)
(並みの機体じや動けないわけですね。この反応速度じや、アインスなんかじやつていけない)

コテツの腕が悪いと評されたのは、まるで嘘だつた。
機体の方が、まるでコテツに付いていけないのだ。
あざみには分かる。まるで嵐のような入力の波は普通の機体じや処理しきれない。

そして、この見切りには、ただの機体じや付いて行けない。
パイロットの能力を、百分の一も引き出せない！

(……練習機なんかじやこの人の相手は務まらない。もっと、私
たいな)

飛び続けるコテツの前に、一機の赤く輝く騎士に鋭い羽の生えた
ような機体が立ちふさがる。

(私なら ……)

それが、あざみの意識を現実へと引き戻した。

「Hース機です、気をつけてください！」

油断なく細身の剣を構えるその機体には隙がない。

『……まさかアルトが起動しているとは』

「……エースか」

『如何にも。我こそはジルエットが筆頭騎士、グラット・エイサップ！ いざ参る！』

「望月虎鉄。これでいいか？」

『コテツが名乗りを終えた瞬間、場は動いた。コテツの銃撃を、大きく横に避けながら、グラットの機体がコテツに迫る。』

「避けるか」

『いかにアルトと言えど、一機で戦局を左右できるものか！ 私がこの場を引き受ける！ 諸君はこのまま戦闘を続けよ！』

飛び込むグラット。

振り下ろされた剣と、盾にされた刀が鎧迫り合いを行う。

『ぐぐ……！ さすがにパワーでは勝てんか』

パワーで勝るディステルガイストが剣を押し返し、グラットを後ろへ弾く。

「あざみ、ハンドガンを！」「すぐにッ！」

即座にディステルガイストはハンドガンに持ち替え、銃撃。グラットはそこからすぐさま左に回避する。

『こちらから行くぞ！』

そして、今度はグラットが襲い掛かる。

剣による高速の連撃。

あらゆる角度から、斬撃がテイステルガイストに迫る。

対するコテツは、両手持ちにした刀で受ける。

そして、幾度となく剣戟が交わり、甲高い音を上げ

道日志
卷之三

「そんな！！」

これはまざい。

上半身が大きくなっているへ送れる

と、そこで気がついた。

『前の二テツからは、焦りと「JN」が、まるで笑いものな感情さえ感じ取れたのだから。

(もちが
!)

逸れた上体が、更に深く沈みこむ。

『フントイン・?』

そう、フェイントだ。刀を弾かれたのは一撃を隠すための演技だ

二
た

” サマーソルトキック ”

ディステルガイストの足が、敵機の胸の装甲に直撃する。

『ぬおおおおおおおおー!』

そして、揺れて制御不能となる機体に、コトツは間髪をいれず拳を放つ。

右、左、そして右。

『ぐ、お、お! だが! !』

ダメージ甚大。

しかし、機体を立て直すグラット。

そんな彼に、コトツは冷たく言い放つた。

「いや、終わりだ」

真上に弾き飛ばされた刀が、今、するりとティスティルガイストの手の中に戻ってきた。

『な、な、な……』

一閃。

『ぬおおおおおおおおー! !』

両断。

(あり得ない……、ヒース相手になんて手際……)

「こなな……つ、激しそぎますつ……」

落下していく機体に田もくれず、コトツはあざみに問うた。

「あざみ。『J』の場を一番手つ取り早く収める方法は何だ。やはり敵を殲滅すべきか？」

余韻もない。ただ、出来ることをこなしただけといつひなH隊。

(Hース機なんて眼中にもないんですね、あなたは……！)

それが更に、あざみを熱くした。

あざみは、目の前の操縦士のために、本気でデータを漁り、思考する。

(えつと、どひじょひ……、『J』の場で一番速い手は……！？)

内心の焦りを抑えて、あざみは思考の結果を口にした。

「いえ、今回は相手が空戦用といつ『J』とを念頭に戦いましょう」

「つまり？」

「戦艦を落とせばいいのです」

「どういつことだ？」

「空戦用機体は総じてエネルギー効率が悪く、戦闘継続能力に著しく欠けます。そんな彼らが補給のアテを失つたら？」

「戦場で孤立するのは『J』めんだな」

「そういうことです。よつて戦艦を叩けば、皆すぐさま飛んで帰りたくなるはずです」

「では、『J』の機体の最大火力は？」

質問の内容が変わる。当然と言えば当然だ。

「テッはこう聞いている。

『J』の機体で敵艦は撃墜できるのか？」

あざみは、自身の顔がにやけるのを抑え切れなかつた。

「『心配なさらず。攻勢魔術を使います。ただし、実戦で使った試しはありませんから、どこまでやれるか未知数です。だから限界まで艦に近づいてください』

「攻勢魔術……？」

「ただの、光の束を打ち出すだけの魔術ですよ。実戦使用が初なのは、貴方が操縦してくれるからです」

あざみが操縦までを担当してしまった、魔術処理が追いつかない。しかし、この男には操縦アシストすら必要ない。

だから、撃てる。

「私は、貴方の元で、今日、初めて本気を出します。だから、信じてください」

ディステルガイスト、そして、あざみの全力。初めて出せるそれに、あざみは歓喜に打ち震えた。

（ああ、なんて愉快なんでしょう……！）

「信じよ！」

信じる、と彼は言った。言ってくれた。誰よりも憧れた、たった一人のパートナー。それが、眼前にいた。

「行くぞ、あざみ」

行くぞ、と言つて名前を呼んでくれる。

それがこんなにも幸せなのだ、と。あざみは今氣がついた。

「はー！ 行きましょうーー！」

戦艦へと機体が、飛翔する。

無論、無抵抗とは行かない。

敵が、こちらの意図に気が付いた。

陣形を組み、戦艦への進行を止めようとする。

「邪魔だ！」

その射撃を避け、第一陣を抜ける。

そこからは、更に敵の壁が厚くなつた。

敵機全てが、アルトを脅威と認識し、戦艦を守るために動いている。とたんに激しくなる射撃。

しかし、それすらも避けて飛ぶ。

「まだだ！ まだもつと速く飛べるはずだーー！」

あざみの耳朶を叩く、その声がなんとも心地よかつた。

（どんな機体もモノにしてきた……。それで戦場を駆け抜けた。今回もだ。今ここでモノにするーーー）

心の声も、ずんと胸の奥に響いてくる。

『第一陣突破されましたーー！』

（いい……、いいですよコテツさん。私、あなたのものになつてしまいそうですねーーー）

色濃くなる砲撃。

戦艦の艦砲射撃も混ざつてくる。

あざみも初めて見るほどの砲火。

『第二陣！ 壊滅！！』

だが、彼は言った。

「生……、温いッ！-」

生温いと。

この程度では小揺るぎもしないと！

「ああっ、『テツさんっ。』んなの……、初めてっ」

あざみは愉悦と歡喜に打ち震えた。

乗りこなされていく。

今日初めて乗った男に。

『第四陣！！ 死んでも守りぬけえー！-』

それがなんとも、あざみには気持ち良かつた。

「おおおおおおおおおおおー！-」

『ダメです！ 突破されましたー！-』

しかし、敵陣を突破したその時、敵艦の先端に光が集まり始める。

「主砲です！ ダメ！ 避けてくださいー！-」

巨大なレーザー砲が、一瞬後には襲い掛かってくるだろう。

ディステルガイストの装甲を完全に抜くことは出来ないが、少な

くとも、機体は外へと押し出される。やつするふつだしだ。また、敵陣を突破しなければならない。

だから、避けなければならないのだが、コテツは猛進をやめなかつた。

「え……、なんで？」

「あざみ」

いや、違う。
だからこそ。

「君にエースというモノを見せてやる」

コテツは猛進をやめなかつたのだ。

あざみは、その、コテツのエースというものを嘘だと思った。
さもなければ、夢だ。

あり得ない。

それほどまでにあり得ない光景だつた。
眼前を埋め尽くすほどの光の奔流を。
機体を包み込む太さのレーザーを。
ディスティルガイストは刃で切り裂いて飛翔を続けていたではない
か！

(すい……、すいすいすいすいすい……)

あざみは知る。

「これが……、エースの空つ」

これがコテツの世界。

エースの次元。

あざみと彼の、到達点。

「抜いたぞ……！ 後は任せた」
「はい……！」

攻勢魔術、展開。

ディステル、ガイストの前面に輝く魔方陣が描かれる。
コクピット内に響く、機械音声。

『Pentagram Standby · DEAD LINE · · ·

この戦いを終わらせる、最後の一撃。

「これが私と、コテツさんの……！…！」

そして、彼と始める、最初の一撃。

「初めての共同作業です！…！」

『Over!…』

魔方陣から、戦艦に大穴を明けるような光の奔流が放たれた

。

慌てて逃げてこく敵軍。これからは、無理に追おうとはしなかった。
コトツは、深くシートに沈みこんで、ぱつりと齒く。

「……柄にもなく、熱くなつたな

「もう、休んでいいですよ。後は、私が操縦します。だから、帰
りましょう」

「ああ、そうだな」

ハハして、一つの戦いが終わる。

5話 Line Over!（後書き）

とつあえずこれを書き始めて一番やりたかったことはやりました。
次回エピローグ。

翌日。

謁見の間に、コテツは呼び出された。
マルベルガが、跪いたコテツの前に立っている。

「貴方の働きを賞し、武勲勲章を授けましょう
「は」

周囲がコテツを見る目は、お世辞にも祝福しているようには見え
ない。

彼らは、コテツの活躍に懐疑的である。
いや、王女含め、全ての人間はあざみが動かしたディステルガイ
ストによって救われたのだと思っており、コテツは座つていただけ
だと思っている。

ただし、ディステルガイストに乗つて生還できた以上は國のため
に働いたものの一人だ。

故の勲章。
なのだが。

「ご主人様ーっ！ 探しましたよまつたくもー！」

一人の闖入者によつて、空気ががらりと変わつた。

「……」主人様？」

いやな予感がして、コテツが振り向くと、そこには陽気に手を振るあざみがいた。

「あ、あざみ……、今コテツを」主人様と……」

「はいっ、アマルベルガ様」

「それがどういう意味かわかつてゐの？」

「ええ」

あっけらかんと、あざみは笑つて答える。

そして、コテツを見た。

「今この時から私はモチヅキ コテツをマスターと定め、この先いかなるときも、いかなる戦場でもお傍で貴方に仕えます」

「……は？」

思わず、コテツの口から声が漏れ出た。

頭が痛い、とばかりにコテツは眉間に皺を寄せた。

「よろしくお願ひしますね」主人様」

「いや、しかし、そんな話は聞いていないし、俺はそんなこと要求した覚えは……」

言えば、あざみは照れたように身をくねらせる。

「やでゅよつ……、もつ。昨日はあんなに激しかったのこ……」

場の空気が凍つた。

「あんなに熱く、俺のモノにしてやるって……、責任とつてくださいね？」

今代エトランジエはアルト乗り。

一躍、コテツは時の人となつた。

まだ、城外には知れ渡つてないのが救いだが、しかし、時間の問題である。

「……結局ここか」

場内では、どうにも好奇の視線に晒される。
それ故に、彼は今日も人気のない中庭に居る。

良いも悪いもない、一コートラル。

それが一番コテツにとつて落ち着く場所だ。
そんな彼は、これから波乱を予測して 。

「主人様ーー！」

どう考へても一コートラルではない声を無視することにした。

「……いつそ本氣で農家でも田指すか」

中庭から見えるエースの姿は、あんなにも遠い。

6話 中庭と窓（後書き）

とこりーじで、ひと段落。

続くかどうか未定の話だったもん、書いてある分はこりまです。

元々、息抜きにテンプレ異世界召喚物がやりたくて始めたこれでしたが、非常に書きやすくて楽しかったです。

ここまでコテコテなのは初めてでした。

テンプレのおかげですらすら書けるので、もしかすると続くかもしれません。

6・5話 寂しがりチャーター・ボックス（前書き）

これはおまけのようなものであり、七割方人物紹介のようなもので
す。

見なくともまったく問題ありません。

6・5話 寂しがりチャーターボックス

召喚されてから一週間余り。

未だに私物の増えない殺風景なコテツの部屋に、長年置いてあった置物のように、当然のように、あざみは居た。

「何故君がここにいる」

訓練が終わって帰つてきたと思つたらこれだ。

元から部屋においてある椅子に、あざみは優雅に座つて待つていた。

「いいじゃないですか。ご主人様。私はあなたの所有物なんです。部屋においておいてくださいよ」

「断る」

「えー……」

「用はそれだけか?」

「べもなく言つコテツに、不満そつだつたあざみが表情を変える。

「あ、それでですね、ディステルガイストは、あなたの搭乗機になつたじゃないですか」

「否応なくな」

「ええ、ですから、あなたとあなたの周りの人間関係について把握しておこうかと」

なるほど、とコテツは一応の納得を覚えた。
これからあざみとコテツは長い付き合いになるかもしれないのだ。
となれば、互いに理解しあつておくことは無駄ではない

コテツ・モチヅキ

「では、まずあなたについて、聞かせて貰えますか？」

「俺、か。言つまでも無いが、俺の名前は望月虎鉄。元地球軍パイロット。いやひらでは、コテツ・モチヅキ。エトランジエをやつている」

「どのような経緯でいやひらに？」

「火星を前に最後の任務を行つた所、敵機の爆発に巻き込まれ、気が付いたらここへ、だ」

「なるほど……、歴代と似たパターンですね」

「どういうことだ？」

「どうもこの世界に呼ぶときには、そちらの世界から乖離しかけてる者の方が呼び易いようなのです。瀕死の重傷だとか、事故にあつた瞬間だとか」

「なるほど。俺はまさに空間圧縮の爆発に巻き込まれていたからな。それで言えば、世界からかなり宙ぶらりんだつただろう」

「ははあ、そこをさつと掠め取られたわけですか」

「まあ、そんな所だらう。コテツ・モチヅキ。エトランジエ、搭乗機はデイステルガイスト。と、最低限でいくならこんなものか」

「そして、私の未来の旦那様で、ピーキー機体中毒つて所ですかね」

「……色々聞きたい」とはあるが、とりあえずピーキー機体中毒について聞いておこうか

「ご主人様はピーキーな扱いにくい機体を乗りこなす」とご無上の喜びを感じる方でしょう?」

「……」

「だつて……、こないだの戦闘中はあんなに……」

「確かに、昔からピーキー機体ばかりを押し付けられてきた経験があるから否定しきれないかもしけんが、しかしその言いようは非常に人聞きが悪い」

あざみ

「私はあざみ。ディステルガイストのエーポスで、あなたの嫁です」

「……」

「長らくパートナー不在でしたが、ご主人様との運命的出会いについて、今に至ります。ちなみに、名前が日本系なのは初代エトランジエの趣味だそうです。他のエーポスはどうだか知りませんが。ついでに、地球系の知識も持つてますよ。初代がインプットしたものなので、時代がら偏っているかもしれませんが」

「そうか。しかし、聞きたかったんだが、そんなに良いパイロットは見つからないものか?」

「はい。これでも私は私とディステルガイストに誇りを持っていますから。パイロットの腕で侮られるのは我慢なりません」

「どうか、どのように、今までのパイロットは駄目だったんだ？」
「機体に振り回されるのは勿論、コクピットで吐いたり、気絶したり、失禁したりならいいほうですよ」

「そうか」

「……操縦士を、殺してしまったこともあります」

「ああ、そうか」

「試しに乗られる分になら手加減が出来ますけど、国の危機となるとそもそもいませんから。私が制御して、本気で機体を動かすと、負荷で人が死んでしまうのです……」

「だから、有事の時以外はパイロットを乗せないよ」にしてきた、か

「文字通り、命を燃やして国を守る英雄なのですよ。私に乗った人は。だから、あなたも」

「そうか」

「そ、そうかつて……」

「俺は死ななかつた。そして死なない」

「あ……、はい」

シャルロッテ・バウスネルン

「うーん……、役立たず扱いだつたご主人様に分け隔てなく接し、一人前の戦士にしようと努力し続けた……、これはライバルになるかもしませんね」

「なんだいきなり。シャルロッテ・バウスネルン。王女騎士団団長。俺にとつては上司に値する。が、今回の件で正式な戦力としてエトランジエと認められたおかげで、直接の指揮下からは外れるな」「エトランジエは基本的にどの権力、階級からも離れた存在ですからね」

「まあ、騎士団に所属していたのは、戦闘レベルに達しない俺への一時的な措置だったというわけだ。と言つても、しばらくは騎士団と行動を共にすることになるだらうし、シャルロッテに指示を仰いで動くことになるだらう」

「まあ、ご主人様もこの世界は初心者ですからね。自分の判断で動くにはまだ早いですし」

「とりあえず、俺から見れば、彼女は高潔な武人と言つた所か。腕も良い。この国ではトップクラスだらう」

「あと、胸が大きいんですね……」

「なにを言つているんだ君は……」

「まあ、王女騎士団は王女と王都の守りの要ですから。団長ともなれば当然の強さです。むしろ、此度の戦で持ちこたえられたのは王女騎士団の働きがほとんどですよ。攻めたのはご主人様ですけど」

「なるほどな」

「そもそも、常に整備を完全にしておくような部隊は王女騎士団くらいのものです。他の部隊は油断しきつてますから。戦争始まつたつて聞いてから整備すれば首都防衛に間に合つはずつて」

「まあ普通はそんなんだらう」

「エトランジエが稼動すれば一人でもどうにかなる風潮だつたので。

今回の件で整備体制を見直したそうですが

リーゼロッテ・クリッション

「ケモ耳少女……。萌えですねえ」

「……リーゼロッテ・クリッション。エトランジエ専属メイド、と
いうことになつていい。俺の召喚と同時に自ら志願したらしい」

「亜人の要望が通るとは珍しいですね」

「王女が許可したらしい」

「なるほど」

「王女は使えるものは使う、と言つた空氣で能力さえあれば亜人で
も関係なく扱う。周りからの反応は、主立つて差別をすると王女へ
の反逆になるため、できる限りいないものと扱つていいようだ」

「根は深いですね」

「本人は、それでも気丈に振舞つていて。戦う人間ではないが、気
高く慎み深い」

「あら……、好感度高め?」

「王女曰く、エトランジエの付き人は常人じや務まらない、だそ
だ。まあ、危険な場所にも出向くことになるだろうしな」

アマルベルガ・ソムニウム

「王女だな。アマルベルガ・ソムニウム」

「優秀な方らしいですよ。王が崩御してからは、彼女が国を切り盛りします」

「一週間と少しで見極めた訳でも無いが、まあ、確かに、指導者として優秀なのは感じる」

「まあ、王様もピンキリですからね。国の一ひとつを見ていけば凄い人も駄目な人もいますよ。この国も先々代は駄目な人でした」

「この時期に呼ばれた俺は幸運ということか」

「そうかもしません。ぱつと見分かりませんけど、慈悲深い人ですし」

「まあ、俺を処分しなかった辺りな」

「その慈悲深さは正解だったと思いますよ。私とご主人様のタッグは最強ですから」

クラリッサ・ゴーレンベルク

「……誰ですか？ それ」「騎士団副団長だ。まあ、俺とも関わりは多くないからな」「ははあ、副団長」「年は俺より年下だらう。ところが、一回りはア……、十六、七と言つたところが」「所で、じ主入様の年齢は？」「三十一だが」「詐欺ですっ！ 三十路とか嘘でしょっ！？」「……君の目にさぞう映つているんだ」「若くて十代。そうじやなければ二十代前半」「まあ、日本人は若く見えるという話だ」「私だって日本人ですよー。見た目のベースが、ですけど」「機体の製造日から考えれば随分な若作りだな」「ええと、それはともかくですね。そのクラリッサさん？ どんな人ですか？」
「優秀だが、青いな。上手いのだが、巧くはない。老齢さを覚えていく前段階、と言つたところか」「未来有望ですね」「融通が利く柄じやないらしく、役立たずのHトランジistorである俺に反感を抱いてるらしい」「あ、敵ですか。殺しましょうか？」「やめる。ともかく、まあ、ことあるごとに嫌味を言つてくれるが、可愛いものだ」「可愛いものですか」「嫌味代わりにコクピットにライフル撃つてくる奴よりはマシだ」「そんな環境あるんですか」「俺達のエースというのは、頭のネジが一本取れた相手を指すこと

が多い」

ディステルガイスト

「私自身であり、私の相棒であり、あなたの相棒で、あなたの嫁です」

「そんな鋼鉄の嫁は御免だぞ」

「スペックは……、どちらかと言うと高機動接近戦よりですかね。装甲は厚めで、重いですが、しかし速いです」

「そうだな」

「ただし。重いのに速いという特性を手に入れるために、操縦難易度が非常に上がりました。速いのに重いから、その機動に振り回されます。まあ……、ご主人様には関係ない話ですか」

「ふむ」

「砲撃もしますが、これは私の方で制御する攻勢魔術系統なので、やっぱり接近戦よりと考えておいて構いません」

「砲撃は勝手に君の方で行ってくれる、ということでいいのか?」「基本的には、ですね。もしかすると機体の足を止めて欲しいとか協力を要請する場面もあるかもしません」

「なるほど、では武装に関しては?」

「メインで扱い易いのは先の戦闘でも使った日本刀とハンドガンですね。あと、私の得意分野は光魔術。つまりレーザーです。他にも腰部バインダー内に多彩な武装が積まれているのですが……、多彩すぎて、使えるのか分からぬものまであります。私もちょっと思い出してからでないと」

「選択肢が多いのはいいことだが……」

「初代はかなりずれた人だったんですよ」

「まあ別に問題ないか。ところで、途中から戦闘中に君の心の声が聞こえるようになつたが、アレは？」

「アルトの機能の一つです。エーポスと操縦士の円滑な意思伝達のため、とこう奴ですよ。普通に乗せると一方的に操縦士の声がエーポスに聞こえるんですけど、マスターと認めた相手なら、相互に思考を伝える」ことが出来ます

「と、まずはこんな所ですかね。あなたを取り巻く環境については、また今度お話ししましょう」

いいながら、あざみがテーブルの上のひづれを消す。

「そうだな」

「

「トトツが頷くと、あざみは笑つた。

「では、おやすみなさい」

「……なに?」

「こつと笑つたあざみは……。

コテツのベッドに柔らかな音を立てて転がつた。

コテツは、頭痛をこじらせて、それを見ることとなる。

「あざみ」

「ふふふ、なんですか？」

ベッドの上に寝転がつて、ニニニことあざみは笑う。

「そこは俺のベッドだと思っていたが」

「ええはい、そうですよ？」

「俺が寝れないと思うのだが……」

「何を言つてるんですか、ご主人様」

何を当然のことを、とあざみは笑つていた。

「一緒に寝るんですよ？」

「……すまない。ここ数秒で急に耳が遠くなつたらしく」

「一緒に寝ましょ、つ、ご主人様つ」

「床で寝る」

迷わずコテツはそう吐き捨てた。

何時でも整つた場所で寝られるわけではないのがコテツの職業だつた。

そのため、床で寝ることに苦痛はない。ベッドがあるに越したことはないが。

壁にもたれかかり、彼は床に座り込むと、皿を瞑つた。

そして、しばらくそういうと。

肩に温かな感触。

「なんだ」

「ご主人様と一緒に寝たいんですよ、私は」

いつの間にか隣に来て、肩に頭を預けていたあざみに、コテツは半眼を向けた。

「どうして君は」

その言葉は途中で遮られる。

「ずっと、待つてたんですよ？　ずっと憧れていたんです」

突然、あざみが寂しげな声を出したからだ。

「私の相棒、私のご主人様、私の伴侶。ずっと、一人で待つてました。だから……」

アルトができたのは千年以上も前のこと。それだけの時間を、彼女は待ち続けていたことに鳴る。

それを聞いて、コテツは立ち上がった。

「ベッドで寝る」

「あ、や、や、や、鬱陶しかったですか……？」

「君も入ればいい」

「え？」

「好きにしろ」

呆けていたあざみの顔が、喜色に染まる。

「あ……。さすが私のご主人様ですっ……」

「……あまりはしゃいだら部屋から放り出すからな」
「はいっ、大丈夫ですよーっ。大丈夫、ほどほどにしますからっ」
「……」

コテツは溜息を吐き、夜は更けていく。

6・5話 寂しがりチャーターボックス（後書き）

クラリッサ・コーレンベルクは次回出る予定のキャラです。

ついでに更におまけ。

> 31511 — 3125 <

アインス

コテツが乗る練習機。

性能は中の下。機械としての頑丈さはないが、訓練生の安全を考え、装甲は厚い。

主機の出力も低く、勢い余つた訓練生が全力で地面に激突しても死なないような配慮のなされた出力と言える、ただし、バランスがよく、上手くパートを組みかえれば前線で戦える。

鉄のヒトが、飛ぶ、跳ねる。
剣で打ち合つ。

「鈍いぞコテツー。」

荒野で、一機のSHが戦闘を繰り広げていた。
戦況は誰がどう見てもわかる。

シャルロッテの操るSHが優勢だ。

コテツのアイスは受けに回り続け、攻める空氣を見せない。
シャルロッテは、手に持つブロードソードで鎧迫り合いをしながら、シャルロッテは声を上げた。

「どうしたコテツ、本氣を出せー。」

『本気だ。可能な限りのな』

「確かに、お前の活躍を疑つてゐる者は多い。だが、私はあの戦場で空を駆けるお前を見た。そして、あざみがお前を氣に入つていることは、お前が只者ではない証明になる」

さすがに、全ての訓練にアルトを回せるわけではない。

アルトとエーポスとの関係に慣れておくのは、操縦士としての重要な課題といえど、ずっと死蔵されてきたに等しいティステルガイストが戦闘訓練、などというのは前代未聞過ぎるのだ。

手続きや周囲の慣れが出るまではやはり間に合わせの機体に乗せるしかない。

「だとすれば、こんなものではないはずだらう。」コテツー。」

シャルロッテは叫ぶが、コテツの動きに変化はなかつた。相も変わらず後手に回り続けている。

ただひたすら受けに徹し、切り返す気配を見せない。

「それとも、私では不足か！？」

『……』

シャルロッテの叫ぶような声に返事は無く。声は返つてこないが、呆れたような空気が帰つてきたのは、シャルロッテにもわかつた。

「やる気を出せ！――」

『と、言われても、な』

「何が悪いのだ！」

やはり私では満足できないといつのか。

シャルロッテは、口の中だけで悔しげにそつ嗟いた。

『お互い様だらう』

「何がだ！」

『ここを狙つていない以上は』

そう言つて、コテツが自分の機体の親指で差したのは、コクピッ
トだ。

だが、当然である。いくら刃引きされたブローディードであつても、当たり所が悪ければたちどころに死んでしまう。訓練とは、相手を殺すのが目的ではない。

(しかし……！)

シャルロッテは、連動型操縦桿を思い切り引き絞った。
連動型操縦桿。「クピット左右上部に付いている、ワイヤー付きの操縦桿だ。

握力に反応して手を握り、腕を振ればその通りに機体の腕が動く。
そして、その連動型操縦桿を、シャルロッテは前に突き出した。

「ならばお望みどおりにしてやる……」

瞬間、無駄のない高速の突きが繰り出される。

相手が、それなりのパイロットであれば、何かアクションを起すはずだ。

しかし。

コテツは、動かなかつた。
ぴたりと止まる刃。

(反応すらできなかつた？……いや、見抜かれていた！？)

反応しきれないにせよ、微動だにしないのはおかしい。
動搖すら見て取れないのは、寸止めにすることを見抜いていたからか、とシャルロッテは生睡を飲み込んだ。

(だつたら……！)

ここで、シャルロッテは一つの覚悟を決めた。

(私はこの国のためにこの男を見極めなければならぬ……。この程度で死ぬのなら、この先もどうしようもない……！)

更に、腕を。
突き出す。

『――』

刺されば、クルピットを貫くコースだつた。
コトツが息を呑む音が聞こえた氣すらする。

（本物なら、かわしきれなこまでもクルピットへは逸らせぬはず！）

と、その時。

耳に響いたのは鉄がかち合ひの硬質な音。

装甲が刃を弾いたのか？

「は……」

否。

弾かれたのは、シャルロッテのブロードソードだ。

固まるシャルロッテの背後の大地に、その切つ先が突き刺さる。

一瞬にして、コトツの刃によつてブロードソードは弾き飛ばされ

ていた。

あの、一瞬で。

思わず、シャルロッテに笑いがこみ上げる。

「ははははは！ やるじやないか、コトツ……」

『狙い通り、か？ 悪趣味だ』

「ああ、今日の訓練はここまでこしきつ

『ここのか？』

「ああ。満足だ」

シャルロッテは笑つて、頷く。

本気の一端を知ることができた。

彼女としては、今のところはそれで満足だった。

もしも、王女もエーポスすらも騙しきる、実力は全く無い詐欺師ならば、例え己がどうなろうとシャルロッテは排除しなければならない。

逆に、本物であるならば、何の問題もない。

そして、コテツは本物だった。それだけだ。

（これまでこの国も一息つけ。一つの峠は越えたと言つていいだらう）

溜息を吐きながら、シャルロッテはコンソールを操作し、ハッチを開いた。

「クピットハッチを開けば、太陽の光と共に清涼な空気が飛び込んでくる。

「クピット内には空調があり、内部の空気は整つているのだが、空調が効きすぎているばかりに、こせこせ作り物のよつたな空気があら。

その空気が、シャルロッテには嫌いだった。

「とは言つても、贅沢な悩みか」

そう、シャルロッテは一人ごちる。

SHに空調が取り付けられたのは、さほど昔の話ではない。

軍人の乗る兵器というものに関して、人間のために予算は下りない。

「の空調だつて、電子機器の冷却のために、といつも田で取り付

けられたものだ。しかも、一部の指揮官機のみに搭載されている。シャルロッテも昔は、空調の付いた民間の冒険者のSHを見て羨んだものだ。

それに、コテツのアインスには空調が付いていないのだ。訓練生の間からそういう快適な環境に身を置くところにならないという結果である。

だから、やっぱり贅沢な悩みだ。

「……ふう。少し暑いな」

シャルロッテは、片膝立ちになつた機体の装甲を伝つて地に降り立つた。

夏が近づいて来て、気温は徐々に上がり始めている。この国は季節による寒暖差がほとんどないのだが、それでも上がる時は上がる。

と、そこで、彼女はコテツのアインスを見た。

丁度コテツは、コクピットから出て地に降り立つたところだった。それに駆け寄る人影が二つ。

「ご主人様ー！ タオ 」

「コテツさん、タオルです」

出遅れたあざみと、普通にタオルを渡しに行つたリーゼロッテ。

「……出遅れました」

当然といえば当然か。リーゼロッテはトランジン付きのメイドなのだから。

「ああ、ありがとう」

無表情で「テツは返し、タオルを受け取るが、シャルロッテの視界には、汗一つかいでいるよ」には見受けられなかつた。

（底知れんな……）

結局、今回は実力の一端を引き出しだけに過ぎない。只者ではないといふことがわかつただけで、詳しいことは何も、だ。

前回の戦闘はまったく参考にならない。そもそもアルトとパイロットがまともに稼動した、というのがこの国では珍事だ。どこまでがエーポスと機体性能の力で、どこからがパイロットの力なのか判別できないのだ。

（私より少し下か、互角か……）

シャルロッテはそう判断した。例えやる氣を出したとしても訓練機でのレベルなら、それくらいであろう、と。訓練機は誰にでも扱いやすいように組んである。

（……ただ、私の剣を弾いた一瞬は圧倒的、そのものだつた）

結局、そこまで考えて、シャルロッテは頭を振つた。悩むのは性分ではない。どうせ、そのうち知れることだ。と、そこで丁度良く、シャルロッテに声が掛かつた。

「お疲れ様です団長」

声をかけてきたのは、クラリッサ・コーレンベルク。シャルロッテが率いる騎士団の、副団長だ。

金の、柔らかく波打つ髪を肩まで垂らした少女で、呑つ田がちで
あり、少々きつい印象を受ける。

背は低めで、そして印象通り、多少きついところがある。
非常に優秀な部下だが、融通が利かないところがあり、その辺り
は今後の課題であろう、とシャルロッテは捉えている。
そして、そんな部下に、シャルロッテは目を向けた。

「ああ。 なにか用が？」

「王女様がお呼びです」

「ん、 そうか。 では行ってくる」

「お気をつけて！」

その言葉に、シャルロッテは苦笑すると歩き出した。
慕ってくれるのはいいが、慕われすぎるのも問題だ、と心中で彼
女は呟くのだった。

7話　量り謀り（後書き）

自分の想定外の反響を貰つたので急遽一話製作開始です。

というわけで、前回までが一話なら、今回から一話目です。クラリッサのキャラが一転三転したおかげで大変でした。

今回のメインはそのクラリッサです。

前回までに台詞一つだけ、キャラ紹介で出てきただけのキャラですが、前回までは読み切り的空氣でテンポ確保のため必要最低限しか周囲を描かなかつたので、これからは周囲にもスポットを当てる行きたいかと思います。

コテツは王城の廊下を歩く。

「「主人様、やる氣を出してくだせりよー。そんなだから周囲に調子に乗られちやうんですよー？」

「と、言われてもな。別に適当にやつているわけでもない」

左にはあざみ、右にモードロッテ、だ。

「本當ですかー？」

「まあ、見た目にはなかなか分からんだらうが
「えー、でもですねえ。」「う、あれじやないですか。最後のアレみ
たいなガキンシッて」

「確かに、アレはす」「かつたですね。あれだけ、雰囲気違いました。
素人目ですから、よくわかりませんけど」

あざみの言葉に、リーゼロッテも追従する。

しかし、「コテツにとつてあの一撃は本意ではなかった。
彼は、憮然と肩を落としながら口を開く。

「あの動かし方は、褒められたものではない
「そうなのですか？」

だが、リーゼロッテが疑問符を浮かべると同時に、あざみも首をか

しげている。

「コテツは、説明しようと口を開くが、背後から声が掛かって、それは中断された。

「コテツ・モチヅキー、」ひらを向きなでこー。」

刺々しい声に、コテツが無表情で振り向くと、そこにいたのは、

「クラリツサカ」

「クラリツサカ、じゃありませんコテツ・モチヅキー」

そこにいたのは、王女騎士団副団長、クラリツサ・コーレンベルク。

「今日の訓練はどうでした？　まあ、どうせシャルロッテ様に負けたんでしょうけど」

「ご主人様、いきなり喧嘩売ってるんですねかこの人、」

「気にするな、いつものことだ」

「無視しないで、コテツ・モチヅキー。不愉快です、」

「無視はしない」

「それで、今日の訓練は？　まあ、私にも一勝もしたないと無いあなたじや善戦しても二分持たないでしちうけども」

その言葉を、コテツは適当に流して返した。

わざわざクラリツサの嫌味に付き合つときりがない。

「用件は？」

「なにがですか？」

「俺を蛇蝎の如く嫌う君が用も無しに？」

（いや……、嫌味を言いに来ただけかもしけんが）

結果としては、ちゃんとした用事はあつたらしい。
忌々しげに、クラリッサは口を開いた。

「王女様からのお呼びです。死ぬほど嫌だけど、一緒に行くから早くなさい」

「わかった」

彼女はコテツを嫌うが、律儀で真面目な性格もある。決してコテツに不利になるよう賢しく立ち回ったりもしない。

見たまま、ストレートに考えをぶつけてくるだけだ。些か直情的ではあるが。

だから、命令があれば如何に気に食わない命令であつても彼女は遂行するだろ？

「と言つわけだ。俺は王女に会いに行くが

振り向いて、二人に言つコテツ。
リーゼロッテは素直に頷いた。

「わかりました」

しかし、あざみは食いつがる。

「私はエトランジエのパートナーですから。同席しても構いませんね？」

対するクラリッサは少し戸惑った顔をしたが、すぐに平然として答えた。

「ええ、問題ありません、あざみ様
では行きましょうか」

いつの間にか、あざみが取り仕切っている。
険悪になり、クラリッサの嘲りに晒されるコテツを気遣つてのもの
のなかどうかは判断が付かなかつたが、なにを言つでもなく、コ
テツはそれに続いたのだった。

「よく来てくれたわ

王女の執務室。

謁見の間以外で話をする、といつことはまだ公にしたくないと言
うことだ。

その上、コテツ、騎士団団長、副団長と来れば、室内には厄介ご
との空気が漂つていた。

その、厄介ごとの気配のする空気を切り裂くよつて、アマルベル

ガは切り出した。

「公の会議でもなんでもないから前置きなしで行くわ。村から苦情が出てるから、三人で最近住み着いた山賊を倒してきて頂戴」

まさに、厄介」と。

その言葉に、いち早く反応し顔を歪めたのは、クラリッサ。

「何故三人なのですか!? こんな奴いなくとも私と団長がいれば……!」

確かに、この三人という面子は異常でもある。騎士団としてもなく、エトランジエとしてもなく、混成の三人で、だ。その説明として、アマルベルガは更に口を開いた。

「クラリッサ、この討伐の目的はコテツのためにあるのよ。分かるかしら?」「……どういふことですか」

クラリッサが聞けば、アマルベルガはコテツのほうへと目を向ける。

「コテツ。貴方の風評は貴方がどうにかしなさい、といふことよ。分かるかしら?」「テツ」「……は」

そう、コテツの現状の評判は非常に不安定だ。

先の戦いの活躍を信じて敬意を払う者も居れば、頑なに信じない者もいる。

だから、評判をある程度固定化しなければならない。

一応のこと、「コテツもそれは理解していた。

それ故、王女に言われ、コテツは領きを返すのだが、それだけでは不服なのか、アマルベルガは彼に言った。

「公の場以外では素で構わないわ。むしろ思つたことを話してちょうだい」

言われて、素直にコテツは思つたコトを口にすることにした。王女は聰い。下手に取り繕つては、火傷することになるだろ？。ならば、言われたとおり本音で話したほうがいい。

「俺は別に……」

そして、本音を言つならば、コテツとしてはどうでもいいのだ。風評も、なにも、馬鹿にされて怒るなり、もつと前に暴れている。むしろ、風評など知つたことではなく、好きに行きたいと思つのだが。

だが、そつは問屋が卸しはしない。アマルベルガは、ぴしゃりと言つた。

「貴方がそうでも、国としては困るのよ。貴方の評価が低いと。だから、盗賊討伐をこなしなさい」

そこまで言つて、アマルベルガは、今度はシャルロッテとクラリッサの方を見る。

「貴方達はその証明役よ。私が想定している最も上手くいったケースならね。王女騎士団団長と副団長が盗賊討伐への貢献を認めたら誰も文句は言えないでしょ？」「ですが、こいつは……」

食い下がるシャルロッテに、王女は言葉を被せた。

「勿論、それは最高のケース。駄目なら、貴方達が討伐なさい。結果は変わらないわ」

「つまりこの男に手柄を渡せというのですか？」

「貴方達にとつてそれは誇りを汚す行為だといつことは分かっているわ。だけどお願い。必要なのよ」

不満はあるようだが、王女に言われ、クラリッサも渋々ながら、頷くこととなつた。

「王女様が、そこまで言つなら……」

「そういうことよ。お願ひね」

「はっ、了解です！」

クラリッサと、シャルロッテが揃つて敬礼をする。そして、話は纏まつたのかと、口テツはまじりつでも良さげに窓の外へと目を向けるが。

「それと口テツ」

ぴしゃり、とセイに王女の声が掛かつた。

「貴方がやる気になるかどうかは自由よ。だけどね、貴方の意思に関わらず貴方は國の中心に立つし、私が立たせるわ」

「今回の件のようだ？」

皮肉。だが、アマルベルガは涼しげな顔のまま。

「ええ」

「ふらりと呼び込んだ外人が国の中心か」

「そうよ」

「正気じゃない」

「わかつてゐるわ」

最後まで、王女は、表情一つ変えなかつた。

「お願ひね」

「了解」

だから、結局コテツは、それだけ言つて退室することにした。

「あなたは！ 女王様になにを言つてゐるのですつ」

「出ぬなり、コテツはクラリッサに肘で小突かれたことになつた。

「ちよつとちよつと、クラリッサさん、別に王女様も怒つてなかつたじやないですか」

「あざみ様……、貴方は何故こんな男のことを……」

「素敵だからですよ。他に理由がいります？」

言われ、クラリッサは言葉に詰まる。

行き場を失つた矛先は、結局またコテツへと向けられた。

「コテツ・モチヅキ！ 少し来てください！」

「何の用だ？」

「訓練です。特別に私が付き合つてあげるから来なさいっ」

強引にクラリッサがコテツの腕を掴む。

（最近引き摺られてばかりだな……）

思いながらも、抵抗せずに引き摺られていくコテツ。

「あ、待つてくださいよ」主人様ー

「……大丈夫なのかなこの面子で」

シャルロッテの問いに答えるものは、誰一人としていなかつた。

8話 依頼否応無し（後書き）

ファンタジーテンプレの極致といえば盜賊の討伐だと思います。

「……まつたく、やつてくれる」

山賊の討伐を依頼された夜。
自室で、コテツはベッドの上に転がっていた。
思わず、口から溜息も漏れ出る。

「大丈夫ですか？ コテツさん」

そして、そんな淀んだようなベッドの隣には、心配そうにコテツを見つめるリーゼロッテが居た。
ちなみに、コテツの疲労の原因は簡単。
クラリッサとの訓練が、全ての原因だ。

「別に肉体的疲労は大したことないのだが。精神的には少しな」

訓練自体はいい。最終的に夕方を過ぎるまで振り回され続けたが、体力には自信があるほうだったの、問題ない。

しかし、コテツを苦しめたのはクラリッサの嫌味攻撃である。あまりに続く、とどまるところを知らない罵詈雑言は、容赦なく、じわじわとコテツを疲労させたのだった。
おかげをまで、やる気の一つも沸いてこない。

「なにか、して欲しいこととか……」

「特にないな」

言つと、ローズロッテはしゅんと肩を落とす。

それに追従するよし、耳と尻尾も垂れ下がつた。

コテツは、それを見よつともせず、天井を見つめて思い馳せる。

（今回の訓練でラグの具合は随分と把握できた。しかし、機体の着地時のクセは……）

思い浮かべるのは今日の訓練のことだ。
行つた操作。それに対する機体の反応。全てを思い出し、理想との差を浮かべていく。

それを蓄積し、もつともベターな操縦を探る。
そんな深い思考の海に、コテツはもぐりこんでいく。
のだが、そんな最中。

「む……？」

何故か、自分の手首が握られ、そして、何故かベッド脇に屈みこんだリーゼロッテの頭に自分の手が乗せられていることに気がついた。

思考から一気に覚めて、思わずそちらを見ると、唐突にひょっこりとベッドの縁からリーゼロッテが顔を出した。

「あ、あの。その、お姉ちゃんが言つては、えと。私に触ると、癒されるつて、そんな感じのこと……」

戸惑うように、その狐耳がぴくり、ぴくりと震えていた。
コテツは、思わず目を丸くしていた。

そんな中、リーゼロッテは続ける。

「ひ、膝の上に乗せて頭を撫でるのがベスト、だそうです」

そこまで来て、やつと「コトツは苦笑で返した。
気遣われているのだ、と今更気がつく。

「その……、私じゃ貴方を、愈せませんか……？」

気が付いた頃には、その一生懸命さに申し訳なくなるほどだ。

「あー……、遠慮……、いや」

故に、そこまでしても「うひうひ」、遠慮しつつ、と「コトツ
は言いかけたのだが。
やめた。

また、失敗してしまったが、とばかりに耳が垂れそうになるのを見
たからだ。

そして、彼は思い直すことになった。

（まあ、何事も経験か……）

気遣いや厚意を遠慮するのも美德だが、やりすぎは無粋である。
時にはそれに甘えることも肝要だ。

と、自分を誤魔化すように、コトツは頷いた。

「お言葉に甘えるとしそう」

「は、はーっ」

今度は緊張したよつてんと立つ尻尾と耳。

その緊張具合を見て、やつぱりやめたほうが良かっただろうか、
とコテツの思考はあわらじあらとふらふらする。

だが、コテツが何事かを口にする前に、リーゼロッテは覚悟を決めたようだった。

「じゃ、じゃあ、失礼しますね」

ベッドの端に座りなおしたコテツの膝に、ゆっくりと腰を下ろす
リーゼロッテ。

甘い香りが鼻腔をくすぐり、その髪が、物理的にコテツの首元を
くすぐつた。

そして、くすぐつたさも無くなつた後、コテツは、しっかりとリ
ーゼロッテ座つたのを確認して、聞く。

「それで、どうすればいいんだ?」

「え、っと、その、撫でてください……」

言われて、不器用にコテツは、リーゼロッテの頭の上に手を置い
た。

ぴくん、と体全体で震えて、彼女は驚きを示す。

その反応に、コテツは一度手の動きを止めることにした。

「何か、まずかったか」

「だ、だいじょうぶです、はい」

「じゃあ、次はどうすればいい?」

「えつと、じゃあ、手、動かしてください……。髪を、梳いてみた
りとか」

言われるがまま、コテツは手を動かす。

さらさらとした毛の質感は、人の髪の毛、と言つよつももつとふ

わふわとした気持ちのいい、まるで猫でも撫でていのむかのよくな手
触りだ。

「じひつ、わん」

「なんだ」

「その、ちょっとくらい、癒されますか?」

「ふむ……」

「なんか、私の方が、癒されてる気がして、『めんなさい』。また、失敗ですね」

そんな言葉に、コテツは少し思案して、こんな答えを返した。

「いや……、そうでもない」

はたして、リーゼロッテをどれだけ撫でたか。

コテツの部屋に時計はない、というか、コテツはこの世界で時計を見たことがないわけだが、とにかく正確な時間はわからない。が、それなりの時間が経つたため、緊張しつぱなしだったリーゼロッテもやっと、落ち着いて話が出来るよくなっていた。

「すまないな」

「えつと、いきなりなんでしょう。謝られる心当たりがないんです

が

「こなことまでさせた、だ」

撫でながら、唐突にコテツは呟いた。
リーゼロッテは、苦笑して返す。

「いいんですよ」

「そうか？」

「いいんです。私、あの時、コテツさんが生きて帰つてくる、って約束してくれて嬉しかったんです。だから、いいんです」

「そんなに、嬉しかったのか？」

「亞人の約束を守つてくれる人なんて、早々居ませんよ？」

「……そうか」

「コテツには、耳と尻尾が狐の物である」と以外に、リーゼロッテが普通と違うところを見出せない。

むしろ、かなり上等な人間にすら思える。

故に、リーゼロッテの受けているあるいは差別を、どうにも実感できなかつた。

「そういえば、コテツさん。クラリッサをと訓練してたんですね」

そして、その話は終わりだ、とでも言つてリーゼロッテは話題を変更。

特に追求すべきではない、とコテツは判断し、普通に頷いた。

「ああ」

「それで、お疲れなんですね？」

「そうだ。突つかかって来るのは、可愛いものだが」

天を仰いで、溜息を吐くコテツ。

対するコーベロシテは、瞼めるよつコテツに言つた。

「適当に、あしりつてるからじやあ、ないんですか？」

「む……」

「ダメですよ？ 本氣で相手してあげなきゃ」

「いや、しかし、別に手を抜いてること言つわけでもないのだが……」

「……」

言に募るコテツに、コーベロシテは、振り向いて真面目に言つて

う。

「なり、ちやんと言葉で伝えないと」

「むう……」

「云えよつとしないと、何も云わらないんですよ？」

そう言つて、彼女はこいつと笑う。

なんとなく、がらんどうの心に、暖かいものが入り込んできたかのよつな感覚を、コテツは覚えた。

そして、やつぱり、彼女の方が人として上等だ、と苦笑する。この世界に来て、初めてコテツに火種を「えたのが、彼女。だからこゝ、そんな彼女をコテツは。

「……言葉を呴べるのは得意ではないが

なんとなくではあるのだが。

「 やるだけやう」

裏切りたくないと思つた。

すると、彼女は笑う。コテツを信じるよつて。

「はい。応援します。大丈夫ですよ、コテツさんはすうじい人です
から」

「そうか？」

「はい……！ 私が保証します。驕らず、偏らず、ニュートラル。
それって、すうじことです」

果たして、コテツがこのよつに人と触れ合つのはいつぶりだった
らうか。

コテツ本人にはわからないが、どうにもリーゼロッテの笑顔だけ
は、眩しくて仕方が無かつた。

「だから、色々諦めないでください。頑張らなくてもいいですから
」

「……諦めない、か」

「はい。微力ながら私が、全力でお手伝いしますから」

言われて、少しだけ、空の心に火が灯る。

彼女が、コテツに親切な理由を、コテツが全てを窺い知ることは
できない。

語ってくれた言葉の中にはつたものの他にも、もつと多くの理由
があるのだろう。

(いつか、聞くこともあるかもしれん)

だが、こうして献身的に向き合つてくれる彼女を見て。
不思議と、胸に灯つた火種を消したいとは思わなかつた。

「……』主人様、疲れています？」

「いや、そうでもない」

アインスの狭いコクピットに、あざみと二人乗りをしながらも、コテツは涼しい顔で機体を動かす。

昨日結局夕方を過ぎるまで訓練を続けていたコテツをあざみは気遣うが、彼は眉一つ動かさなかつた。

『ちゃんと付いてきますか？』

『問題ない』

『クピット内の響くのは、クラリッサの声だ。』

『コテツ、あざみ、シャルロッテ、クラリッサ。実際に移動しているのは三機。』

『んー、でもアレですね。早めに予備の機体を用意してもらつたほうがいいでしょうか。もしくは複座にこれを改造して貰うとか』

『そもそもしけんな。この世界の複座機がどんなものかは知らない』

が

「ディステルガイストを見せてしまつと盜賊が警戒する、といつの
も分かりますけれど、操縦にくくないですか？」

「こういった状況にも対応するのが優秀な軍人、と言えどもこの先
恒常にこうだと少々苛立つな」

「私としてはご褒美なんですけど」

あざみは、コテツに抱きつくように体を固定している。

「しかし、君は本当にディステルガイストを呼び出せるのか？」

「ええ。アルトの基本の機能ですよ」

「うして、アインスに乗っているのも、あざみが居れば即座にディ
ステルガイストを呼び出せる、という機能があるからだ。
空間を渡つて、機体を呼び出すことが、エーポスには可能らしい。

『さて、そろそろ中継の村に着くぞ。今日は一日そこで休んで明日
戦いに出る』

シャルロッテの声が響き、その仮面を遠くにある村の遠景へと
向けた。

「ところで、この件の山賊とやら、一体どのような相手なんだ？」

『ふむ、コテツは山賊の相手は？』

「元の世界ではそのような相手ともやつたはずだが、その経験が役
に立つとは思えん」

『それもそうだな……。今回の山賊は、今見えている村から更に奥
の山にいる。奴らは山道に陣取り、そこを通る者から物を奪い取る。
山賊がSHを所有していた場合馬車であればまつたく歯が立たん』

『どううな』

『通常は通る側もSHの護衛をつけるが、それができない場合は通行止めも同じだ。厄介がすぎる』

「これを討伐すれば名誉としては十分、ということか」

『無論。ここは重要な街道だからな』

石畳で整備されているわけではないが、一面の草原に、一本描かれた土色の道はかなり広い。

『さあ、村に着いたぞ。話は既に付いてる』

そうして、三機の機械の巨人は、草原へと膝を付くのだった。

可愛いは正義だと思います。まあ、リーゼロッテを出した時点でこうこうことしたかったのは火を見るより明らかだつた気もしますが。

一章のほうは読み切り的な空氣でできるだけすつきり終わるようになー
ークを少なめで行きましたが、続くとあつてはとりあえずやりたい
ことやつてきます。

しかし、これで私が狐耳萌えだということばれてしまった様な気
が……。

いえ、まあ、ケモ耳とかまるつと好きなんですけどね。

とりあえず、焦らずゆっくり一人一人前面に押し出して行けたらと
思います。

どう考へてもメインキャラ全員並行に同時進行でプッシュとか無理
ですしお。技量的に。

10話 すれ違つ訓練

「はあ……、」お方が、今回のHTランジュですか

SHの技術は、通常の生活中まつたべと言つていよいよど転用され
てはいない。

そのため、村は周囲を木の柵で囲つただけ。村長の家でさえ木造
建築。

鉄の色など、どこを探しても見当たらない。

「よのこへお願ひします、HTランジュ様」

HTランジュの如は、國中、村の一つ一つまで広まつてこるよつ
だつた。

村長は深く頭を下げ、コテツの手を握る。

コテツは、無言で村長の姿を見ていた。

「やるだけやらせてしまひ

そう言つて、コテツは村長から背を向けた。

その背を、あざみが追つ。

コテツは、家を出て近くにあつた木を倒して削つただけのベンチ
に座る。

「い主様？ どうかしたんですか？」

「いや……」

さつげなく、あざみがコテツの隣に座つた。

「初めて首都から出たわけだが、こうしてみると」

「こうしてみると？」

「異世界に来た事を実感させられる」

「そんなモンですか？」

「外に出るまでは、いつそ地球に封建制の国が残っていたと言われたほうが信憑性が高いと思つていた」

「はあ、なるほど。異世界設定とか、壮大なドッキリの方が信じ易いかもしませんね」

「だが、こうして世界の奥行きを見せられると、遠くまで来たものだ、とな」

遠く空を見上げてみても、コテツの居た地球と変わったといふは見当たらない。

「大丈夫ですよ、」主人様。私がいますから」

「まあ……、ある程度俺の世界の話題が通じるのは、助かる」

と、そんな一人に駆け寄る人影が一人。

「コテツが足音のする方に目を向けると、底にはクラリッサが立つていた。

「コテツ・モチヅキ。なにいきなり家から出でるんですか。村長さんが何かしたかつて戸惑つてました」

「まあ、少しな」

クラリッサは、コテツに呆れた目を向けている。
世間知らずを見る目だ。

「まあ、それは異世界から来たんだから色々あるんでしょうけど。村長さんは今、いつ盗賊が山を降りてくるかって怯えてるのです。

それを安心させるために胸を張るもの、私たちの仕事。余裕のある
フリだけでもなさい

「やうだな。すまん」

「さて、じゃあコテツ、行きますよ

「どこにだ?」

踵を返したクラリッサに、コテツは首を傾げた。

「訓練です、付いてきなさい」

有無を言わせず、クラリッサは言い切る。
これに逆らうと、ろくなことにならない。

ちくちくと、嫌味が続く上に、結局訓練させられるのだ。

コテツは、無言で立ち上がった。

そして、一人無言で歩く。

さほど広くも無い村を出て、膝を付く機体の元へ。
装甲を登つてするりと胸のからコクピットに入り込む。
コンソールを弄ると、ハッチが閉められ、機体が立ち上がった。
それは、クラリッサの機体も同じのようで、AINNSと似ている
ようで、どこかスマートな印象を受ける赤い機体が立ち上がる。
それと同時に、コクピットに声が響く。

『真剣だけど、問題あつません。あなたの剣くらいい避けるし、こつ
ちは寸止めにするから』

「了解」

コテツは短く答えた。

確かに、コテツもクラリッサも、壊れる寸前で止めるくらいいの技
量はある。

それに、コテツのAINNSであれば、壊れたとしてもティステル

ガイストがある。

山賊が警戒する件に関しては、他の面子に相乗りするなり、SHの手のひらに乗るなりして移動し、必要とあらばディステルガイストを呼び出せばいい。

そもそも、城内で信頼を得るまでコテツは一日も無駄にできないはずの立場だ。

だから、訓練も当然。
熱に入る。

『じゃあ、行きますよー。』

クラリッサからの通信が届くと同時に、高速で赤い機体が踏み込んできた。

シュテイールフランメ。特徴は高出力による機動力とハイパワー。弱点は装甲の薄さ。クラリッサはその弱点を巨大な大剣を盾代わりにも扱うことで、機動力を殺さずカバーすることができる。
「クピットには、その大剣が風を切る音すら聞こえてきた。

（機体が少し振り回されているな……）

考えた瞬間、インパクト。

横から迫る黒い大剣を、コテツはブロードソードを立てたことで対応した。

「……ぬ」

初撃は防御に成功。

しかし、通常の出力が違すぎる。
ともすれば押し切られかねない。コテツは受け流すよつこ、しゃがみ込む。

頭上を大剣が駆け抜けていき、コテツはそのまま大剣を振り切った体制のシユティールフランメに突きを放つ。

『んっ……！ 悪くないけど、当たらぬ！』

あるいは当たるかと思われた攻撃だが、すんなりクラリッサは身を翻した。

コテツから見て右に体をずらしたシユティールフランメが、そのまま縦に剣を振り下ろす。

コテツは、片膝をついて、剣を横にし受け止める。

「ぐ……、ぐつ」

機体が軋む。

出力の違いは絶対的な差として、コテツのアイインスを押しつぶさんと押し掛かって来ていた。

まず一番最初にガタがくるとすれば腕だ。まず腕が裂けて千切れ

る。

（避けきれるか……？）

迷う暇はない。潰されない内にどうにかする必要がある。

コテツは運動型操縦桿を握り、繊細な操作を行った。

機体を右にずれるようにしながら立ち上がらせ、剣は次第に切つ先を下へ向けるようにする。

調整をしくじれば立ち上がれず潰されるか、先に大剣が滑り落ちて体を切り裂くかのどちらかだが、コテツは上手く成功させた。

かみ合っていた刃は滑り合い、大剣は地へと向かう。

コテツはそのままブロードソードを横薙ぎにするが、あっさりと弾かれた。

（やはりこの動かし方だと、攻めは合わんな）

考えながらも、機体を動かす。

とりあえずは距離を取る。大剣の間合いの外へだ。

（しかし、Jのワグと即応性の悪さ。俺の世界で行けば何世代前の機体になるんだ……？）

クラリッサが踏み込んで、連撃を行う。

（しかも魔術補正か、妙に性能が良いから手に負えん）

まともに受けはいられない。

その全てをコテツは流すように受け取る。

（Jの世界の技術では操縦周りの設計は難しそうなのか？ だから機体性能にばかり目が行ってしまう……、いや、マイルドな方が確かに動かしやすいか）

続く連撃。

コテツは受け続ける。

（……まあ、今回はこんなものか）

そして、最後に、コテツは持っていたブロードソードを弾き飛ばされた。

「参った」

『こつも通りですね！ コテツ・モチヅキ！ シャルロッテ様が直

々にあなたを鍛えてこようとしたのに申し訳ないとは思わないんですね
か!!』

そんな声を聞きながら、コテツはコクピットから出て、機体を降りる。

そして、そのままコテツは近場にあつたベンチに座り込んだ。
少し遠くでは、クラリッサが機体を降りているのが見えた。
そんな彼女は、機体を降りるなり、すぐさまコテツの前へとやがてくる。

「今日も私の勝ちですね」

そして、そう言ってクラリッサは無い胸を張った。
コテツは、そのクラリッサを見上げ、素直に頷いた。

「やうだな

「……ええ、これで私の何勝でしたっけ

「七勝目だ

「……そつ

何故か、彼女の眉間に皺が寄っていた。

コテツにも、機嫌がよろしくないことは見て取れる。

「……歴代最弱ですものね

「そうかもな

いや、現在進行形で悪くなっている。

コテツが言葉を紡ぐ度に、彼女の顔は不愉快そうに歪んでいった。

「本当、前代未聞ですね」

「どううな
「なにか思う」とせ
「ない」

コテツは真顔で答えた。

「あなたは……」
「なんだ」
「あなたは一体何なんですか……！？」
「君は俺に何を答えさせたいんだ」

そして遂に。

コテツはクラリッサの堪忍袋を引きちぎってしまったことを知る
「」こととなつた。

「……悔しがつてくださいよ」

ぱつり、とクラリッサはその言葉をこぼした。
コテツは、意味がわからず首を傾げる。

「何故だ？」

すると、まるで壊き止めていたものが決壊したかのよつて。

「どうして悔しがりもしないんですか！」

遂に、クラリッサは語氣を強めて言い放つた。

コテツは、表情に出さないまま面食らつっていた。

「負けても馬鹿にされてもへらへらと… それが愉快な訳じゃない

んでしょう？ あなたが悔しいと叫ぶのなら……！」

コテツは、黙つてクラリッサを見上げる。

「ど、どうして捨てられた犬みたいな顔するんですか……」「すまん

捨てられた犬のような顔、というよりは困り顔だ。コテツは人付き合いが下手だ。それを求められなかつたからだ。機体に乗つて、勝ち続ければ何も文句は言われなかつたのだ。

「なんで、謝るんですか」「すまん。……とりあえず、どうして俺が悔しがらないのか、という話だつたか」

コテツは、人付き合いの薄さゆえに困惑。が、しかし、彼はそれでも一応考えて答えることにした。コテツは、クラリッサを見上げたまま、口を開いた。

「負けたら死だつた。悔しがる暇もない」

情けもまた誉れであるこの世界とは違つ。

「コテツの世界はもつと血なまぐれい。むしろ、ヒースは意地でも殺さなくてはならない存在だ」。

「次があるのは素晴らしいことだ

「だ、だからつて！ どうして、あなたは……」

言葉に詰まるクラリッサ。それを見上げながらも、コテツは彼女の言葉の意味を考える。

「あなたを見ると苛々します！　どうして、あなたは平然としているのです！」

「君は、俺に悔しがって欲しいのか」

「つ……、そり

クラリッサ。クラリッサ・コーレンベルク。

優秀だが、まだ未熟。融通が利かないが、眞面目な努力家。

「……君が、努力家だからか」

「は？　あなたは何を言っているのです？」

どうやら、上手く伝わらなかつたらしい。

コテツは今一度言葉を吟味する。

「つまり。努力もせず、嘲笑される側に甘んじていながらも、エトランジエでありアルトの操縦士に納まつた俺が気に食わない、ということではないのか？」

「つ……！」

少なくとも。ただコテツ・モチヅキが気に食わないというわけで突つかかってきているのではない、とだけコテツは判断できた。とりあえず、彼女が努力家の一人として怒つているのだ、ということも、わかつた。

つまるところ、努力家からすれば、努力しないコテツは見てて苛立つ、嫌いだ、ということなのだろう、と考えたのだ。だが。

言われたクラリッサは、驚いたような顔をしていた。まるで、ショックだ、とでも言いたげな顔だ。

「違う……、違いますっ！ もう……、知らないっ……！」

クラリッサが踵を返す。

「コテツは声を掛けようとしたが、言葉が見つからなかつた。ただ、クラリッサの背を見送つて、コテツは首を傾げながらのろと立ち上がる。

「……難しいな」

ほつりと呟くが、それに返ってくる答えはない。
と、そこへ、見計らつたかのように、あざみがやつてきた。

「訓練、おしまいですか？」

「ああ」

頷くと、あれよせタオルを差し出し、コトシはありがたくそれを受け取った。

そして、少し、あわみに聞いてみる。

「ねむる」

「なんでしょう？」

「努力家にとって、努力しない人間は、どう映る?」

言葉に対し、あざみは首を傾げ、数秒の思考の後、考えを語つた。

「私も努力家じゃありませんからわかりませんけど。努力しないよこの野郎！ つて感じじゃないですかね？」

「ふむ」

結局、移動と訓練で日は暮れかけている。

「コテツは、村に戻つて眠ることにした。」

「ねえ、『ご主人様』

夕食を終えた後、ふらりと外へ向かい、一人佇んでいたコテツの背に声が掛かる。

「コテツを主と呼ぶ女性など、一人しか心当たりはない。あざみだ。」

「なんだ」

「ご主人様つて……、操縦以外基本的にダメ人間ですよね」

確認するような言葉に、思わずコテツは脱力する羽目となつた。

「……否定の言葉は出てこないが。一体何の用だ」

「いえね、今日の訓練が終わつてからクラリッサさんにガン無視されてたなあ、と思いまして。何かあつたんですか？」

「ふむ、まあ、そうだな。怒らせた」

事実だけを、コテツは短く告げる。

「怒らせたつて……まあ、いいです。とにかく、明日は出撃ですね」

「やうだな

今日が終わり、明日の口が昇ればコテツ達は山へと向かう」となる。

「コテツの初仕事であり、何もかも未知数だ。

「頑張りましょう、『主人様』」

「そうだな」

「むう……、やる気ないですなー」

拗ねたように口を尖らせ、あざみはコテツを見る。そして、すぐに表情を戻し、コテツに向けて、妖しく笑った。

「そんなご主人様に一つ」忠告を

「なんだ」

「何も持たない、夢も見ないし願望もない。それは自由で楽ですけど」

月夜の下で、黒髪の少女はコテツに向かつて囁いた。

「状況はそんな貴方を許しません。結果が同じなら自ら進むか、無理やり背中を押されて進むか。どっちがいいか、決めておいた方がいいですよ？」

「……この世界には、お節介焼きが多いのか？」

「……だけ言って、後はおやすみなさい」と言い残し、あざみはコテツの元を去つていいく。

残されたコテツは、一人ぼつりと呟いたのだった。

10話 すれ違う訓練（後書き）

次回辺りから戦闘に入ります。

11話 イージーストレート

翌日。

SHに乗つて、一同は山へと向かっていた。

「しかし、相手の規模はどのくらいなんだ？ そもそも、二機で戦えるのか？」

コテツは、モニタの向こうに向かって質問を投げかける。

『問題ない。多くて十機。少なければ一機。構成員は三十はいるだろうが、全てがSHを持っているなどということはあり得ない。目撃情報では四機は確認されている。伏兵追加で考えて、六機前後といつたところか』

「一から一倍いると思つていいのか

『だが、一から騎士団長と副団長だ。そして、お前はティステルガイストに乗れば一騎当千も同じだらう?』

「さてな

しばらく歩き、山は田前となる。

緑が生い茂る、変わったところは見受けられない山だ。そして、その田前でコテツは機体を立ち止まらせた。

『どうした?』

「妙だ

嫌な、予感がしていた。

無論、それはただの予感であり、氣のせいであるとも言える。

だが、戦場において臆病であることは、生き残る上でプラスにな

る。

『怖気づいたのですか？　コテツ・モチヅキ』

「クピットに、クラコッサの声が響き渡るが、コテツは無視して山を睨み付けた。

レーダーには、何の反応もない。

やはり、妙。

（ここまで何の偽装もせずにSHで歩いてきた……。どう考えても山賊にされているはずだ。なのに相手のSHが一機も見えない……）

定石であれば、斥候を出す。

山賊にそういう用兵術がないとしても、見張りぐらには立たせるはずだ。

「罷だ」

「テツは強めに口に出す。

『罷？　山賊たちは飲み明かして寝こけているだけかもしれんぞ』

違和感は、嫌な予感に変わって、ひしひしと迫ってきていた。あまりにも静かな山。まるで嵐の前の静けさではないか。敵のSHを見つけて慌しく駆け回るでもなく、ただ、静か。

（十中八九、待ち伏せか）

コテツの感覚からすれば、静か過ぎるのだ。

そう、過ぎる。まるで、あえて息を潜めるかのよつな。

静寂に徹してゐるかのような空氣。

この業界で慎重に過ぎるといつて言葉はない。

用心に用心を重ねてなお、一撃で死ぬ可能性がある世界だ。樂觀じるか、もしかするとこちらを一瞬で葬り去れる罠が張つてある可能性を考慮すべきだ。

少なくとも、コテツはそうあるべきだと考えていた。だが、しかし。

『怖気づいたのですか、コテツ・モチヅキ。ならば、あなたはここに残つていなれ』

「罠の可能性は」

『どちらにせよ私たちは山賊を倒さなければならぬ。なら、どちらも一緒にです。待ち伏せされていよと、私と団長の腕なら問題にななりません』

『悪いが、こればかりはクラリッサと同意見だ。やることは変わりまい。それに、罠があつたとしても、それだと突破するまでだ』

『は、そう。

』』』はコテツがいた、泥まみれの戦争を続ける世界ではない。正々堂々を誓れとする、騎士の世界なのだ。

(軍人の理屈は騎士には通用しないのか……)

そこをコテツは失念していた。今所属しているのは合理性を突き詰めた軍隊ではないということを。

歯噛みした時にはもう遅い。

『そこまで言つならあなたはそこで見ていいなさい。私が一人で片付けてきます……』

既にクラリッサは大きく飛び上がり、山へと駆け出していた。

「シャルロッテ、すぐに呼び戻せ」

『そこまでか?』

「ここまでやつて何もしないといつことは懐に潜り込ませる氣だ』

『いや、しかし山賊にそのような高度な考えがあるとは……』

シャルロッテが咳いた瞬間、場に動きがあった。

山中に突如現れる反応。立ち上がる一機のSH。

「……アレはなんだ?」

「ストラッドですね。量産型ですが、バランス良く纏まつた軽快な動きをする機体です」

「テツの隣で、じつと事態を見守っていたあざみが咳く。緑の、スマートな機体だ。

「意匠が、随分と違うように見えるが」

「我々の機体が騎士に似た意匠なのは軍のモノだからです。民間用は多種多様です」

「テツからしてみれば、そのストラッドは随分と軍人的な外見に見える。

そして、その緑の機体は、ナイフを片手にクラリッサのシュティールフランメに斬りかかる。

そんな中、シャルロッテは咳いた。

『ふつ、お前の嗅覚もまだまだだな。アレが罠だとすれば』

そして、余裕たっぷりの笑み。

クラリッサの機体が、背の大剣を跳ね上げる。

それは明らかにナイフの迎撃には間に合わないよつた速度だったが。

『随分とお粗末だ』

刃ではなく、柄を振り下ろして、クラリッサはそのナイフを弾いて見せた。

『舐められたものですね!』

そして、手首を捻つて横薙ぎ。

相手のストラッドは、慌てて後ろくと避けて、尻餅を突く。そのまま、クラリッサは大剣をストラッドの眼前に突きつけてみせる。

『おとなしく、機体を降りなさい。そうすれば殺しはしないです』

確かに、見事な手際であった。

この腕の差、そして、武器無しではクラリッサに山賊が敵うわけが無い。

あつせつと、無力化されストラッドの「クピットハッチが、開く。

『やはり、警戒しすぎだな、コテツ。山賊のことだ。昨晩飲み明かして、大半が使い物にならないのだ』
(いや、しかし……)

果たして、コテツが異世界の山賊について知らないだけなのだろうか。

だが、コテツの嫌な予感は払拭されないでいる。

むしろ、更に深まつていぐ。

(上手く行き過ぎてこむ………?)

そう、むしろ、だ。

相手の本拠に飛び込んだら、一機だけといつ温い待ち伏せ。
そして、あつさりと負け、素直に投降する盗賊。
あまりに上手く行き過ぎていないか。

だとすると、これは相手の仕組んだものではないのか。
そして、これが本当に相手が仕組んだものだとすれば、狙いはな
にか。

(あの機体は凶。だとすれば次に狙うのは……)

考えてみれば、恐ろしく簡単だ。

今、クラリッサは一機に剣を向け、足を止めている。
恐ろしく、いい的だ。

「狙撃だ、クラリッサ！ 避けろッ！…」

『え？』

「コテツが叫んだのと、レーダーに光点が映つたのは、ほほ同時だ
つた。

そして。

クラリッサが驚いた声を上げた瞬間には、既に銃声が響いていた。

『あ……、さやああああああ…』

倒れしていく機体に、コテツは歯噛みした。

(なんとこゝ腕だ……！　機体が起動してから一瞬で関節に当たった！)

山賊の放つた銃弾は、クラリッサの機体の膝の裏に命中し、そのまま貫いた。

結果として、左足の膝から下が切り離され、機体はバランスを保てず仰向けに地に伏すこととなつた。

コテツの元まで、地響きが聞こえてくる。

『な……、クラリッサ！　無事か！！』

『は、はい、団長、なんとか。ですが、足がやられました！　機体を立て直せません！！』

クラリッサの声は、ほんと悲鳴と言つてもよかつた。完全に嵌められた。油断し、釣られて、撃たれた。

これでクラリッサはまったく身動きが取れない。

「クピットを出たが最後、すぐさま撃たれてしまうだらう。そうなれば、ハッチをロックして神に祈るほかに、出来ることなどない。

『すぐに救援に向かう！！』

その状況を見て、シャルロッテが叫ぶ。だが、その彼女を、コテツは制止した。

「待て」

『一体なんだ！』

「これこそ罠だ。落ち着け、シャルロッテ。クラリッサはすぐには死なん」

瞬間、今一度銃声と悲鳴が響く。

銃弾が、クラリッサの機体の胸部装甲を叩いた。

威力的に貫通することも無く、少し装甲が削れただけだったが、部下の悲鳴はシャルロッテの頭に血を上らせるには十分でもあった。

『なにを戯言を…』

「だから待てと言つている…」

遂にコテツは、声を荒げた。

クラリッサが先行してしまったのは、コテツの態度が中途半端だったからもある。

だからこそ、今回は意地でも止めることにした。

「狙撃手には常套な策の一つだ。一人目の手足を撃ち抜き、甚振つて、それを見かねて出てきた仲間を撃つ」

例え機体の元に辿り着くまでは避けられてもだ。例え、自機の「クピット」にクラリッサを招きいれようとすれば、その間は確実に避けられない。

機体を担いで戻つたとしても、運動性は加重によつて大きく落ちる。避けきれない。

そしてもう一つ。

クラリッサは、人質でもあるのだ。妙な動きをしてもクラリッサは殺す、と。

『ならばどうすればいい！ 指を咥えて見てろといつのか…』

さらに勘が正しければ、クラリッサの周囲には十機近いSHが潜伏している。いや、これはほぼ確定と言つてもいい。

ここまで周到な相手がこれしか手勢を用意していらない訳は無い。いかに上手くクラリッサの機体を確保できても集中砲火を受けて、

クラリッサは無事ではいられないだろう。

(なりば……)

と。

コテツが自分の考えを述べようとしたそのときだった。
クラリッサから通信が入る。

『怖気づいたのなら、帰りなさい、コテツ・モチヅキ！…』

まるで、よくしなる鞭のような声だ、ヒコテツは思つた。

「君はこの状況でなにを……」

敵のテリトリー内で機体は動けず、身動きがまったく取れない。
果たして、その恐怖はいかほどか。
なのに、クラリッサは言つた。

『これは私のミスですっ。あなたがフォローする必要は……、ない
です』

「だが……」

『帰りなさい！ 私は自分で何とかします！』

自らでは機体も立て直せないこの状況で。
しかし、彼女はコテツの助けを拒む。
確かに、そうだ。コテツもまた、このような状況になつたなら、
放つておけというだらう。

己のミスでの危機的状況。おいそれと助けは呼べない。

(だが、俺は死なせたいとは思えん)

死なせたくない、と、コテツは思つ。

間違つてゐるのだ。先を展望せず、流されるままに生きる自分が生き残り、将来有望なクラリツサが死ぬ。

そんなものは、間違つてゐる。

無論、コテツも死にたいとは思つていない。

ならば、答えは一つ、金員で生き残るしかない。

『あなたでは足手まといですから！だから、帰りなさい……』

だが、話は聞いてくれそうにもない。

コテツは、押し黙つた。

(……駄目か)

そもそも、コテツはコモニケーションは得意ではないのだ。彼女を上手く説得する言葉も何も思い浮かばない。どうにかしよにも、彼女がそれを許さない。

故に、八方手詰まり。

なのだが。

しかし、しかしだ。

ただの一度も。

望月虎鉄は戦場で諦めることを望まなかつた。

だからコテツは息を大きく吸い込んで。

叫んだ。

「　話を、聞けええええッ！　」

一緒に乗つっていたあざみが耳を押さえて顔をしかめるが、とりあえず無視した。

そして、モータの端に映るクラリッサとシャルロッテが驚いた顔をしていたが、それも無視だ。

やつと静かになつた。ここに来てやつと、コテツは発言権を得た。

（やつてみよつじやないか。伝える努力とこつものを……ー）

思ひ浮かぶのは、リーゼロッテの言葉。

こうなつてしまつたのは、コテツの怠慢でもある。何も伝えようとせず、信頼されようともしなかつたのはコテツの失敗だ。

だから、今語る。

「いいか！　俺は君が思つてゐるほど弱くないつ。そしてもう一つ！」

慣れないからこそ、最短で、簡潔に。

「　君は必ず助ける。絶対にだ」

11話 イージーストレート（後書き）

そろそろテンション上げてこきます。

展開の強引さとか、力不足を実感しながら書いてますが、二章も大詰め。このまま走りきりたいです。

ちなみに、本編でも出でますが疑問が出るかもしれないのに先にここに。

軍用機：ある程度の整備を前提として、魔術と機体性能を優先。優れた魔術は銃に勝ると言つ考え。ついでに、剣で戦うのが華々しい騎士の流儀である。見栄と威圧を意識して洗練されたデザインを目指す節がある。

民間機：満足に整備を受けれない可能性も考え、汎用性を重視。また、魔術が使用できないものも多いので、銃を持つことが多い。弾丸は魔術の展開スピードに勝るという考え方。

生身で森をひた走る。

それが、コテツの出した答えである。

『ご主人様ー、貴方ほんと人に人間ですかー?』

シャルロッテが警戒しているように見せかけ、極めて遅いスピードで山を登り、それを囮にコテツが生身で走る。
これなら、気づかれずにギリギリまで接近できる。

『ちょっと正気じゃないスピードが出てるんですけど!……』

「殺人マシーンに乗つて生きている人間を人間と呼ぶなら、人間だが」

無謀にも見える策だが、コテツの走る速度は、常軌を逸していた。
それ故に、迷わずコテツは其の選択肢を選んだ。

『初耳ですけど、それ』

「コテツにとつては、否。コテツの居た世界においては、腕のいいパイロットをエースと呼ぶのではない。

従来機を一足飛びに越えた、エース機に乗ることができた者をエ

ースと呼ぶのだ。

エース機を起動させるために、何人のパイロットが死んだか定かではない。

ただ、少しの加速で人体が破壊される機体群を動かすには、それほどまでのことが必要だった。

「俺が君に平気な顔で乗れるように、俺はそれに乗り、慣れた。その結果だ」

腕のいいパイロットを捨石にしてでもエースを得ようとする風潮はどこから生まれたのか。

それは、最初に乗りこなしてしまった男が居たからだ。

そのエースはパワー・バランスを覆すほどに強かつた。それ故に、その彼と同じものが必要だつたのだ。

AI分野も研究されたが、実用化に成功したのは結局戦争も末期。その上、人の操る纖細で有機的な操縦に敵うことはなかつた。

それ故に、万の人間を殺してでも、あらゆる勢力はエースを作り出すことに躍起になる。

そして、そんな風潮の中、コテツはエース機に乗せられ、生き残つた。

その上更に、人間とは必要以上に適応する生き物で、機体に慣れ

た。

エース機の機動によって人体に掛かる過負荷は、脳の使用領域の拡大と、筋肉の異常発達を招く。

『つまり、アルト乗りになれるひと、なつた人は全て、人間やめるつて事ですか？』

ヘッドセットから聞こえる声に、コテツは答えなかつた。

そうとも言えるし、それでもないと言える。

一応遺伝子的には人間とまったく変わりない。

(一番変わるのは精神的部分かもしけんが)

コテツが係わり合いになつた全てのエースはどこかずれていた。
人として致命的に、ブレていた。

「だが、便利だ。平和なときにはまったく役に立たないがなつ……！」

と、木々の向こうに赤い影が見えた、と思ったその瞬間。
身の危険を感じて、コテツは大きく横に飛びのいた。

『「主人様！……』

轟音と共に、地面が抉れる。

「どうやら田視で発見されたようだ。シャルロッテ、あざみ、囮を
頼む！」

『任せてくれ』

『お任せあれ』

言葉を伝え、コテツは走ることに集中した。姿勢を低く、ただ、
クラリッサの下を田指す。

上を見上げれば、既に十機近い機体が動き回り、その中の一機は、
コテツに銃口を向けている。

「くつ……」

勢いのまま、前に飛ぶ。

背後の地面が抉れ、振動と共に土や木の破片がコテツの背を叩いた。

『——、コテツ・モチヅキ、来てるの……？』

クラリッサの慌てたような、驚いたような声がコテツの耳に聞こえてくる。その声に、攻撃を受けているような焦りはない。どうやら、所詮生身の人間だと思って、クラリッサを人質として扱うつもりはないらしい。

好都合だった。

「すぐに着く」

『やめなさい！ 危険です……』

「そんなこと、言われなければわからなこと思つが？」

危険は百も承知。コテツはただ、付近を穿つ銃弾を無視して走り続ける。

「それに、君は俺が嫌いだら？。——でもしも事故死したなら、それはそれでラッキーだ」

皮肉るような、コテツなりの冗談。

恐ろしいほど笑えない冗談だったが、冗談のつもりである。そうかもしませんね、と軽口のような言葉が返ってくるだら？、とコテツは考えていた。

しかし。

コテツの予想に反し、返ってきたのはそんな台詞ではなく。

『そんなわけないじゃないですか？……』

返ってきたのは、涙声だった。

『あなたは大切なエトランジエ様なんですよ……！？ ばか……！』

コテツは、酷く面食らつ羽田となつた。

(なんだと……？)

彼女は、コテツを嫌つてゐるのではない、と言つ。しかし、言つられてみれば、彼女は非常に優秀で、物事に簡単に私情を挟んだりしない人間だ。

そう、コテツ自身がそう評価したのだ。

『決して好きだと思つたことはありませんが！ 誰が死んで欲しいなんて思うもんですか！！』

決して彼女はエトランジエが期待はずれだつたからと言つてわざわざ差別をするような人種ではない。そして、嫌いではない、と彼女は言つ。ならば、彼女の態度はなんなのか。

(怒つて、いるのか？ 僕が不眞面目な態度だから)

そして、思い出す。

(彼女は悔しがれ、と言つた。悔しがらせたいと)

あの態度の理由。

それが、嫌いから来るものではないのだとしたら、もう後は一つしか思い当たらぬ。

思に当たつて、「テツは思わず呟いた。

「……なんて不器用な」

あざみの言葉を借りるなり、『努力しないよ』の野郎一』と云つて
じだ。

つまり、敢えて嫌われる態度で発破をかけようとしていたのだ。

（や）までの考えがあつたかどうかは知らないが……）

不器用に、あえて苛立つ態度を見せて、発奮をせよつと。

（不器用すぎるだらり……。俺には難解すぎる）

まつたく、テツには伝わつていなかつた。純粹に嫌われている
とすら思つていた。

だが。

がらんどうの心に、炎は燃え上がる。

（なんともまあ、伝えよつとしなければ伝わらないことの多こいと
か。……ワーゼロッテの言つ通りだな）

『帰りなさい……』

「断る」

背後では、ディスティルガイストが非常に緩慢な動きで動いている。
パイロット無しではある程度の動きしかできない。まさに動く的
だ。

それでも、あざみも頑張つているのだ。

「ずっと、不器用な渴を入れられていたらしくからな。今の俺は、

やる気に満ち溢れているんだ

「

コテツは走る。

彼我の距離は約十メートル。

ここから先は限りなく迅速に、だ。

「クラリッサ！！ ハッチを開ける……」

瞬間背後に衝撃。

迷わず、跳んだ。

そして、勢いのまま垂直になつた壁のような装甲を駆け上がる。無論、重力に逆らえずやがて駆け上がる速度は零になり、今にも逆走を開始せんとするが、そんなことは最初から承知のこと。

「届けつ」

伸ばした指が、装甲の縁に引っかかる。

そのまま、腕の力だけで引き上げて、転がり込むよつこ、コテツは仰向けの機体の上に着地した。

そして。

コテツは即座にござれた胸部装甲の下。「クルピット」に潜りこんだ。

「 着いたぞ」

やはり、一人乗りのコクピットに一人は狭い。

コテツはクラリッサを押しのけて、高速でコンソールを操作し始める。

「あなたは……つ、なんで」

クラリッサは、泣きそつた顔をしていた。

綺麗に整つた顔が、台無しなほど。

そんな彼女に、コテツは操作を続けながら、真顔で答える。

「君は若い」

「だからって……」

「君は可愛らしく」

「なつ……！」

「君には未来がある」

「あ、あなたは何を言つて」

そこまで来て、自分は何かおかしいことを言つただろうか、とコテツは首をかしげた。

「戦うよりも。子を産み、育て、次の時代を創る。そういうものの方が尊いんじゃないのか？」

果たして、この世界では違つただろうか、と。
しかし、クラリッサは、今、泣きそうになつていたことすら忘れて、呆けていた。

「君ほどの器量ならきっといい男を捕まえるだろう。そして家庭を作る。素晴らしいことだ。まあ、決め付けるわけにも行かないが、しかし」

「クーピッシュハッチが閉じる。

「君は生きる。死ぬにはまだ早い」

「……」

首に「コテツの首に回された腕に、ぎゅっと力が籠る。

「時代を守るために戦つのも、創ることに負けではないません」

耳元でクラリッサが囁き、コテツは顎を返す。

「わづか」

クラリッサは、じつとコテツを見つめた。

「それに、あなただつて
「……それもいいかも知れんな。当面、嫁でも探す……、か?
「な、なにそれ……、ふろぼー……」
「さて……。機体を立て直すか」

コテツは、操縦桿を握りながら、もう片方の手の指でコンソールを叩く。

「……あ、む、無理です！ そんなの！ もう片足もないって言うのに！」
「問題ない」

少しづつ、機体の上半身が持ち上がっていく。
さすがにこれには相手も気が付いたらしい。
唐突に弾丸が飛来する。

「きやあ！」

「……バランサーをオートからマニコマルへ……！ 片足へのエネ
ルギーバイパス遮断……！……」

掠める、周囲に着弾する、中あたる。

良い当たりを受けた。肩の装甲の隙間に当たつた弾丸が腕をもぎ取つていく。

「そ、それに、片足に、今腕も片方なくなりました！ これでは踏ん張りが利かなくて剣もまともに……」

だが、コテツは表情一つ、変えはしなかつた。

「 十分だ」

同時に、機体が立ち上がる。

瞬間、その機体は空へと舞い上がつた 。

「……今回ばかりは手加減しない。機体に合わせて能力を下げるくらいなら、思い切り機体を振り回してやればいいッ！…」

「な、なんだアイツは…！ どうかおかしい…！」

盗賊の目に映るのは、手負いの獣だった。

四肢のうちの一つを切り落とされた、容易な獲物のはずだった。だが、現実はどうだ。

あれは 、捕食者だ。

「当たらねえ！ 当たらねえ！！ 当たれえ！！」

手に持つ銃。攻勢魔術よりも威力は低いが、連射性に優れる。だが、現実は一体どうしたと言うのか。

連射するだけ無駄ではないか。

『……無駄だな』

その紅の獣は、片足だけで立っている。巨大な剣を、片腕だけで支えている。

獸が、跳んだ。

そして、剣を大きく振り回す。

それだけで、当たらない。

振り子のように、独楽のように、大剣の動きに耐えるどころかえて振り回されるように。

機体は移動を繰り返す。

細かく跳躍を刻み、遠心力に任せ弾を避け。時に弾き。

そして、それは大きく天へと舞い上がる。

『チャンスだ！！』

仲間の誰かが言った。

空中では無防備、ことここに至つては願つてもない。

「ウチの姉妹は、おまえの妹の名前を知るやつだ。」

『撃て撃て撃て撃て！』

『近たれよーー！』

『さ、さすがに」」れだけ撃て』

聲。○。聲。○。聲。○。

手持ちの弾薬を空にする勢いで撃つた。

下に控えている機体との戦いを『』する。だからしなかつた。ただ、ひしひしと感じるのだ。

ニイツヒヤノイ

本当に、現実はどうなつていいか。彈が、当たつていな

風切り音が耳朵を叩く。

大鎧を振り回しあの辺の機体は動く
まるで振り子 右へ 左へ
そして、盗賊は気が付いた。

(敵は、今ツ)

風切る音は死神の足音。それとも、鎌を振る音か。

「俺の真上にいるッ！」

死神の声は、やけに冷たく響いた。

四
遅い

12話 リバーサル（後書き）

遂に反撃開始です。

戦場は、唐突な攻守の変化に浮き足立っていた。

圧倒的機動を見せ付ける、赤い機体に、全員が異様なものを感じていた。

そして、その視線の只中で、コテツは機体を動かす。

「こ、こんな技術を隠し持っていたと言つのですか！　コテツ・モチヅキ！！」

「君以外にも言つたのだが、この動かし方は褒められたものではない」

山の下へと向けて、ショティールフランメが駆ける。
片足だけで、跳ねるように。

「半ば、今回の戦闘で壊すつもりで動いていると言つて良い」

腕も足も一本しかないと言つのに、コテツの胸中にあるのは、生半ではない全能感。

コテツが今、この機体の主導権を握っている。機体の限界を見て動かすのではない。コテツの限界に、機体を合わせている。

だから、飛び交う弾丸の渦中でも、負ける気はしない。

「別に訓練も手を抜いている訳ではない。機体に負担を掛けないもつとも効率的な操縦を模索している」

今まで、訓練で本気を出さなかつた理由は、そこだ。

今の操縦法の肝は、コテツが機体に合わせないことにある。機体に振り回されるのではなく、機体を振り回す。そうすること

で、戦力は強引に底上げされる。

だが、それには問題点も一つある。部品の損耗が著しく激しいのだ。

今とて、纖細な操作によつて完璧な角度で行われるはずの強引な着地が、操縦系統の悪さにより大雑把な判定で行われることとなり、衝撃が損耗に繋がつてゐる。

無論、十全なメンテナンスを受ければまったく問題ないのだが、常に万全であるとは限らないのが戦場。

「だが。今この時においては数分持てば問題ない！！」

大剣を振るう。

弾丸を弾き、そして、勢いのままに機体は大剣を追うかのように飛び上がる。

更に大剣を振るう。遠心力で勢いを横に殺して着地。そしてまた跳ぶ。

『止める！！』

「止まらん！！」

眼前に現れた敵が、両断される。

シユティールフランメはそのまま前へとすり抜けた。更に一体前に出て、銃撃を行う。

コテツは、フットペダルを大きく踏み込む。機体が、再び空へと舞い上がる。

それは、大剣を下に、滑空するようにしつつ銃弾を弾いた。

そして。

コテツは、前方の空を睨み付けた。

宙に浮かぶのは、白と黒の機体。ディステルガイスト。

コテツは、相棒に向かって叫ぶ。

「あざみつ、来い！」

『はい！』

シュテイールフランメは 、ここまででいい。

背後からの弾丸を、振り向きもせず逆手で後ろに回した大剣で受け止める。

右へ、左へと細かくステップを踏みながら前へ。
そして。

背後から今一度迫る大口径の狙撃の弾丸。

「行くぞ、クラリッサ。舌を噛むなよ……！？」
「え？」

背後に斜めに突き刺す大剣。

シュテイールフランメはその大剣に足を掛ける。

弾丸は

。

その大剣に直撃した。

『ご主人様！！』

「おおッ」

大剣の反動も受けて、機体が、空へと舞い上がる。

背後から、いくつもの弾丸が迫る。

避けるための、防ぐための大剣はない。

しかし、否、だからこそ機体はまっすぐに昇っていく。

空に浮かぶモノクロの機体へ。

この世界で、相棒となつたディステルガイストの元へ。

「ディステルガイストッ！」

「はい！－！」

ディステルガイストとシユテイールフランメの影が重なる。
同時に、コテツはコクピットハッチを開いた。
自ら目視する視界の向こうには、既にコクピットハッチを開けた
ディステルガイストがいる。

「おおおおおおおおおおッ！－！」

跳躍。

「きやああああああああああああああ－！－！」

抱え上げたクラリッサの悲鳴と共に、コテツはコクピットから跳
んだ。

一瞬にして風の抵抗を受ける体。

眼下には、緑の景色。

そして、目前には相棒のコクピットが見えた。

「おかえりなさい、ご主人様！」

「ああ」

そこには、あざみが待つっていた。
着地、成功。

コテツは、すぐさまシートに座る。

ディステルガイストのコクピットは複座であるため、ある程度広

い。

クラリッサは右後方へ。

「……救出完了」

操縦桿を握り、コテツは眼下を見つめる。

下では、シャルロッテが敵と戦闘を繰り広げている。

クラリッサが無事に救出されたため、積極的に踏み込んでいた。コテツも、援護せねばなるまい。

「では行くか——！」

やきもきしていた。

今、隣にいる男に、クラリッサはずつと、そんな気持ちを抱いていたのだ。

ソムニウムのSH乗りなら誰でも憧れるエトランジエ。呼び出されたのは、死んだような田の男だった。

しかし、その男、SH乗りの憧れは。

大勢の期待と羨望を胸にやってきた彼は、

弱かった。

だが、そんなことは構わないのだ。最初は誰だつて弱い。クラリッサだつてそうだつた。

問題なのは、強くなろうとしなかつたこと。

まるで何もかも諦めたようなその目。

クラリッサは、嫌な目だと思った。

どこか、クラリッサを見上げる者達の視線に似ている気がした。

同期は、異例の若さで副団長にまで出世したクラリッサを羨ましがる。

『羨ましい』『才能がある奴はいいな』『天才は素晴らしい、と』

（違う、私は努力してきた……）

同期の言葉が嫌いだつた。

クラリッサは、努力しているつもりだつた。眞面目に訓練し、時には半日以上SHに乗り続けたこともあつた。

強くなりたくて、ずっと訓練を続けた。

だから、クラリッサはそういう目が嫌いだつた。

上を見上げるくせに、そこへ向かおうともしない目。

ただ、彼らはそれでも構わないのだ。その目を向けられるほうは厄介だが、向ける側としてはまったく問題ない。回りも何も言わないだろう

しかし、コテツはどうだらうか。わかりきつている。コテツは誰かに見られ続ける。

そして評価を下される。『今回のエトランジェは役立たずだ』と。

ただ、実際にそうなつてもコテツは動じなかつた。上も見ず、下も見ず、ただ前を見ていた。

だが、思う。愉快な訳がない。その状況が好きなわけがない。

だから、やきもきした。苛々したのだ。

「深く考えていたわけではない。悪役にならうだとか思っていたわけでもない。

ただ、クラリッサにとつても、HTランジンは憧れだつたのだ。だから、弱い上に上を見よつとしない「コトツ」を、どうにか動かしてやりたいと思つたのだ。

この、独活の大木を。

だが。

今、この時を見てみればどうだ。

（「よな、生き生きとじつ……）

まさに、状況は圧倒的。

クラリッサを氣遣つてか、機体の動きは酷く緩慢だ。なのに、当たらない。ふらり、ふらりと弾丸を避ける。まるで、幽霊のよつと。

幽鬼のよつと。

『ひつ……、』

「手遅れだ」

そして、ふらつと接近し、するつと斬る。

『うわあああああーー。』

それだけで、周囲に敵影はいなくなつた。

今、今斬つたのが最後から一番田。

そこで、『テツは山の上へと呼びかけた。

「さて、残りは狙撃手、お前だけだが、どうする?」

そして、一步、前に出る。

次の瞬間、ディステルガイストが首を逸らし、そこを弾丸が駆け抜けていく。

「……面白い」

機体が、走り出す。

右へ、左へ、避けるたびに弾丸が駆け抜ける。

（相手も……、上手いですね……！）

当たれば、できるだけダメージが大きくなるように相手は撃つてきている。

対するコテツは。

（楽しそう……）

いつもと同じ仮面が、どこか楽しそうだった。

そして、そんな時、声が響いてくる。

相手の、狙撃主の声だ。

『あー、くそ、アンタ上手いな

「お互い様だ」

『ひよいひよい避けてくるような奴に、言われたかあ、ないね』

軽そうな、男の声だった。まるで、苦笑しているかのようだ。

二人とも、妙技を披露したままだといふのに、妙に軽い。

そして、走る足が唐突に速度を落とす。

「さて、着くぞ」

冷たく響いた声に、やっぱり返ってきたのは軽薄な声だった。

『知つてゐる』

瞬間、緑の機体が山の木々の中から身を現した。

緑のシートがはらりと落ちたところを見るに、シートを被つてうつ伏せに隠れていたのだ。

そして、起きるなり、緑の機体は逆手に持つたナイフをディスクライバーへと振るう。

『行くぜっ、こっちも負けられねーんでね!』

「あざみ、あの機体は一体なんだかわかるか」

「私にもわかりません。ただ、どうも接近戦用カスタマイズを受けた機体のようです。気をつけて」

「わかった」

会話をしながらコテツが刀でナイフを弾くと、すぐに相手は拳を戻して今一度刃を放つ。

また受ける。

放つ、受ける。

高速の連打と、防御が始まつた。

「やるな」

『どーも。アンタ、名前は?』

「名乗らなければ駄目か?」

『どうこうつたよ』

「名乗るとか、騎士のそういう感覚には馴染めん」

『同感。だけど、アンタの名前は知りたい』

「コテツ・モチヅキ。これでいいか?」

『わかつた。覚えておく』

そこでやつと、ナイフの連打が止んだ……、と、思つたら次は蹴りだ。

コテツは横から顔面付近へ迫る足を、腕を立てて受け止める。

「……そちらは名乗らないのか」

『問われて名乗るもおこがましいが……、アルベル・ドー。機体はシャルフ・スマラクト。しがない盗賊だ』

その隙に、コテツは左手の刀を振り下ろす。即座に、アルベルは機体を後ろに引かせた。

「良い腕だ。騎士になろうとは?」

『憧れたこともあつたがね。俺にや馴染めねえや。魔術も使えねえしな』

「それで、山賊に?」

振られる刃を、アルベルはダッキングを用いてかわす。

『そんなわけないだろ。俺とて元冒険者だぜ?』

「なら何故?」

今度はアルベルがナイフを振るい、コテツは一步下がつて間合いの外に出る。

『昔、仲間と一緒にとある依頼を受けてな。ボコボコにのされて打ち捨てられたのさ。そのまま死ぬはずだったが、救助を受けて俺はこうして生きてる……、つづくわけだつ』

更に踏み込み。逆手持ちから順手に変わり、鋭い突き。身を半身にして回避。

「その救助者が山賊だったのか」

『いや？ 僕を助けたのは、何の変哲もない村の奴らだった。村のガキが僕を見つけて、だ。その時僕達は冒険者をやめて、その村で生きることを決めた』

「ふむ」

『問題は、その後その村が焼けたことさ。唐突に盗賊がやってきて、村はどうしようもなくなつた、村民は困るよな。隣村に助けを求めてみたが、結局受け入れの余裕はない。そうなりや、生き残りは後は野となれ山となれ、だ』

ナイフを刀で受け止めつつ、コテツは呟いた。

「ただの村民が山賊に、か

『俺たち救われた冒険者が盗賊をどうにか追い返したのが生き残りの多さにつながつたが、その生き残りの多さが受け入れられないという結果に繋がつた訳だ。残念だ』

クラリッサとしては、聞いてて耳が痛い問題だ。

盗賊の退治も、その後の被害の責任も、国の管轄内である。

誰が怠慢だったのか。地方領主かもしれないし、クラリッサだったのかもしれないし、もつと別の誰かかもしれない。

顔をしかめてみるが、状況はどうあっても変わらない。ただ、クラリッサは黙つて苦虫を噛み締めたような顔をする。

「なるほど、大体わかつた」

『幸いだったのは、俺たち救助された冒険者がいた事だろ。皆SH

持ちだ。だから山賊やつてられる『

（なるほど、それでこんな数を揃えて策を用いるのですね……！）

と、そこでクラリッサはやつと納得した。

やけにSHが多い」とと、盗賊や山賊にしては高度な戦術を用いることに。

大半が元冒険者で構成されているなら、こいつは戦術を取ることもあり得る。

『あー、くそ……、上手いなアンタ。だが、俺も負けらんねえ。行くぜーー！』

振るわれる拳。煌く刃。

「甘い！」

打ち返す刀。

ナイフと刀は、刀が、勝つた。

刀が相手のナイフを捉え、弾く。

ナイフが手を離れ、後方へと飛んでいった。

（やつた……！）

クラリッサがそう思つたのも束の間。

「罷か……！」

ナイフを弾いたと言つのに、拳はそのまま迫つてきているではないか！

『キマつた！－！』

拳は刀の刃を捉えた。

（弾かれる！ そしたら、体勢が崩れて無防備に ）

そんな中、クラリッサはコテツが操縦桿を握る手を緩めたのが、見えた。

弾き飛ばされる刀。

だが、ディステルガイストはそのまま拳を振るつことに成功していた。

『んなつー』

相手が、前のめりになりながら、避ける。そして、一機は、大きく距離を取った。

『……やるねえ。楽しいよ、アンタ』
「気が合つたな

13話 紅色スカイタイプ（後書き）

敵らしい敵がやっと出てきました。

次回、戦闘決着です。

しかし、今回は戦闘パートが長すぎた気がしますね。もっとテンポよく行きたいです。反省点が増えました。

緑の機体が、拳を構えている。

コテツは、この世界に来て今までになく、愉快な気分だった。

「あざみ。出力を七十%落とせ」「ええ！？」

唐突な言葉に、あざみは驚いていたる。当然、クラリッサもだ。だが、コテツだけが笑つていた。

「すまんが、俺の我慢だ」

普段からは考えられないほど獰猛に、だ。

「全力でやりたい」

そして、驚いていたあざみだが、コテツが言つと、唐突に彼女は笑い始めた。

「ふ、ふふふ、ふふ、そうですか。ああ、ふふ、はい。私のパートナーは我慢ですね。ですが。私のパートナーとしては素敵な我慢です」

『出力低下』

機械音声が響き、出力が落ちたことを確認する。

後はクラリッサだ。自称相棒はともかく、彼女はコテツの我慢に付き合わせることはない。

そう思つてコテツは口を開く。

「クラリッサ、君はシャルロッテに回収してもうれるか？ 些か危険だ」

対するクラリッサは、首を横に振った。

「ここまで来たら、最後まで付き合います。コテツ・モチヅキ。今更降りろなんていわせませんが。騙していた分、存分に見せなさい」「騙したつもりはないが」

「わかつているわ。だから、それで手打ちにしてあげるって言つてるんです。負けたら承知しません」

ならば、異存はない。

そして。

(負ける気もない………)

コテツは、腕を振つて出力の状況を確認。そして、左右に構えた腕を、体の前に。

『おいおい、出力を低下だの聞こえてきたんだが、舐めてんのかい？』

『気に食わないなら、上げないと手に負えないくらいやればいい』
『違いない』

睨み合つ一機。

「ふふ……、そしたら、今回さテツドライインは無粋ですかね……」
「なにをする気だ？」

妖しく笑つてあざみは言つた。

「私の得意分野は光ですからね。こうこうとも可能なんですよ?」

瞬間、前に出した『ディステルガイスト』の腕、そのすぐ前に光が
灯る。

そして、光は文字を描き始め。

『行くぞつ!』

相手が拳を振り上げた瞬間、言葉になつた。
描かれた文字は。

右腕に『Let's』。

左腕に『Rock!!!』。

「Let's Rock!!! 意訳するなら……『ノリノリで行こ
うぜ』ってところですかねえ?」

「中々粋な演出だ」

× 32353 — 3125 ×

『おおおおおおおおおおおおおお!』

翠に煌く拳が迫る。

屈んで避ける、そこから足払い。

小さく跳んで避けられた。そこから、相手は空中で蹴りを放つ。
大きく仰け反り、回避、そのまま蹴り上げ。

だが身を捻つてかわされる。

コテツは着地時に蹴り上げた足を地に付け軸足に、回し蹴り。腕で受け止められる。

『甘えーー。』

胸に拳が迫る。

「……甘こつ」

コテツは迫る腕を掴むと同時に、受け止められていた足に更に力を入れ、投げる。

『おわつとと、地面はびいだ?』

「下だ」

『そりや そりだ』

自ら敢えて飛ばされることで、横に一回転しながらも、アルベルは着地。

そして、屈んだ姿勢からの鋭い蹴り。

まるでカポエラのようだ。どんな瞬間でも威力の乗った蹴りを放つてくる。

だが、コテツの顔に焦りはない。

「鋭い。だが、それだけだ」

身を逸らして、避ける。

『手厳しいねえ。そいやつとー。』

アルベルは更に、蹴りだした足を地面について、低く深い踏み込み。

掌底

その掌に向かつて、コテツは拳を突き出した。

拳が、掌を弾く。

シャルフ・スマテケトが半歩引いた。

双方
至近距离

縁の拳が煌いた

瞬間 拳と拳が打たれ合はし 異なる

『あたたかー!』

今一度、もう一方の拳が重なり、離れる。

「見えてる！更に！」

拳がかち合う。そして離れる。

『ま、だ、まあ、だあああ！』

殺る。
離れる。

殴る、殴る、殴る、殴る、殴る、殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る

殴
る
！

拳で拳を打ち落としあい、打ち落とされた拳をまた放つ。

壮絶な打ち合い。
神がかつたラッシュ。

それは最後に

縁の拳か抜けた

『俺は！ 恩を、返すッ！！』

迫り来る拳。

このまま行けば、機体の頭部に直撃する。

身の拳だらう。無傷とは行くまい。

(羨ましいことだ)

そんな中、全てがゆづくつに見えて世界で、コテツはふと、考えた。

（……俺には生きる理由もない）

死にたくは無い、とは思うが生きる理由は今だ見つかっていない。

「その死はたくない』たゞで力した者があるわけではなし
ただ、自殺したいとは思わないだけだ。

つまり惰性だ。惰性で生きている。
生きる理由など、どこにも存在しないのだ。

(だが . . . !)

しかし、ふと、『テツは思い浮かべる。背後にある、己を主と言った相棒。

応援すると言つてくれた従者。

不器用に、渴を入れ続けた、少女。

そう。

（……死ぬ理由も見つからないッ！…）

アルベル・ドニ。

金の長髪に、碧い瞳。軽薄そうな顔。着古した、迷彩服。

これでも、昔は眞面目に騎士を目指していた男だ。

それが無理だと悟つてからは冒険者に転向。そして、山賊と言つて、数奇な運命をたどつた。

そして、騎士を断念せざるを得なかつたアルベルだが、しかし、魔術は使えないがその分別の分野を限界まで鍛え上げ、練り上げた。自分でも、一角のものだと自認している。対する相手は、どこかおかしかつた。

（ありえねー、ありえねーってこりや）

何故なら、最初のナイフを敢えて弾き飛ばされての一撃。

アレは必殺のはずだったのだ。あえて抵抗無くナイフを弾き飛ばされて、そのまま刀に拳を入れる。

そして、体勢が崩れたら追撃だ。後は反撃の隙も与えない。

（だが、アイツはそれを回避した………）

彼もまた、意趣返しのようにあえて自分から刀を手放した。結果、無様に体勢を崩されるどころか反撃を放つてきた。

そして、このラッショ。

相手の技量は凄まじかった。

（すげえよ、そりや。拳での接近戦仕様じゃねえんだろ？　なのに、拳闘仕様のシャルフ・スマラクトについて来る……）

わざわざ、拳で拳を打ち落としてくる。

（ああ、すげえ。そう、十分アンタは頑張ったともさ。だがね、機体の仕様はガチだよ。出力を下げてなけりや、これで俺に負けることもなかつたかもしれんけど）

あくまで丘々堂々とやつてきた相手に敬意を払い、アルベルは拳を振るつ。

そして。

（ありえねー……、ありえねーよなあ、こりゃあよつ

勝った、と思ったのだ。勝利を確信していたのだ。

渾身の拳は突き抜けたはずなのだ。

ラッシュに競り勝ち、その拳は相手に直撃するはずだったのだ。
確かに、最大の拳がヒットしたと、思ったのだ。

“……，好，你你你你你你你你你你……。』

だといふのに。

（何で俺が殴られてるんだっ！！）

避けられた。

一寸も無い距離で。
土壇場で、首を送らされた。

（ありえねえ！　あの戦いの中で避ける余裕なんてどこにあつた！
！　どうやつたらアレを避けられる！？　まるで、まるで分かつて
たみてえに！－！）

そして、もぐりこむような拳が、顔面に直撃した。
大きく、後ろに飛ばされる。

「ぐるぐるおもしろいよ。」

必死でアルベールは機体を操作した。
倒れたら終わる。

果たして、祈りは届いた。

大きく背後に滑りながら、シャルフ・スマラクトは立っている。

確かに、大地に足をつけていた。

だが。

だがしかし、自嘲氣味に、アルベルは笑う。

「あーくそ。乱暴なノックだなあ……。死神さんはよ

既に、眼前にそれはいたのだ。

煌々と赤く目を輝かせる、モノクローム。
眼前に立つ、死神。

「イカれてる……、いや。 最高にイカしてるぜ、アンタ」

まるで、鎌の刃でも首に当たられたかのよつて。
ひやりとした声が、耳に届く。

『 終わりだ』

瞬間。

アルベルの体を衝撃が貫いた。

（これで、良かつたんつ、かねえ……？ どうせこいつは、
てられるわけもねーしさ……）

緑の機体が、立ち上がることは無かった。

14話 Let's Rock!!（後書き）

えー……、ディステルガイストの外見がちまちま変わってる件に関してですが、ディステルガイストはある程度の自己修復機能を持つていて、戦闘毎に得た経験の元、装甲の形を最適化している……、見たいな感じで納得してくださ……、すみません、画力の無さです。ごめんなさい。

ちなみに、腕の字は書き換えたわけではなく、あざみが光魔術で腕の前に字を描いた形となります。終わつた後は、粒子撒いて消えました。

ということで、戦闘終了。次はエピローグ。

「……よくやったわ、『テツ』」

「ああ」

王女の執務室。

今日も王都は長闘である。

「山賊の捕縛、お疲れ様。何か欲しいものはあるかしり?」
「報酬なら既に貰つたが」

貰つたのはそれなりの額。相手が相手だけに、そこそここの金額は
もらえた。

だが、アマルベルガは首を横に振る。

「良かつたのは、騎士団副団長の態度を変えたことだわ」

つまり、クラリッサが態度を変えた、と言つことだ。

それがどうしたのか、と首を傾げる『テツ』に、アマルベルガは説
明する。

「涉々ながら、彼女が貴方を認めざるを得ない、といつゝアンス

の言葉を謁見の間で言つたおかげで、予想以上の効果が出たの。これで、貴方への誹謗中傷も多少は落ち着くわ」

「そうか

盜賊の討伐が終わつて以来、別に態度が変わることも無かつたが、それでもコテツの一端は認めてくれたということか。

「それで、成績に見合つた褒美をあげると誓つてるの」

言われて、コテツは思案するように顎に手を当てた。

「なるほど……」

「何か無いのかしら?」

問われ、コテツは少しの思考の後、答える。

「そうだな

」

去つていくコテツの背を見送つて、ふとアマルベルガは呟いた。

「行ったわね」

「……お呼びですか？」

それと同時に、入れ替わるようにシャルロッテが室内へと入ってくる。

それを見届け、まるで溜息でも吐くみたい、アマルベルガは言った。

「欲がないのも、困り者だわ」

「コテツ、ですか」

「ねえ、シャルロッテ。召喚当初、一番最初に私は彼になんて聞いたと思つ?」

シャルロッテが首をかしげ、アマルベルガは続ける。

「富と権力と名譽。それに女でもいい。貴方はなにがいい? そう聞いたのよ」

「答えは?」

「……どうでもいい、よ」

「……コテツの言にそなうなことです」

同時に、アマルベルガは溜息を吐いた。

「先代ほどお人好しでもなければ、先々代ほど女好きでもなく」

「強欲でもなければ名譽も欲しがらないですか?」

「そういうの、扱い難いわ」

そう言って、もう一度溜息を吐く。

「悪人でないだけ、マシでしょ？」「

「悪人の方が扱いやすいこともあるわ」

悪人なら、金で釣る、物で釣るなどの対策もあるのだが。
しかし。

考え出して、頭が痛いとアマルベルガは思考を止めた。
そこに、シャルロッテから声が掛かる。

「ところで、コテツは一体なにを望んだのですか？ 今回の件は」

問われ、アマルベルガはつい先ほどの会話を思い出した。

「彼が望んだのは

「よお、アンタがコテツ・モチヅキだつて？」「
「ああ。話は聞いているか？」

コテツの部屋。そこには、コテツと客が一人。長い金の髪に、軽薄そうな顔。

アルベール・ドニは、敵意を向けるでもなく、コテツの前に立っていた。

「聞いてる」

「そうか」

コテツがそういうと、極めて軽薄そうに。アルベールは極めて重要な言葉を口にした。

「国の大になれってんだろ?」

「ああ」

そう。今回の件でコテツが要求したのは、アルベールだった。エトランジエは、権力や階級から乖離したところに存在する。究極な所、極限に一人。

(面倒)ことを押し付けたいだけ……とも言つが

だから、仲間が欲しい。

コテツは、最前線で動き回ることで成果を上げるタイプだ。それをするため、戦場でフリーになるために、後方を任せ仲間が必要だ、と今回の件でも再確認することとなつた。

何もかも、一人では不自由がすぎるのだ。

無論、問題が無いわけではない。エトランジエは権力、階級から乖離している存在であるため、人数が増えると、まったく新しい勢力となつてしまう。

そうすると、国内の勢力に危険視されかねない。

それ故に、勢力と見られない程度の人数に仲間はとどめておかなければ

ければいけない。

となれば、優先されるのは質。そして、コテツは騎士と今一つ合はない。

そう考えるとアルベルールだけが、完全に条件を満たしていた。故の勧誘。それに対し、アルベルールは軽薄なままだつた。

「それで、返事は」

問いかに、にへらとアルベルールは笑う。

「いいよ。やつてやるよ」

「そうか」

「なんせ……、村の皆が人質だからな」

「そうだ」

アルベルールを仲間にする交換条件。

それは、山賊団の仲間の命を保障することだ。

後は、少しの金。それだけだ。

だが、十分のようだつた。

アルベルールから大した不満もあがりはしない。だがしかし。

しかし一つだけ。その軽薄さを潛めて、彼は、問うた。

「一つ、聞かせてくれ」

じつと、アルベルールはコテツの目を見ている。コテツも、彼を見返した。

「なあ……。俺を倒したのは国の大、だつたのか?」

国に対し、アルベール、いや山賊団全てが複雑な感情を抱いていることは、人の機微に疎いコテツでも想像できた。

適切な援助をしてくれなかつた国、そしてその国に仇なした自分たち。複雑だつ。

だから、国の大に従うのは、抵抗があるのかもしない。

「そうかもしれん」

だが、否定する要素はなかつた。

今のコテツは、女王の言つままに動くだけだ。

「アンタにや、生きる理由も、やりたいこともねーのかい」「ない」

あれば、今頃ここにはいるまい。

コテツは言い切つた。

そうして、返ってきたのは、

「ああそーかい。俺は、王女の犬の犬、か

失望したような、そんな声。

それを聞いて、コテツは椅子から立ち上がつた。

話が纏まつたことを報告しておかなければなるまい。

だが、ただ一つ、部屋を出る前に、コテツは一つだけ呟いた。

「ない、が。 今はそれを探している

そして、彼は歩き出す。

「この国の行く末も、現状も知ったことではないが、……今の所の宿を壊されるのは困る」

果たして呟いた言葉は、アルベールに届いたのかどうか。ただ、別の言葉が返ってくるだけ。

「この話は、王女がやれって言つたのか？」

コテツは、否定の言葉を返す。

「いや、俺の要求だ」「……アンタが？」

少しの間が空いて、問い合わせられた。

コテツは、簡潔に返す。

「ああ」

そして、最後に。
もう一つ、彼は問うた。

「なあ、俺の仲間の命は、保障されんのかい？」

「こちうのミスでお前の仲間が死んだなら、俺が王女を握り潰す」「……つく」

返事はない。

だが、数歩歩いた所で、ばん、と。

コテツは唐突に背中を叩かれた。

怪訝そうに振り向くと、そこにはアルベールが笑っている。にっこりと、人好きのする笑みで。

「は、っはははは……。王城で王女を握り潰す、だつて？ 最高にイカレた答えた。やつぱ気に入ったよ、アンタ」

「そうか」

「手伝つよ、アンタのその探し物」

馴れ馴れしく、アルベルールはコテツと肩を組んだ。コテツは、表情一つ変えずに返す。

「助かる」

「ところで、俺の仲間は……」

「誰も殺してはいない。少なくとも構成員三十七人は全て捕縛された。あまりに潔く聞き分けがいいものだから連れて帰るのに苦労したぞ」

「おお、サンキュ。さすがダンナだぜ」

「……なんだそのダンナという呼称は」

「雇い主だろ？ だからダンナ」

「……そうか」

「俺のことは、相棒つて呼んでもいいんだぜー？」

「押しかけ相棒は間に合つている。アルベルール

「アルつて呼んでくれ、長いだろ？」

「そうだな」

「ダンナ」

「なんだ」

「サンキュー」

「……なんのことだ」

「俺たちの、命の恩人だろ」

「顎でこき使いたいだけだ」

「へいへーい、了解ですよつとダンナ」

一人の男が、廊下を仲良さげに、歩いていく。

そう、今日も王都は長閑であり。

そして、今日も荒野には剣戟が響いてくる。

『遅いですよ！　「テツ・モチヅキ！」』

「……いつも通りだ」

『本気を出しなさい！』

「本気を出さずに勝つための訓練だらう。これは」

赤の機体と青の機体が交わり、そして離れる。

『う、うるさいですね！ 黙りなさい……』

「……」

『何とか言つたらどうですか！』

『どつちなんだ』

『好きになさい……』

『そつか。ではそつ言えばなんだが……』

『……なんですか』

細かく後ろへと跳んで距離を稼ぎながら、コテツは呑く。

「俺を擁護する発言をしてくれたらしいな」

すると、『クピットの向こうか、やけにわかりやすい動搖が返つてきた。

『だ、誰から聞きましたかそれを……』

『王女から』

『……な、なんですか。なんのよ……、笑いに来たんですか……』

？』

『……いや、ありがとう』

『……えつと。は、反応に困ることを言わないでくれますか！』

『……了解』

『ば、馬鹿にして……』

『しない』

『します……』

『していない』

眩きつつ、迫る大剣をコテツは受け流す。

『ああ！ 馬鹿なことを言ひてないで訓練を続けます！！ あなたは、この私がどこに出来ても恥ずかしくないようにならへてあげますから！ ホテツ…』

ひたすらにクラリツサが攻め、ホテツが受け流し続け。

「了解」

それはまるで、今の会話の縮図のよつだつた。
だが、どこか楽しげに 。

今日も王都は長閑である。

15話 剣戟長闇（後書き）

やっと二章終わりました。

そして、二章の間になんだかユニークPV総計が二万越えしたり、千人を越える方にお気に入り登録していただきまして、身が引き締まる思いです。

さて、アルベルールが加入です。ロボット物には必須といえる主人公の相棒的ポジションに納まりそつた感じです。

とりあえず、仲間も増え、安定期に入ったので次章はゆるく短めの奴で行きたいと思います。

15・5話 剥れパートナー（前書き）

八割方設定書きです。本編的には無駄な設定も多いです。必要な部分は本編でも再度書きまして、必ずしも見る必要はあります。

ある日の事。

コテツは、部屋でひたすら黙つて本を読んでいた。今日の訓練は休みである。そうすると、当然一日暇が出来上がる。しかしながら、この世界について無知であるコテツは、少しごとに少しでも知識を溜め込まなければならぬ。た瞬に少しだが。

「「主様ああああ！」」

「……何の用だ」

背後から飛び掛るよつに、あざみが抱きついてくる。

コテツは、半眼で背後を見つめた。

あつけらかん、とあざみは言つ。

「あ、いえ、別に用はありませんけど」

「……」

「ぐ、冷たい視線が痛いです……、いやでも私山賊の件で凄い地味地味だつたような気がするんですよつーだ、大丈夫ですよね？

クラリツサさんとなんだかんだ言いながらくつづくとかないですよ？ ね？ ね？」

「なにを言つてるんだ君は……」

「とにかく、そういうことなんです。私は細やかなところで好感度を稼ぐんです」

「とりあえず、言つてること意味がわからないが。一応の所、問題な

「いと返しておいた」

「はい。ところで、なに呼んでるんですか？」

唐突に、あざみはコテツの肩から顔を出して、コテツの机の中の本を覗き込んだ。

「コテツは事実だけを簡潔に伝える。

「辞典だ」

「……辞典？」

首を傾げるあざみ。

確かに、辞典は普段の読み物としては違和感があるだろ？
コテツは、その辞典に目を落としながら、答えた。

「魔術とやらで、話せる読める書けると来たが、意味の分からない単語もある」

すると、ぽんとあざみは手を叩く。

「あ、なるほど。確かにそうですね。」主人様は今は世間知らずですから

「ギャップが今後に悪影響を齎すかもしれん」

「先の件のように、ですか？」

「ああ。俺の軍の常識と、騎士の常識が食い違つていた結果だろ？
「そうですか……、はい、勤勉なのはいいことだと思いますよ。あ、
そうだ、でしたらお話ししましょつか？」

「なにをだ？」

「色々です。これでも私、長生きですから。博識なつもりですよ、
多少は」

「なるほど

「

あざみは、コトツの背後から抱きついたまま、耳元で囁き始める。

SH

「SH。ショタールヘルツォーク、ですね」

「この世界で作られた、魔術と科学をあわせた人型機動兵器、とう所までは分かる」

「まあ、現在の一般的な認識だと思いますよ」

「……そういうば、君はそのプロトタイプだつたか」

「はい、だからそこそこ詳しいつもりですよ。もともとSHはこの世界の魔術で研究されていた魔導人形、所謂ゴーレムですね。それを初代エトランジエが科学を取り入れて製造したのが、アルトです」「そして、それを解析して作り出したのが

「そう、ノイと呼ばれる機体群です。ただし、初代エトランジエの技術を解析しきるコトはできず、アルトとノイの間には性能差が横たわっています。まあ、腕のいい魔術師が造れば匹敵する可能性もあるのですが」

「そんなものか」

「ええ。足りない科学は魔術でカバーです。まあ、全体的に未熟な

科学を魔術で補う空気はありますね。アルトは、科学を魔術で補助。しかし、後年の物に至るにつれ、魔術と科学の融合を目指したもののが目立ちます」

「初代には、アルトの技術を伝えるつもりは無かつたのか?」

「コテツが問うと、あざみは困ったように頬を搔いた。

「本当はですね。初代は、こうして民間にまで普及して、一般的に戦闘を行つなんて考えてなかつたのですよ」

「ふむ?」

「本当は、龍を殺すための、SH、なのです」

聞きなれない単語に、コテツは首を傾げることとなる。

「龍?」

「ご主人様の居た世界と違つて、ここには魔術がありますから。特殊な生物は多岐に渡ります。そして、その中でも人にとって危険なもの。その際たる例が龍なんですよ。今となつてはほとんど数はいませんけど、大きくて、簡単に大魔術をぶつ放しますから。そんな龍が、運悪く街や村の上を通過があるのです」

「つまり、災害に近い、と」

「そう。初代の時は、王都にそれが迫つっていたそうです」

「それに対抗するための、アルトか」

「はい、つまりそういうことです」

エーポス

「私のコトですね。アルトは高性能な分、内部処理や制御が肝心なのですが、ハードはともかくソフトは門外漢だつた初代だけではどうも対応し切れませんで。魔術師の協力を得て先天的に決まつた機体と接続できるヒトのようなものを造りだしたわけです」

「見た目上は、人にしか見えないが」

「頑丈、老いない。あと、ついでにシリーズによつては違うかもしれませんが、高めの身体能力と、十二分な魔力容量を備えています」

「他はなにか？」

「そうですね、女性型しかいないことですかね」

「君しか知らないから分からないが、そうなのか？」

「なんでかは私も良く知らないです。製作者が男嫌いだつたとか、女性の方が細やかな気配りができるだとか、いろいろ諸説ありますけど、詳しいことは……」

「まあ、別に問題にはならないだろ？」「

「そうですね、後の役目は、悪用を防ぐ、でしようかねえ。正式に操縦士になつてしまえばある程度の権限で無理できますけど」

「そうでなければ、エーポスのほうが立場は上、か」

初代エトランジエ

「んー、これは私も詳しく過去を聞きだしたりとかしたわけじゃあ

りませんからねえ。大したことは言えませんけど」

「とりあえず、聞かせてもらいたいのは、彼がどうしてここに来て、そしてどうなったのか、だが」

「来たのは、事故だそうですよ。ご主人様と同じ、時空間圧縮系の爆発でも受けたんじゃないですかね。そして、残念ですけど彼がどうなったのかは、誰も知りません。一機の機体と共に、ふらりとどこかへ消えてしまいました」

「……どうか、謎が多いな。代々続くエトランジエのことも、分かつていたようだしな」

「そうなんですか?」

「君の機体の腕の文字や、エトランジエと書つ名称。彼はドイツ人らしいが、所々にわざわざ英語を使つてゐる。これは後続のエトランジエへのメッセージのようなものだらう。後続までがドイツ人とは限らないからな」

「うーん……、不思議な人でしたけどねえ。コーモアのある、ヒゲの生えたナイスマイルですよ。気になりますか?」

「興味はあるな。調べてみたい所だ」

エトランジエ

「説明されてると思いますけど、ソムニウム王国で召喚される異世界のことです。主に、SHに何らかの形で関わる人間が召喚されるとされています」

「何らかの形で、とはパイロットであるとは限らないのか?」

「はい。腕のいい操縦士ではなく、操縦士の素質があるもの、つまり

り先代みたいな例もありますし、もしくはノイに画期的な改造案を生み出した人物もいます」

「技術者もありうる、か」

「はい」

「ところで、初代が来たのは偶然、だそうだが、その後何故、このシステムに繋がったんだ?」

「実は、初代が行方不明になつた後ですけど、初代が召喚された地点は空間が不安定なことになつてていることがわかつたんです。それを調査した結果、そこに巨大な魔力をぶつけると、まあ、途中に複雑な術式が入りますが、異世界人を召喚できることがわかつたのです。そして、初代のような利用価値の高い人間が他世界にいるんなら、答えはひとつでしょう。ちなみに、一応初代に似た波長の人間を探すことでSHに関わる人間を探してみたいです」

「反対は無かつたのか?」

「これがですね、最初は非人道的と言つていた方もいたのですが、どうやらこちら側から開けるのは片側の門だけらしく、来るのは、向こう側でも門を開けた人間だけだったのです」

「つまり、死に掛けた人間、か?」

「はい。もしくはご主人様のような空間が不安定な状況だった、みたいな。ともかく、こちらと、他世界の両方で門を開けて初めて世界が接続されます。すると、健常な人間は召喚されないと言つていでですから。その上、世界を渡つたときに何があるのか、怪我まで治りますから、逆に人命救助、という大義名分までできちゃつたんです」

「そして、死んだと思つたら生きてた、だから大した不満も出でこないか」

「あつさり国の重鎮に納れますしね」

「ちなみに、怪我が治る理由は確定してませんが、世界を渡る途中の空間で、多量の魔力素を浴びるために体が修復される、と推測されています」

ソムニウム王国

「この大陸の端っここの国です。王都の背後は海ですね」

「どんなものだ？」

「番付的には中間ですかねえ。昔はそこそこ強かつたんですけど。

先々代が国を傾けまして」

「先代は？」

「名君ですよ。傾いた国を一人で立て直しました。その無理が祟つて早死にしたといつてもいいんですけど」

「そして、今、か」

「何とか立て直した国を王女がどうにか保つてる状態です。実は、戴冠式もまだなんですけどね。だからって他に任せてはまた傾きますから、一人で踏ん張つてます」

「他に王族はいなかつたのか？」

「先代の王が無茶しすぎて子を残す暇もなかつたんですよ」

「だから一人だけ、か」

「そういうことです」

「そう言えば、先ほど話に上がったが、危険な生物は多いのか？」

「そうですねえ。ご主人様のいた世界と比べれば、ずっと。この世界には魔術がありますから」

「先ほども聞いたが、何故魔術と生物が関係する？」

「たとえばですけど、ご主人様の世界では龍なんて空想でしたよね。じゃあ、何で空想なんでしょう？」

「存在しないからだ」

「存在できないんですよ。そもそも。オーソドックスな龍といえば羽の生えたトカゲですかね。ただ、その羽で浮力が得られるわけがありません。だから龍は存在しないんです。代わりに、存在できる形として、恐竜が存在します」

「魔術があるならば、飛べる、か」

「そういうことです。生き物はその環境に合わせて進化するものですから、当然のように魔術があるなら、そういう方向に進化するわけです」

「つまり、俺の常識を外れ、魔術をベースにした生き物が現れると見てもいいんだな？」

「はい。それらを総称して、魔物と呼んでいます。魔術に適応した動物ですから。もちろん、魔物になつていない、未適応の動物もありますよ？まあ、とにかく、魔術ぶつ放す敵から、ありえないほどでかい敵もいますから、気をつけてくださいね」

「ふむ……、そういうえば、盗賊を倒しに行つたときも見かけなかつたが……」

「まあ、あの辺は整備されてますから、大きい獸はいませんし小さいのはわざわざ丘に近寄りませんよ」

「それもそうか」

銃について

「ところで、今の所人間サイズの銃を見たことが無いのだが」

「あー、実はですね、SHの銃の解析は済んだんですよ。構造もわかつたんです」

「ふむ、なら何故?」

「ところが、小型化すると精度が酷くなつて、まともに動かないんです。だから、今の主流は単発式のです。SHみたいに連射できるならいいんですけど、単発だとどうも使いにくいですから。魔術のほうが便利ですし」

「なるほど」

「ああ、でも超凄腕の魔術師が部品製作すればいいのが作れるそうですよ。設計図引かないといけませんけど」

「どうりでよ軍備には向かんな」

「はい。一部の冒険者が懷にじのばせる位です」

「そうか」

「まあ、今日はこんな所にしましょうか。魔術とかについては、また後日」

「やつだな」

と、一回話が止まった所で、今度はあざみが質問した。

「どうりでなんですかご、先の件の……、アルベル、でしたつけ？ 彼を部下にしたつて本当ですか？」

「アルか。ああ、そうだが」

「あ、そうですか……、つて聞いてませんよー。といつが愛称呼びですか！ 私も呼んでくださいー！」

「……君は愛称にするほど名前が長くないだろ？」

「あざみんつて呼んでください。」
「主人様」

「断る」

「えー……、じゃあ、とりあえず詳しく説明してください」
「わかった」

頷くと、コテツは辞典を閉じ、口を開いた。

「アルは、先の件の褒美として、王女に身柄を要求した」

「えつと、私に不満とか、あります？ なんか機体が鈍いとか」

「そういうのじゃない。俺は前線で一人戦いたい。が、こいつして他と組まされることを考えると……」

「後方のお守りというか、部隊との間に摩擦が起きないよつなクッショング欲しい、と？」

「理解が早くて助かる。他にも多少思うことはあるが。留守の間を任せたい、とかな」

「はは、自由に動きたいからおいておくつてことですか？」
「だいたいそんなところだ」

「はい、大体わかりました」

アルベール・ドニ

「今は俺の部下ということになつていてる。最初は騎士を目指していたそうだが、魔術が使えない、考え方が合わない、と冒険者に転向。その後、依頼を失敗し、近くの村民に救助され、その村の村民となるが、村が焼けて山賊に、と言つたところか」

「数奇な運命ですねえ」

「乗機はシャルフ・スマラクト。接近戦から狙撃までこなす万能なパイロットだ」

「確かにそこそこでしたかね。器用貧乏かもしませんけど。ああ、でもどちらかと言えば格闘戦のほうが得意ですかね。ナイフを使えば軍格闘臭いですけど、徒手になつたら力ボエラみたいになりましたし」

「近づかれる前に倒すのが一番だ、とは言つていたがな。ちなみに年齢は二十八、だそうだ」

「年下ですね、そつは見えませんけど」

「背も高いしな」

「（）主人様も低くは無いはずですが、相手は外人顔ですもんねえ」

「……」

「あ、もしかして若く見えるの氣にしてるんですか？」

「……」

「気にしていない」

「即答ですか」

「……気にしていない」

「なんか可愛いですね」

シャルフ・スマラクト

「アルの乗機だな。濃緑色の機体で、機体自体は近接力スタマイズを受けているらしい」

「確かに、マニアピコーレーターの強度は驚きの領域でしたね」

「後は運動性と出力を重視したようだ」

「結構なハイスペックに纏まっていますよねー。腕のいい魔術師でもいたんでしょうか」

「基本的には狙撃銃とナイフがメイン武装。後は魔術具を少々と言つていたが……、魔術具とはなんだ?」

「ああ、魔術の籠つた道具のコトですよ。メインじゃないってことは多分、使い捨てですね。イメージは手榴弾でよろしいかと」「なるほど。適正が無くても使える、ということか」「高いのを切り札として持つてる人も結構いますね」

「と、まあ、こんな所か、話すべきは。今の所は、だが」

そう言って、コテツは言葉を切った。
しばらく、無言が続く。

そして、不意にあざみは呟いた。

「……私が、ご主人様の相棒ですからね」

「どういふことだ」

「ご主人様の相棒は、私ですから」

と、そこで思い当たるのはアルベルのことだ。

「……君とアルでは相棒の意味合いが違うと思うが

「……ご主人様の相棒は、私なんです」

今度は、拗ねたような声。

コテツが、なんとなく振り向くと、頬を膨らませて、あざみはそこに居た。

「あー……、嫉妬、してるのか？」

「違います、これは決定事項なんです。ご主人様の相棒は私、嫁は私、私のお嬢さんはあなた。あーゆーおーけい？」

言われて、内心コテツは困り顔。

「嫌だつたら、操縦下手になつてください」

「それはできない相談だな」

「なら、決定事項です」

そう言つて、再びあざみは頬を膨らませた。視線を前へと戻したコテツは、やはり内心困っていた。文字通り死ぬほど戦に明け暮れていた彼にはこいつといった距離の関係は馴染みが無い。

元の世界において、コテツは周囲から一歩引かれる存在だった。エースとはそういうものだつたからだ。

よつて、エースや英雄と扱われた彼だが、他人からのアプローチは遠巻きなものだつた。同じエースから追いかけられたこともあるが、彼女は常軌を逸していたため、コテツ内のカウントには入つていない。

後は、ガチホモ集団と名高い部隊に配属され、渋みがかった男たちに迫られただけだ。その件に関しては思い出したくない記憶の一つとして、心に刻まれている。

つまり、仕事以外での深い付き合いに碌なものがなかつたのだ。

(参るな……。反応に困る)

無表情のまま微動だにしないコテツ。

(何か、すべきか)

コテツは、逡巡に逡巡を重ね、行動を考える。そして結局。

「ふえ？」

あざみの頭を、「コテツは撫でる。
そして、驚いた顔のあざみに向かって、ただ一言。

「……頼りにしている」

「……あ、はいっ」

あざみは、目を瞑つて、コテツの手を受け入れた。
振り向くと、さつきとは一変、あざみが目を瞑つて、ニコニコと
笑っている。

「ねえ、『ご主人様、中庭行つて一緒にお昼寝しましょうよ』

「いきなり、なんだ」

「いいでしょ？　ね」

「何故」

「大切なパートナーですから、大事にしてください」

「しつと自分で言うのか、君は」

「えー、じゃあ今度一緒に出かけましょ？　街とか、案内します

よ？」

「ふむ、それは頼みたい」

「じゃあ、決まりですね。絶対ですよ」

「ああ。覚えておこう」

「コテツは苦笑しながら溜息を吐き、長閑な時間は流れていく。

15・5話 剥れパートナー（後書き）

これですつきり、02終了です。

次回は手ぬるく短く、セリフをこり、日常に近めの部分を掘り下げたいと思います。

あと、魔物とか、ギルドがどうとか、出てないファンタジー要素も。

とりあえず、構成を練る必要もあるので、更新まで少し空くかも知れません。一週間前後かと。

できるだけ早くどうにかするので、じめじお待ちを。

そう言えども、なんだか週間ランキングで8位に食い込んでたり、最近ビビリまくりです。こりや、もっと頑張らないといけませんね。

『いか、意識はないやつといつて。』

「あれみ」

『前を呼ばれた。あれみは、『なんやつとした頭で考える。』の姉は誰だ、『うだ、聞き覚えがある。』れば、姉の声。』

「なんでじゅうへ。」

あやみは前を呼ばれて、まるで、決められたかのよう口元が動いた。

『夜の城のテラスだ。』
『この会話。記憶にある。』
ならば、『は、夢だ。』

『まだ、主は見つかっていないのね？』

果たしていつだったか、そこまでは覚えていないが、確かに記憶にある。

確かに、自分はいつも返したはずだ。

『別に姫りませどよ、マスターなんて』』

すると、透き通った薄紫の髪が綺麗な姉は、困ったような顔をし

て、いつ言った。

「悪くないものよ……。いいえ、とても素敵なことだわ、主がいるつて」

「わかりませんね。お姉さまの言葉でも、どうも実感できません。マスターなんて居ても自由が制限されるだけじゃありませんか」

そういうと、姉は困ったように笑う。

（今なら、わかりますよ、お姉さま）

エーポスは、貴重な存在。言わばアルトそのものだ。そして、アルトは他の機体とは一線を画す。

軍事的に大きな意義をもたらす存在でもある。

と、なれば、生活はあるでお姫様扱いだ。さすがに王女に狼藉を働けば牢屋に入れられることになるが、王女に頭を下げずとも、何も言われず、傍若無人な振る舞いをしても許される。

見た目どおりの小娘ではなく、長い時を生きた彼女らは、王であつても無視できない。

無論、姉妹たちの中に進んで狼藉するような者も居ないが、それだけの立場がある。

（本来の全力を出し切るという、あるべき姿に戻れる喜び、対等に接してくれること、戦闘になれば、それ以上に使ってくれること）

だが、エーポスはアルトを動かすために存在しているのだ。

今だからこそわかる。エーポスは、主と共にあることこれがもつとも自然な姿だと。

故に、あざみは喜びを感じていられる。

「貴方にも、いつか見つかるわ。パートナーが」「いりませんよ、そんなの」

「見つければわかるわ。私も、今はすゞく楽しいから　　」

姉は笑つた。果たして、何故笑つてゐるのか、あざみにはわからなかつた。

姉のパートナーは六十年もすれば死んでしまつゝだらう。なのに、笑つてゐる。

（私も……、見つけましたよ、お姉さま。今が、すゞく楽しいです）

だが、今ならば姉の気持ちがわかる。コテツという主に出会えたのは、この生の中で最高の出来事だ。

隔絶した操縦士としての能力と、不器用な人となり。それでも、不器用なりにあざみと上手く付き合つて、こうという姿勢が、嬉しい。

この世では、そう。たつた一人、その操縦士だけが、エーポスと対等でいられるのだ。

「見つけたら、離さないでね？」

その時のおざみは仏頂面をしていたが、今は内心で微笑んだ。

（はい、もちろんです　　）

そうして、ふつと、目が覚めた。

「……ん」

朝日が眩しい、目覚め。

城の一室で、あざみは目が覚めた。

ここは、あざみに「えられた部屋だ。コトツと同じ部屋に寝泊りしようと思つたのだが、それは別の主に一重にお断りされたので、仕方ない。

まうひとした頭のまま、ビーツに身を起すと、あざみは眠い目を擦る。

「夢、見てた気が……」

起きながらも、あざみはベッドから降つた。所詮、夢は夢、忘れて当然のことだ。

何故か胸が温かいのは気になつたが。

しかし、とにもかくにもだからといつてビーツといつても無い、あざみはクローゼットから服を取り出した。

それらをベッドに乗せて、あざみはまずはパジャマのボタンを外す。

するり、と服が体を離れ、それもベッドに置かれる。ズボンのほうも同じようにだ。

やして、屈みむよつとして下着を脱いだ所で、あざみは姿見のほうを見た。

「特に、異常無し、ですね。健康的です」

そこには、健康的な肢体が映っているだけだ。妙な腫れや痣も無ければ、変に青くも無い。

「性的魅力は、そこそこだと思つんですけど……」

あるべき膨らみはちゃんとある。

どちらかと言えば肉付きのいい大人の女性といつより、スレンダーナな年頃の少女の風体だが。

「『主人様の好みはどっちなんでしょう』

これで、守備範囲は十一歳以下の少女だ、といわれた暁には手に負えない、と思いつつもあざみはブラウスに短いスカートと、いつも格好へと着替えた。

そして、定期的に使用人が変えに来る桶に溜まつた水を使って、歯を磨き、顔を洗う。

使つている歯ブラシと歯磨き粉は、工学以外にはあまり頼着しなかつた初代エトランジェがせめてこれだけはと定着させたものだ。他にも、エトランジェが定着させたものは、いくつかある。

「さて、身だしなみも大丈夫ですね」

今一度鏡を見て、胸元のリボンの位置を整え、にっこりとあざみは笑つた。

（ああ、でも少し位お化粧をした方がいいでしょうか。けど、『主人様そういうの好きじゃなさそうに見えますし』

化粧の香りに顔をしかめそつなタイプだ、とあざみは思考し、頭を振った。

（あーもつ、男の人のことなんて気にしたことも無かつたからわからせんつ……！）

考えを振り払うように、あざみは動き出す。

まずは部屋の外へ、そして当然のようにコテツの部屋へと向かう。コテツの部屋とあざみの部屋はそう、遠くない、といつよりからは近くにあざみが引っ越した。

私情半分だが、エーポスとその主はできるだけ傍にいるべきだという意見は、誰が聞いてももつともなものである。

（ともかく、ご主人様を起こしてこきましょ。）
（もひととま）
（日常から、ですよね）

つつきとした気分で、コテツの部屋の前に立ち、そして、ノックもせずに扉を開けた。

こつもの部屋、無表情で仮面で、私生活でこれと云て特筆すべきことも無い主の、何の変哲も無い部屋だった。

「主人様ー、朝ですよー。」

だが。

その部屋から返事が返つてこないのか。

「……あれ？」

誰もいない。

きょろきょろと辺りを見回す。いない。

ベッドの布団をめくる、いない。

ベッドの上に寝転がってみる、いない。

枕に顔をうづめ、まだ残るぬくもりを堪能してみる、いない。

「 いません」

主のベッドの中、仰向けに布団の端を両手で握り、まるでまさに寝ようとしているような体制で、あざみは咳いた。
ぬくもりが残つてこることには、布団を出でてもまだ時間が経つていないとのことだ。

不可解である。この時間、コテツは起きてはいても外には出ないし、今日は訓練が早いといつ話も聞いていない。
だが、いない。

「別に隠れてるとかないですよね、ご主人様ー？」

その不可解さを解するために、あざみは不本意ながら立ち上がつた。

徐に部屋を出で、廊下を歩き始める。
歩きながら、あざみは首をかしげた。

(……うーん、どー)といったんでしょう、あの人。あー、でも気が向いたからってふらつといなくならないとも限らない気がしますし……、つと、危ない、通り過ぎる所でした)

そうして、思考に沈んでいると、思わず目的地を通り過ぎる所であつた。

すぐさまブレーキをかけて、あざみは右手に見える扉の前に立つ。

そして、次に開いたのは。

「……あざみ？ 一体何かしら」「¹主人様がいないんですけどっ…」

王女の執務室の扉である。

ドアを乱雑に開けるなり、あざみは言った。
対するマルベルガは、ペンを持った体勢のまま、半眼であざみ
を見つめている。

そして、数秒の時間を置いて、やつと謎の衝撃から立ち直ったア
マルベルガは口を開いた。

「……コテツなら、ギルドへ登録に行つたわ。軍人なら、当然でし
ょう？」

呆れたような声に、あざみは驚愕のあまり表情を凍らせる。
たとえ突如眼前に大規模魔術が出現しても、¹いはならない。

「え？ ちょ、ちょ、ちょ、すとつぶ。待つてください」
「何かしら？」
「行つた？ 『主人様が？ 外に？ つまり、もう城にいない？』」
「そうよ」
「き、聞いてませんよ… そんなの…」

ぱん、と机を叩くが、王女は涼しい顔。

「言つてないんでしょ？ ね。コテツがわざわざ一緒に来いなんて言
うと思う？」「¹ないですね」「¹そこ、即答するのね」「¹ないです」

「まあ、とにかくそうこうついで。リーゼロッテを付けておいたから、心配はないわ」

そして、王女の言葉の中でリーゼロッテ、と聞き、思わずあざみは耳を振るわせた。

それは安心できる要素ではない。

「え、いや、大有りですよそれ」

「なにかしら」

「ありますって！ あの巨乳怖いです！ 女狐です！ ご主人様の貞操のため私追いかけますから、後よろしくお願ひします！」

「うしてはいられない、と脱兎の如く走り出さうとするあざみだつたが、アマルベルガに止められる。

「貴方はディステルガイスト使用の手続きがあるでしょう？」

そう、そうなのだ。

実は今日のあざみの予定は、書類を書いては提出することだ。ディステルガイストを自由に使えるようになりますが、それなりの手順が必要なのだ。

思わず、あざみは足を止めた。

「ぐ、ぐぐ」

そして、そんなあざみの弱みに付け込むように、アマルベルガは言つ。

「自分の乗機が使えるかどうかの作業をほっぽり出すパートナーを見たらコテツは……、まあ、何も言わないんでしょうけど、内心役

に立たないクズ女だと思つに違ひないわ

「ぐぐぐぐぐぐ……」

今にも走らんとしていた足は地面に縫い付けられたようでもあつた。

葛藤するあざみ。

そして。

「……ご主人様、あざみは職務を全うします……」

悲壮感たっぷりに、彼女は言ったのだった。

16話 夢現（後書き）

想定外に筆が進んだので、フライングで一話更新。
今から書き溜め作業に入ります。

まあ、今回のコンセプトは『緩め』なので、もしかしたら書き溜め無しで更新するかもしれません。

17話 チュインハンド

「あれ？ ダンナー、その可愛い子誰？ ダンナの嫁？」
「滅多なことを言つたな、アル。彼女の沾券に関わるだらつ」

コテツは、城門の前でアルベールと出合つ。
アルベールが興味を示したのは、コテツの隣を歩くリーゼロッテ
だつた。

「え、えと。嫁、ですか……？」

リーゼロッテが、赤くなつて困惑つ。
そんな彼女を見て、アルベールはにやにやと笑つていた。

「可愛いね。ダンナ、嫁のために生きるつてのも、上等なんぢや
ない？」

「相手がいなが」

「あ、俺に背中から撃たれてえの？ ダンナ」
「何をいきなり」

理不尽だ、とばかりにコテツはアルベールを見つめた。
だがしかし、ひょいとアルベールはその視線を受け流す。

「まーいーや。で、ダンナ、これからデートかい？」
「いや、今から冒険者の組合……、ギルドと言つたか。その本部に
行く所だ」
「本部？」

聞き返してくるアルベルールだが、すぐに納得したのか、コテツの返事を待つ前に再び口を開いた。

「あー、なるほど。城の兵士は皆カード持ちだつける
「そういうことらしいな」

そう、コテツが外に出ようとしているのは、ギルドに正式に登録に行くためだ。

無論、コテツは冒険者ではないし、城の兵士も違う、だが、皆ギルドに登録したという証明のカードを持つているのだ。

理由は、幾らかある。

ギルド自体、国がスポンサーとなり、多大な出資をしている。そのため、国の兵士の手が足りないときは、ギルドから傭兵をかき集めることがある。

その際に、情報の共有を行うなら、ギルドで一括して行う方が手間が少ないのだ。

そしてもう一つ。兵士にもしも遠方への任務があつた場合、現地で国から何らかの援助が出る場合がある。補給物資、もしくは追加の軍資金など。

その際の受け取りに、各地のギルド支部を使うのだ。任地で何かあつた場合も、腕の立つ冒険者が集まりやすいギルドは都合がいい。それ故に王国軍の兵士は全て、冒険者ではないが、ギルドの身分証明を持つている。

そして、ご多聞に漏れず、コテツもまたその身分証明を受け取ることになったのだ。

「手続きは済んでいるらしいから、証明を受け取るだけだが」

そうして、アルベルールは納得したらしい。

一度頷いて、彼は帰る。

「なるほどね。あー、でも俺もその内更新にいかねえとなあ。と、まあこいや、ダンナは『テー』楽しんできてよ」

そう言つて、アルベルはひらひらと手を振つた。
『テー』だと、訝然としないが、『じつする』ことも無く『コト』は歩き出す。

そして、隣を歩いていたリーゼロッテへと視線を向ける。

「さて、リーゼロッテ」

唐突に呼ばれて、驚いたようにリーゼロッテは肩を震わせた。
アルベルとの会話が長かつたらしく、氣を抜いていたようだ。
呼ばれてすぐさま、氣を引き締めようとはばかりに、文字通り肩肘を張る。

「は、はいっ！ なんでしょう？」
「そのギルド本部とやらはどこだ？」
「あ、えっと、こっちですっ」

『コト』の問いに対し、張り切つたようにリーゼロッテが歩き出しだ。

少し早めのペースで、尻尾を揺らしながら歩く。『コト』も、それに続いた。
しかし、果たして何歩歩いた辺りだろ？
『コト』の目の前で、彼女の体が傾いだのだ。

「きやんっ！」

可愛らしい悲鳴が響き、躊躇いたのだと理解したコテツはすぐさまその腕を捕まえた。

斜めに揺りいだ彼女を、引き寄せる様にコテツは腕の中に抱きとめる。

「大丈夫か」

抱きとめられた彼女は、別に怪我もなく、上手く助かつたのだが、コテツが思うよりも数段彼女は動搖していた。

「あ、と、えあ、は、はいっ！　問題あります」

機体に乗つてない時はまるで変温動物と揶揄される鈍さのコテツであるが、この動搖具合はさすがに不自然だと悟ることができた。そして、彼はその不自然さに對し、口を開く。

「どうかしたのか？」

すると、言い難そうにしながらも、結局リーゼロッテは答えてくれた。

「その、優しくされるのって、珍しくて、ですね……、あの。私が転んだり吐きかけるくらいで一度のことと思います」

「……無理だ」

一体どれほど冷たく当たられたんだ、とコテツは思わず半眼になる。

「君は俺に鬼畜になれと」

言いながら、コテツは内心溜息を吐いた。

この世界に着てからそこそここの月日がたつたが、未だにコテツには慣れないものがある。

その一つが、亜人差別だ。

多数が少数を駆逐するのは、世の常であれども、田下動く死体のようなものであるコテツとしては、精力的に動くもの全てが眩しい。常に人を見上げているコテツにとって、見下すのは馴染みがないものだ。

（むしろ、俺より彼女の方が、よほど人間的にできている）

と、思いながら、ふと気が付く。

アルベルとの会話だ。彼は差別を行つていただろうか。

「アルには差別の意図が見受けられなかつたが、どういふことだ？」

差別を受ける 、野蛮な獣の混ぜ物として扱われ、常に見下される亜人のはずだが、アルベルにはそのような空気は見受けられない、どころか褒めるような言葉すら口にしていた。

果たして、アルベルが特殊なのか、それともまた別に理由があるのか。

結果は、

「あ、冒険者の方は亜人を差別しない人が多い、らしいです。実力主義のところらしいですから」

と、言つことらしい。

確かに冒険者としては、単純に身体能力が高いという点が重要になつてくるのだろう。

更に鼻が利くとか耳がいいとかがあれば完璧だ。

(むしる、亜人を重用しないからこそアルトを運用できないのでは
ないか……？)

あざみを満足させられる操縦技術など、世界を回つてもそう見当
たらないだろうが、乗つても大丈夫、という点ならば亜人の方が数
が多いのではなかろうか、とコテツは考える。
そしてそれと同時に、もう一つの考えも浮かんだ。

(いや、逆にそれを恐れているのか……)

アルトを動かすには、常軌を逸した操縦技術が必要である、とは
いえ、体に掛かる負担に耐えられる、というまず第一段階でのハ
ドルが低いのだ。

むしろ人がやるより、望みは高い。

が、それをやると、人と亜人の関係が反転しかねないだろう。な
んせ、アルトは強い。己の乗機だからこそわかる。亜人にその気が
あるかないかは関係なく、人はそれを恐れ、虐げ続けるというわけ
だ。

「まあ、俺には関係の無いことか。案内を続けてくれ」

考えを振り払い呟いて、コテツはリーゼロッテを見た。

「あ、はい」

再び歩き出す一人。

そして、すぐに城下町がコテツの視界へと飛び込んで来た。
思わず、声を漏らす。

「「」して街に出たのは、初めてだな」

「そりなんですか？」

「城の外に出たのは訓練と山賊討伐の時だけだ。自ら外を見て回る余裕は無かつたからな」

そう言つて、コテツは街並みを見つめた。

訓練の際も、山賊の件の時も裏道を通つたため、こつしまじまじと見つめるのは初だ。

見た目上はまさに中世ヨーロッパ。レンガ造りの街並みが、コテツには新鮮に映る。

「活氣があるな」

眼下は、とても賑やかだ。休みだからだろうか。

言つと、リーゼロッテは嬉しげに微笑んだ。

「はいっ。では、はぐれなこよつに手でも繋ぎましょうか?」

そんな、楽しげなリーゼロッテに対し、コテツには断る理由もなかつた。

「ああ」

頷いて、手を伸ばす。

すると、ぴくり、とリーゼロッテの耳と尻尾が反応した。恥ずかしがるように、赤くなり、彼女は耳を垂らす。

「え、あの。えと、冗談……、だつたん、ですけど、その」

「む、そうなのかな?」

「その……、コテツさんは冗談だと思わなかつたんですか?」

「素人だからな。何があるか分からん。経験者に口出しをすべきではない、と思ったのだが……」

「えっと、じゃあ……、その」

おずおずと、リーゼロッテが手を差し出した。

本当に、手を繋げ、と彼女は言っている。それくらいは、コテツにもわかった。

「ああ」

「コテツが、その小さく柔らかな手を握る。そうして、隣り合って一人は歩いた。

「君と手をつないだのは、一回目だな」

「え？ あ、もしかして、隣国との」

「ああ、そうだ」

隣国がステルス戦艦で襲撃を掛けたとき、コテツの手を引いたのは、他でもない、彼女だ。

ビビりなく、感慨深い気分に、コテツは浸る。

「手を引く君が、予想を超えて力強かつたのが、印象に残っている」

何でもない」とのようになにか言つたが、女性に言つべき言葉ではない。

途端に、リーゼロッテは顔を赤くした。

「それは、私が亜人だからでして……」

「こうしてみると、小さな手だ。あの時の、力強さとは、似ても似つかん」

不思議そうに、「コテツは」の手の繋がつた先を見る。
そして、不思議そうに手を見るコテツに対し、リーゼロッテは微笑んだ。

「コテツさんの手は、大きくて優しい手ですよ」

コテツは、反応に窮した。こういったときの反応はビックリべきか、考える。

だが、窮している間に、リーゼロッテは話を続ける。

「私、男の人と手を繋いだのって、初めてです」

「俺じゃあ、役者が違うか？」

自分にはこいつたものは似合わな過ぎる、と言つた言葉に返つてきたのは、まるで叱るような声だった。
まるで、出来の悪い兄を、しつかり者の妹が叱るような、そんな空気。

「ダメですよ。コテツさん。卑屈なのは美德じゃないです」

果たして、客観的に見て自分はどうなのか。

「コテツは考える。

(主観的に見れば、機動兵器に乗る以外に能も価値もない男だ)

客観的な答えなど、永遠に返つては来ない。
結局、わからないからコテツは曖昧な答えで返した。

「善処しよう」

そうして、二人は目的地へと辿り着く。
ギルド本部。
冒険者の総本山、と言つてもいいだろう。

17話 チュインハンド（後書き）

さすが休日、筆が進みます。

次回辺り、ギルド行きます。お約束です。
やっと異世界テンプレらしくなつてきました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6931w/>

異世界エース

2011年10月9日22時54分発行